

增補第三版

136  
16

高等尋常中學師範校受驗用  
高等小學其他諸學校參考書

版權所有

# 日本歷史 試驗 問題 答案

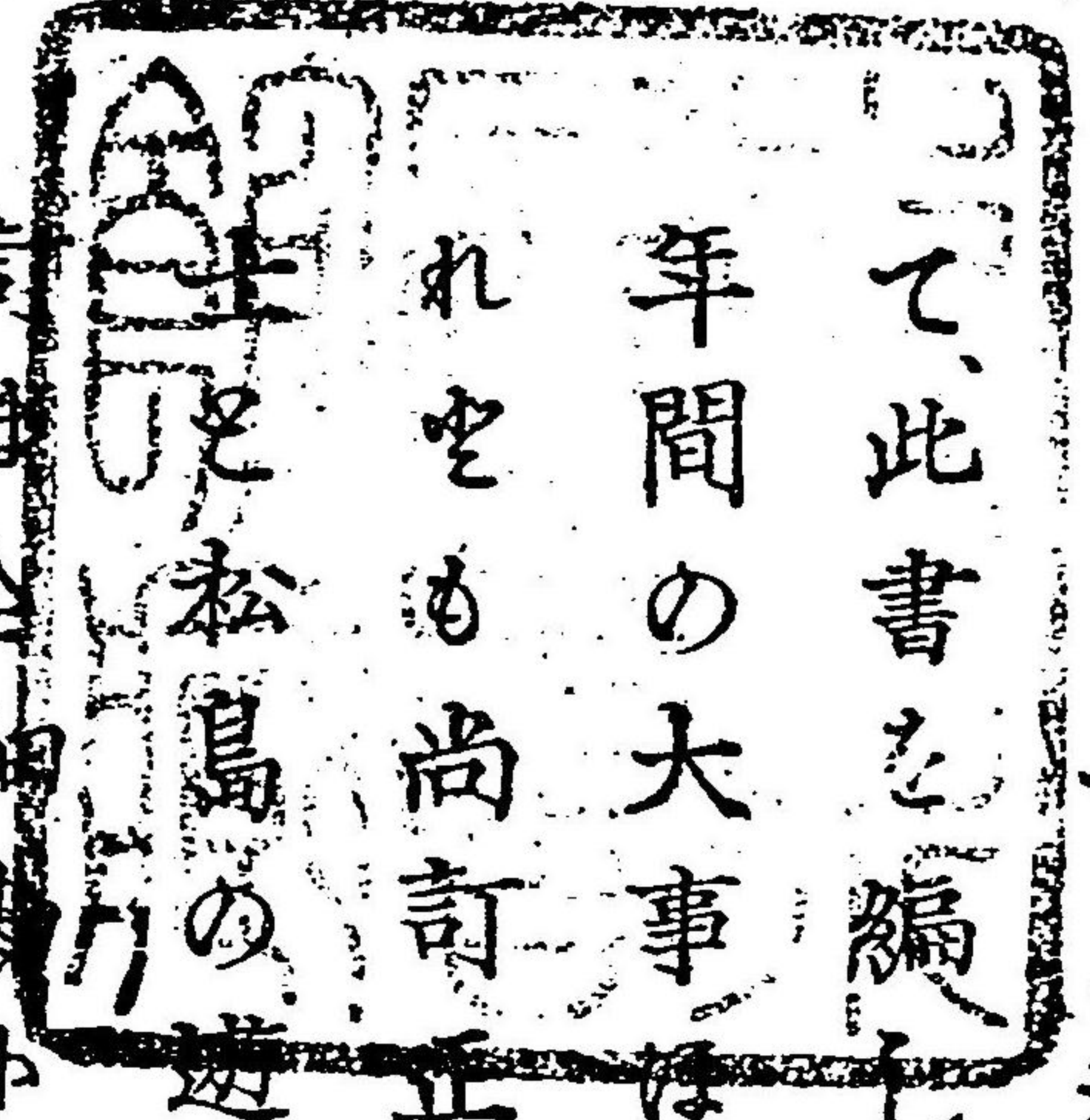
萩野由之校閱  
和田英藏編輯

東京書肆吉川半七發兌

特20

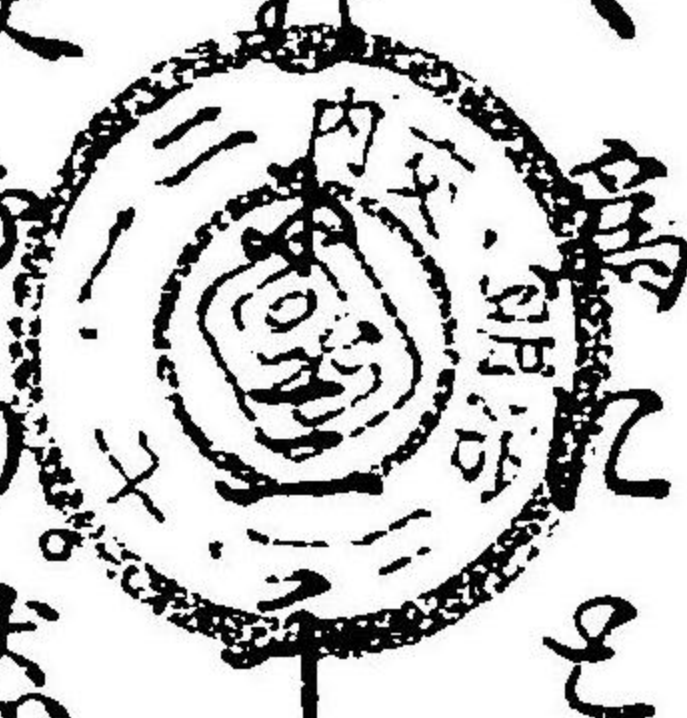
2  
No. 18150

特26  
674



一ノ月 言馬 昆 曼 卷 序 序

こせし七月和田英藏君國史を學はんもの、爲れど  
 て此書を編じ来て是正を請はる、受けて讀む  
 年間の大事は、其要を得簡明にして事小使あり然  
 れをも尚訂正をへき所なきにあらす。時に小中村博  
 言まよ細基小違向らさりき。後旬日を経て歸り来り  
 し、書既よ世に布けり。此頃初版ひさぎ盡くせれり、  
 増訂再版せんとして又校閱を請はる。此よ於て訂正分  
 合加ふるもの十に二三、刪るもの百に一二、殆謬なき  
 如し。夫我邦の宇内の舊邦たり、年所既よ久しく世



東京師範學校受給用  
 小澤成其他...  
 一ノ月...  
 二ノ月...  
 三ノ月...  
 四ノ月...  
 五ノ月...  
 六ノ月...  
 七ノ月...  
 八ノ月...  
 九ノ月...  
 十ノ月...  
 十一ノ月...  
 十二ノ月...  
 明治二十二年六月

吉川

敬請一考其事實の詳細に至りては、望洋  
を明かす所も然り。但、政治の變遷、形勢の沿革  
を明かす所も然り。尋常略史の遠く及ぶ所に  
あらず。初學の人此を以て學海の津筏となさむ。望洋  
の嘆或は少からむ。然れどももし余の校閱者たるを  
以て、これを信せずといふものあらんには、去て碩學

小中村博士の如き人に問へ。

明治廿一年十一月

萩野由之識

凡例

一 此書ヲ編述セシ目的ハ題號ノ表白スルカ如ク、高等尋常中學  
并師範校等ノ受験者ニ便センカ爲メナリ、乃前年第一高等中  
學ノ示セル例題及其他重要ナル事項ノ問題ヲ集メ一々正確  
ナル國史ニヨリテ其答案ヲ附セリ、今初版二版已ニ盡キ茲ニ  
三版ニ附スルニ當テハ更ニ條數ヲ増補シ都合八十題トナシ、  
タ、前諸校ノ試験ニ於ケルノミナラス、孰レノ學校ニ於テモ  
參考書ニ適用スヘキヤウニ編輯セリ、  
一 日本歴史ノ多キ畜數十百部ノミナラス、然レモ大部ナルモノ  
ハ輒讀ガタク、小冊ナルハ其要ヲ得難シ、且所謂日記年代記ニ  
類スル記事多クシテ、全体ノ大勢若クハ制度法制ノ大要ヲ記  
セルモノ少シ、今日ノ學生生徒タラン人、理化博物英語數學等  
心力ヲ勞スヘキ多クノ學科ヲ普修センニハ、多クノ國史ヲ博  
綜シテ、考究スルハ甚難キヲナルヘシ、故ニ此書ハ務テ尋常

略史ニテハ所ニテハ最モ要ナル項目ヲ撰ビテ列載セリ。又  
 普通ノ事實即西遊將軍ノ名トテハ日本武尊ノ實績ニ對シテ  
 カ或ハ八島ノ戰狀足利尊氏ノ人ト爲リテ論スト云カ如キ類  
 ハ小學歴史皇朝史畧ノ類、一二部ニ就テ一讀セハ、ホ、了解ス  
 ヘシ、故ニ此書ニハ畧セリ  
 一事項ハツトメテ前後ノ原因結果ヲ擧ケ、其事ニ關シタルコトハ  
 成ヘク湊合シタレハ、一問題ヲ分テ數問題トシテ見ルコトヲ  
 得ヘシ、故ニ一答案毎ニ問目ヲ標記シテ學習教授ノ便ヲナセ  
 リ、且歴史上ノ套語ニシテ解シカタクモノハ、別ニ註解ヲ標記  
 シタリ、文辭亦險語ヲ用ヒス解シ易キヲ務ム、引用書ノ如キハ  
 概省略セリコレ煩蕪ヲ避ケン所ナリ

編者識

目錄

- (1) 神武天皇東征以前列聖此國ヲ統御セシ有様如何……………一  
 大八州國ノ如何。諸冊二神ノ三皇子ハ誰々ナリヤ。三神分治ノ狀イカン。大國主神ハ如何ナルイナシヤ。天孫筑紫ニ下リシ後中國ノ有様如何。
- (2) 神代ノ時ノ開化ノ程度如何……………二  
 住居ノ狀態如何。食物ハイカン。器具ハイカン。衣服ハイカン。兵器ハ如何。
- (3) 三種ノ神器及其傳來ヲ問フ……………四  
 鏡ト玉トテ造リシ時代ハ如何。劍ハ何地ヨリ出シヤ。何故ニ神器ヲ模造セシヤ。舊神器ハ何地ニ奉祭ルヤ。新神器ハイカナル災厄ヲ蒙リシヤ。南北朝ノ時神器ハイツレニ在シカ。
- (4) 神功皇后ノ三韓ヲ征セシ目的ハ何レニ在リンカ……………五  
 熊襲ハ幾度反セシヤ。筑紫人ノ早ク外國ニ往來セシハイカナル原因ソ。三韓ハ熊襲ノ爲ニイカナルイナシカ。公然政府ニテ外交セシハ何帝ノ時ヨリ始マルカ。三韓ハ何故ニ早ク開化シ居タリヤ。
- (5) 三韓藩屬以後我邦ニ及ホシ、開化ノ大略……………八  
 文學ハイカン。醫術ハ如何。曆學ハイカン。佛法ハ如何。工藝ハ如何。美術ハ如何。

三章ノ源流ヲ解キシメ、傳代トシテモ、

(7) 允恭天皇ノ時氏姓ノ詐冒ヲ正ストハイカナル事ソ……………一一

官制ハ世官ナリシヤ否ヤ。氏トハ如何。姓トハ如何。世職ニテ家格定マリ居ルキハ功罪  
ニヨリテ黜陟スルコトアリヤ無シヤ。何故ニ詐冒ヲナシ、ヤ。

(8) 佛。教。傳。來。始。末。ノ。大。略。ヲ。舉。ケ。ヨ……………一三

初テ佛法ノ來リシ年代ハ如何。崇佛黨ノ主領ハ誰ソ。排佛黨ノ主領ハ誰ソ。佛舍利トハ  
何ソ。兩黨ノ勝敗如何。馬子ノ暴虐。寺及僧尼ノ數。

(9) 佛。教。渡。來。以。前。宗。教。ノ。有。無。如。何……………一六

神道トハ何ソ。神道ト儒道トノ關係如何。

(10) 臣。連。伴。造。國。造。ト。ハ。イ。カ。ナ。ル。モ。ノ。ソ……………同

大臣ハ誰家ノ職ソ。大連ハ誰家之ニ任ズルカ。伴造ト部曲トノ關係イカン。稻置ハ何チ  
掌ルカ。村主ハイカン。首ハイカン。内外百官ヲ概轄シタル稱呼チ何トイフカ

(11) 氏。族。ニ。三。別。ト。イ。フ。コ。ト。ア。リ。其。要。ヲ。問。フ……………一八

(12) 蘇。我。氏。ノ。專。横。ナ。リ。シ。原。因。如。何……………一九

蘇我氏ハ誰ノ子孫ナリヤ。蘇我氏專横ノ原由ハイソ。馬子ハ如何。蘇我氏チ亡ホシ、  
ハ誰ノ功ナリヤ。

(13) 大。化。改。新。ノ。政。ト。ハ。如。何。ナ。ル。變。革。ソ……………二二

郡郷ノ制如何。國司郡司ハ如何。官制如何。戶籍ノコトハイカン。計帳トハ何ソ。班田  
收授法ハイカン。租チ徵スル率法イカン。改新政度ノ重ナルモノハ。

(14) 金。錢。ノ。通。用。ナ。キ。以。前。ノ。通。貨。ノ。有。様。如。何……………二四

當時ハ何物チ通貨トシシヤ。何ニ由テ稻布チ通貨トシシソ。

(15) 錢。貨。ノ。初。ヲ。問。フ。及。其。通。用。ノ。有。様。如。何……………二五

和銅開珍。人民錢チ便トセシヤ如何。

(16) 國。史。ヲ。撰。修。セ。シ。始。ハ。如。何……………二六

舊事紀ハイカン。古事記ハイカン。日本紀ハイカン。

(17) 全。國。ヲ。分。チ。テ。畿。内。七。道。六。十。六。國。一。島。ト。定。メ。シ。ハ。何。時。ノ。頃。ナ。ル。ヤ……………二七

畿内ハ何代ニ定レリヤ。新置ノ國々ハ。廢セラレシ國ハ。

(18) 大。寶。令。ノ。制。定。ハ。如。何……………二八

近江令ハ何帝ノ時ノ制ナルヤ。令律トモニ存スルヤイカン。

(19) 律。令。格。式。ノ。用。ヲ。問。フ……………三〇

(20) 平家朝臣ノ政治ノ時局ノ如何  
歷代帝者ヲ改メシムル事何故ナリ。何故元明帝已後帝ヲ一定セシキヤ

(21) 聖武天皇以後佛法ノ盛ナリシ大概ヲ舉ケヨ  
玄昉。道鏡。行基ハ何チナシ、ヤ。宗派ノ起リハ如何。

(22) 藤原廣嗣ノ反セシ原因如何  
反セシハ何チ目的トセシニヤ。廣嗣舉兵ノ結果イカン。

(23) 王朝ノ盛時徵兵ノ法及軍團配置ノ大略如何  
適齡年限イカン。人員ハイカン。全國軍ノ團數何程アリシヤ。

(24) 軍隊編成ノ法如何  
士官ハイカン。兵員ハイカン。

(25) 王朝ノ盛時蝦夷叛服ノ有様如何  
阿部比羅夫ノ方略イカン。勇將ノ著名ナルモノハ誰々ツ。土地ノ開ケシ順序ハ如何。

(26) 藤原ノ政權ヲ握リタル起原並ニ之ヲ失ヒタル顛末ヲ略述セヨ  
藤原氏ノ四流トハ何ソ。藤氏專權ノ初ハイカン。天慶ノ乱ノ起リ。權ヲ失ヘル原因イカン。

(27) 後三條帝ノ政治ニ如何ナル事蹟アリヤ  
四一

(28) 王朝ノ盛時ニ當リテ輩出セル文學家ノ著明ナルモノヲ舉ケヨ  
五十音圖作リシ人ハ誰ソ。天皇ノ謚ヲ定メシ人ハ如何。書家ニハ。歌人ニハ。女流ニハ。

(29) 王朝時代ノ教育法如何  
學校ノ初。國學トハ何ノ謂ソ。生員ハイカン。學生ノ資格ハイカン。在學年限ハイカン。四科六類トハ何ソ。學生ト醫生トノ割合イカン。私立學校ハイカン。

(30) 前同時代ノ刑法ハ如何  
刑ノ五罪トイフハ如何。絞ト斬トノ輕重イカン。八虐トハ何ソ。官吏ノ刑法ハイカン。

(31) 延喜天曆ノ治ニハ如何ナル政蹟アリシ乎  
延喜ノ治。天曆ノ治。二代ノ政治ハ善治トイフヘキカ。

(32) 院宣ノ政トハ何ソ  
院政ハ何帝ニ始ル。鳥羽ノ院制。後白河ノ院制。後鳥羽ノ院政ハ如何。院宣トハ何ソ。

(33) 陸奥前九年後三年ノ役トハ何ソ其概略ヲ叙セヨ  
前九年ノ乱ノ起リハ何ソ。源賴義ニ助力セシハ誰ソ。武衡家衡ハ何故ニ乱ヲ生ゼシヤ。

(34) 保元ノ乱ノ起原並ニ其終結ヲ叙セヨ  
朝廷將士ノ功ヲ賞セサリシ結果如何。

乱原ハ如何。結局ハ如何。

(35) 平氏ノ勢ヲ得タル所以如何……………五五

平氏ノ用ラレシ始如何。清盛ノ特ム所何レニアリヤ。

(36) 鎌倉幕府創立ノ概略ヲ叙セヨ……………五六

重ナル政廳ヲ何トイフヤ。頼朝兵ヲ起セシヨリ幾年ニシテ征夷大將軍トナリシヤ。

(37) 鎌倉幕府ノ官制ヲ問フ……………五七

幕府ノ重職ヲ何トイフヤ。問注所トハ何ソ。侍所トハ何ソ。地方ノ職制ハ如何。

(38) 北條九代トハ何ソ……………五八

承久ノ乱トハ何ソ。兩六波羅ハ誰ノ世職トナリシヤ。

(39) 兩六波羅ヲ置キシ素心ヲ述ベヨ……………六〇

禪宗ノ二派ハ何々ナリヤ。淨土宗ハ誰ヨリ起リシカ。一向宗ノ中興ハ。日蓮宗。時宗。

(40) 北條氏ノ時代佛法ノ盛衰如何……………六一

新宗ノ輩出セシ原因何レニアリヤ。

(41) 蒙古入寇始末ノ大要ヲ問フ……………六二

(42) 後深草龜山兩統迭立ノ起リハ如何……………六四

兩統迭立ノイハイカナル結果ヲ招キノソ。

(43) 南北朝ノ分レタル順序ヲ述ベヨ……………六五

護良親王僧トナリテ如何ナルヲ謀リシカ。義兵ヲ擧ケシ人ノ重ナルモノハ。中興畢ヘサ

リシハ何故ソ。南北朝相分レシ年數代數如何。

(44) 足利氏ノ權ヲ鎌倉ニ分テタル素心並其結果如何……………六七

足利ノ賓師ニ居リシハ何故ソ。關東兵勢ハ何故ニ京都ヨリ盛ナリシヤ。

(45) 足利將軍ノ國體ヲ辱シメシ一二例ヲ示セ……………六九

義滿ハイカン。義政ハイカン。我國永樂錢多キ故ヲ問フ。

(46) 應仁ノ乱トハ何ソ……………七〇

文筆ノ任ハ誰手ニ歸セシヤ。寺子屋ノ稱ハ淵源アリシヤ。

(48) 戰國ノ際重ナル大名並ニ其割據ノ地方ヲ示セ……………七二

内裏ノ有様ハイカン。織田信長ノ勤王ハイカン。毛利元就ハイカン。上杉謙信ハイカン。

(49) 戰國ノ時勤王ノ志アリシ大名ヲ擧ケヨ……………七四

(50) 鐵砲ハ何レノ時代ニ傳來シ何レノ戰爭ノ頃ヨリ使用シ來リタルカ……………七六

鳥銃初傳ノ地ハ孰レニアリヤ。鳥銃得タル後邦人ノ進歩ハイカン。

(51) 羽柴氏ト毛利氏トノ間親密ニナリタル事情如何……………七七

阿氏締交ノ機會ヲ與ヘタルハ何ニ原因スルカ。親交ノ動議ヲ發セシハ誰ソ。

八

(52) 歐洲ト交通セシ紀原ヲ問フ……………八〇

當時ノ市場ハイツレソ。葡人來航ノ目的ハ初ハ何邊ニ在リシカ。英吉利和蘭來航ノ初ハ。

(53) 德川氏ノ初政ニ鎖國ノ主義ヲ執リタル原因如何……………八三

鎖國主義ヲ召喚セン一ノ原因鎖國主義ヲ召喚セシ二ノ原因

(54) 德川氏ノ時王室ノ有様如何……………八四

禁裏ノ御領イカン。公事上奏ノ順序如何。三職トハ何ソ。

(55) 德川氏ノ王室ニ對セシ政略ノ一端ヲ舉ケヨ……………八五

幕府ヨリ派遣ノ役人ハイカン。幕府ノ内意イカン。

(56) 當時大名ノ制イカン……………八六

大名配置ノ仕方ハ如何ナリシヤ。大名ノ階級ハ幾等ナリヤ。三家ノ待遇イカン。外様譜

代ノ別ウイカン。

(57) 元祿ノ治ヲ問フ……………八八

綱吉ノ善事イカン。綱吉ノ弊政ハイカン。變事多キ極度イカナル事アリシヤ。

(58) 同時代文字ノ發達イカン……………八九

宋學ヲ倡ヘシ始ハ何人ソ。諸侯中學政ヲ勵ミン人々ハ。昌平黌ノ初ハ。學士ノ高名ナルモ

ノハ。國學者ニハ。

(59) 洋學ノ紀原ヲ問フ……………九一

洋學校ノ始。

(60) 尊王論及海防說ヲ唱ヘシ重ナル人物ヲ舉ケヨ……………九二

源光國ハイカナルヲチナシ、ヤ。高山正之ハ如何。蒲生君平ハイカン。林子平ハイカン。

(61) 德川氏ノ時代田租ノ法如何……………九三

田畑ノ等級ハ幾何アリヤ。上方ト關東トノ差如何。年貢割符トハ何ソ。掛札トハ何ソ。

田租畑税ト納期ニ差アリヤ否。田租畑税共ニ金納ナリヤ否。小物成トハ何ソ。全國ヲ概

シテ税率大凡何程ナルヤ。

(62) 同時ニ於ケル刑法ハイカン……………九五

德川氏ノ刑法ハ何時ニ至リテ定マリシヤ。正刑ハイカン。閔刑ハイカン。

(63) 王政復古トハ何ソ……………九六

三職トハ何ソ。玉松操ノ建議ハ如何。神武ノ創業ニ基クトハ何ソ。

(64) 伏見ノ戰ノ本末ヲ問フ……………九八

慶喜ノ兵ヲ帥キテ入京セシハ何ノ故ソ。戰爭ハ幾日間ナリシヤ。官軍ノ主戰ハ何藩ソ。

幕軍敗北後慶喜ハイカニセシヤ。



(65) 奥羽連合ノ始末如何……………九九

連合ノ原因。連合ノ謀主ハ何藩ソ。歸降ノ結果如何。

(66) 五條ノ誓詔トハ何々ソ……………九九

(67) 公議所ノ初及其起リシ所以ヲ問フ……………一〇〇

貢士ハ如何ナル資格ノ者ソ。公議人ハ如何ナルヲ議セシヤ。

(68) 地租改正ノ大要ヲ學ケヨ……………一〇一

改正ハ何等ノ必用ヨリ來ルソ。土地ノ種屬ハ幾種アリシヤ。正租ノ率法幾度變セシソ。

(69) 新律綱領頒布ノ原因如何……………一〇二

假律。新律綱領ハ何ニ基キテ立テルヤ。

(70) 大陽曆頒行ノ年月ヲ問フ……………一〇三

(71) 征韓論ノ起リシ原因イカン……………一〇三

征韓論ノ主唱者ハ誰ソ。外征ト内治トイツレテ先ニセン。

(72) 征韓論ノ結局ヲ語レ……………一〇四

征韓ノ師何ヲ以テ名トナサントセシヤ。太政大臣ノ處置ハ如何ナリシカ。木戸大久保ノ意見イカン。征韓論ヲ排斥セシハ誰ノカソ。

(73) 佐賀ノ亂ノ顛末ヲ問フ……………一〇五

佐賀亂ノ原因イカン。佐賀亂ノ結果イカン。

(74) 神風連ノ亂トハ何ソ……………一〇六

神風連ハ何地ニ起リシソ。何故ニ神風連トイフヤ。

(75) 起業公債トハ如何……………一〇七

金額ハイカン。起業公債ノ償還期限ハイカン。

(76) 維新後財政ノ一斑ヲ聞カン……………同

紙幣ノ下落ハ何程ナリシヤ。官祿税トハ何ソ地租ヲ減シテ何ヲ増シタルヤ。

(77) 朝鮮暴徒我公使館ヲ襲ヒシ顛末ヲ述ヘヨ……………一〇八

朝鮮國王ハイカナル思想ナリシヤ。大院君トハ誰ソ。兵卒ノ乱ハ誰ノ煽動ニ由ルヤ。我公使ハイカニナシ、ヤ。終局ハイカン。大院君ハイカトナリシソ。

(78) 五等爵トハ何ソ……………一〇九

當時華族ノ大數幾何戸ナリシヤ。授爵ヲ勅語ヲ記シ得ルヤ。華族ハ何々ヨリ成リシヤ。

(79) 明治十八年ノ官制改革ハ如何……………一一九

官制ノ改革ハイカナル必用ヨリ起リシソ。新置ノ省局ヲアケヨ。廢止ノ省局ハ何々ソ。改革ノ結果ハイカン。

(80) 上古ヨリ近時ニ至ルマテ政權ノ移轉セル順序ヲ略述セヨ……………一一一

一變。二變。三變。四變。五變。六變。七變。八變。九變。十變。十一變。十二變。始テ神武基業ノ正ニ復セリ。以上本例題八十條、小問目二百六十五項、此内字傍圈ヲ施シタルハ、第一高等中學ノ示セル例題ナリ

増訂 日本歴史試験問題答案

萩野由之校閱  
和田英藏編輯

大八洲國トハ何ソ

(一)

神武天皇東征以前列聖此國ヲ統御セシ有様如何

神武天皇ノ東征以前、即神代ノ事蹟ハ、史乘少ク、邈トシテ詳ナラサレトモ、大

要ヲ見ルヘキモノアリ、

太古ノ時、伊弉諾尊、伊弉册尊、天神ノ勅ヲ受ケテ大八洲國ヲ經營ス、大八洲國

トハ左ノ八大島ナリ、

(一)淡路洲 (二)伊豫二名洲(今ノ四國) (三)筑紫洲 (今ノ九洲) (四)壹岐洲 (五)

對馬洲 (六)隱岐洲 (七)佐渡洲 (八)大日本豊秋津洲(今ノ本土ノ地ナリ)

コノ外ニ數多ノ小嶋アレトモ、其最大ナルモノヲ舉ケテ大八洲國ト云フ、イ

ツレモ海嶋ノ隔テニ依テイフナリ、土地ノ廣狹ニハアラス、二神コレラノ諸

國ヲ平定セシ後、其子天照太神ニ高天原ヲ治メシメ、(即大和地方)素戔嗚尊ニ

ハ根國(出雲石見地方)月讀尊ニハ海原(琉球諸嶋)ヲ治メシム、三神全國ヲ三

諸册二神ノ三皇子  
ハ誰々ナリヤ

三神分治ノ狀イカ  
ソ

大國主神ハ如何ナルヲナシヤ

天孫筑紫ニ下リシ後中國ノ有様如何

分シテ之ヲ治メ、而シテ天照大神其總統ノ權ヲ有セリ、

此後素戔嗚尊ノ子大國主神頗威權アリ、不服不享ノ徒ヲ討テ平ケテ、武力甚強シ、天照太神ノ皇孫瓊々杵尊筑紫ニ下ルニ及ヒテ、大國主神國土ヲ皇孫ニ獻シテ、出雲ニ退居ス、而シテ皇孫ハ筑紫ニ在リテ、皇子彥火々出見尊、皇孫鷓鴣草尊不合尊、三代相繼キ、多ク年所ヲ經タルヲ以テ、中國ハ漸王化ニ遠サカリ、邑ニ長アリ、國ニ君アリ、相互ニ陵轢スルニ至レリ、其酋長ノ重ナルモノハ長髓彦、名草戸畔、丹敷戸畔、兄磯城、弟磯城、高倉下、新城戸畔、居勢祝、猪祝等ナリ

(二) 神代ノ時ノ開化ノ程度如何

神代トイヘハ、世人ハ、天地開闢シテ未年代ヲ經ス、所謂原人時代ノ如ク思ヒ草味蠢愚、禽獸ト相距ルヲ幾モナキ如クニ思フモノアレトモ、大ニ然ラス、伊弉諾尊伊弉册尊二神ノ頃ヨリハ、時勢頗進ミ、大國主神ノ中國ヲ平定セシヨリ後ハ、更ニ一層開化ニ向ヘリ、前條答案ニ述ヘシカ如ク、當時ノ人民ハ既ニ政治社會ヲナスコ此ノ如クナレハ、後世開化ノ度ト比シテ、大差アルハ勿

論ナレトモ、當時ノ勢ヲ察スルニ、開化ノ程度ハ頗意外ノ進歩アリシモノナリ、

住居ノ状態如何

千木鏝木トハ木ヲ交又シテ屋上ニ置クモノ今モ神社ノ屋上ニ遺制ヲ存セリ

食物ハイカン

器具ハイカン

衣服ハ如何

保食神ハ今モ伊勢外宮ニ祭ル神ナリ

兵器ハ如何

十握ハ握ハ其長サヨリ付キタル名ナリ瓊矛ハ玉ヲ飾レル矛ナリ頭槌劍ハ頭ヲ槌

其時代人民ノ生活ノ有様ヲ見ルニ、土人ノ下等ナルモノハ、穴居シテ僅ニ雨露ヲ凌クモノアレモ、上等ノ人民ハ、木材ヲ以テ家屋ヲ造リテ栖ム、屋ハ草茅ヲ用井テ之ヲ葺キ、千木鏝木ヲ置キテ風ヲ防キ、柱ハ地ヲ深く掘リテ之ヲ建テタリ、新婚、生誕、喪葬等ノ大事アル毎ニ、必新居ヲ作ルヲ慣習トス、食物ニハ五穀魚鳥獸肉等ヲ以テセリ、漁獵ヲナスニハ、罟モアリ、罾モアリ、弓矢アリ、舟楫アリ、器具ヲ造リテ以テ捕獲ノ便ヲハカレリ、田畝ヲ作リテ耕耘ヲナシ、米穀ヲ得ルヲ務ム、天照太神ノ御領地ニハ、天狹田、長田等ノ稱アリ、種ヲ播キテハ之ヲ培養シ、溝ヲ通シテハ灌溉ノ便ヲ謀レリ、衣服ハ獸皮ヲ衣ルノミナラス、既ニ布帛ヲ織リテ裁縫シタリ、保食神ハ蠶ヲ養ヒ桑ヲ作ル、天照太神ハ機織ノ法ヲモ施シ玉ヘリ、衣服ノ飾ニハ玉ヲ以テ之ヲ裝ヒ、或ハ手足ノ邊ニハ小鈴ヲモ着ケタリ、其兵器ニハ、十握劍、八握劍、頭槌劍、廣矛、瓊矛、天鹿兒弓、天羽々矢等アリ、斯ノ如ク衣服飲食居住ノ處ヨリ、戰鬪防禦、護身護國

ノ加クセシ劍ナリ

(三)

三種ノ神器及其傳來ヲ問フ

三種ノ神器トハ、八咫鏡、草薙劍、八坂瓊曲玉是ナリ、此三種ハ天祖天照太神ノ皇孫ニ授ケテ、余ヲ見ルカ如クセヨト勅ヒシヨリ、相傳ヘテ皇位繼承ノ寶璽トス、

鏡ト玉トヲ造リシ時代ハ如何  
劍ハ何地ヨリ出シヤ

何故ニ神器ヲ摸造セシヤ

舊神器ハ何地ニ奉祭セルヤ

新神器ハイカナル災厄ヲ蒙リシヤ

天徳ハ村上ノ年

號

寛弘ハ一條ノ年

號

長久ハ後朱雀ノ年

號

畫御座ノ劍トハ

天皇ノ常御殿ニ

アル御劍ナリ

南北朝ノ時神器ハ  
イツレニ在リシカ

(四)

神功皇后三韓ヲ征セシ目的ハ何レニ在リシカ

仲哀天皇ハ神功皇后ト筑紫ニ幸シ、熊襲ノ反セシヲ討ケテ克タス、遂ニ陣中ニ崩ス、皇后神教ヲ請ヒ、遂ニ三韓ヲ征スルノ議ヲ決シテ、兵備ヲ促シ、對馬ヲ發シ、直ニ新羅ヲ降シケレハ、高麗百濟ミナ風ヲ望テ來附ス、仍テ府庫ヲ封シ、圖籍ヲ收メ、金銀彩色綾羅絹織ノ類、舟八十艘ヲ以テ每歲入貢ノ定額トナセリ、神功ノ三韓征伐トハ即是ナリ、

此征伐ノ目的ハ何レニ在ル乎ノ問題ニ至リテハ、一ノ目的ヨリ起ルコトヲ答ヘントス、

其一ハ元來熊襲ノ反スルヲ屢シニテ、大師ノ征討ヲ勞セシト仲哀帝ノ時マテ凡三次ナリ、熊襲ハ西州ノ險要ニ據リ、海ヲ隔テ、三韓ニ隣ルカ故ニ、古ヨリ其中ノ豪族酋長等ハ私ニ韓土ハ固ヨリ、支那内地ニマテ往來航渡シテ貿易ヲナシ、既ニ後漢ノ時其光武帝ヨリ私ニ封爵ヲ受ケテ、委奴國王ナト、稱セシモノアルニ至レリ(此事後漢書ニ見エタリ、此時光武ヨリ受ケタル金印、近頃筑前國ノ土中ヨリ掘出シテ、其模印上野ノ博物館ニ出タリ、委奴國トハ筑前國伊弉縣、即今ノ怡土郡地方ナレハ、此地ノ酋長等ハ當時盛ニ往來交通セシモノナリ)此故ニ九州地方ハ財貨ニモ富ミ、且熊襲固有ノ慄悍ナル性質アルヲ以テ、毎ニ之ヲ恃ミテ反服常ナク、王師ノ勇健トイヘモ、往々平定ニ勞セシモノト見エタリ、カ、ル勢ナレハ新羅カ直接ニ熊襲ニ後援シタリヤ否ハ詳ナラサレトモ、間接ニ其根據ヲ固フスル處ノ貨財ニ助力シタルトハ明瞭ナルナリ、サレハ熊襲ノ巢窟ヲ勤シテ後日ノ患ヲ除カンニハ、其根據ト賴

熊襲ハ幾度反セシヤ

筑紫人ノ早ク外國ニ往來セシハイカナル原因ソ

三韓ハ熊襲ノ爲ニイカナルヲチナシカ

公然政府ニテ外交セシハ何帝ノ時ヨリ始マルカ  
三韓ハ何故ニ早ク開化シ居タリヤ

ム所ノ三韓ヲシテ我ニ内附セシムルニ如カサルナリ、即熊襲ノ後援ヲ絶タントスルニ在ルナリ、  
其二ハ 文物土産ヲ輸送セシメントスルニ在ルト是ナリ、初垂仁天皇ノ時任那入貢シテ、公ニ外交ノ事創マリ(私ニ人民ノ相往來セシトハ此前ヨリアリシ者ナリ)朝廷ニテモ三韓ハ支那ト接壤シテ、我邦ヨリモ早ク開化シ居ンルヲ知リ、其文學技藝工業等我國ニ採用シテ益アルモノ多キヲテモ知リ、彼國ヲ我藩屬トスルキハ我國ノ開化ニモ影響少ナカラサルヲ考ヘテ、遂ニ此征討ノ役ハ始マレル者ナルヘシ、其故イカニトナレハ、皇后ノ神勅ト稱シテ群臣ニ宣言セシ詞ノ中ニ曰、天皇何熊襲ノ服セサルヲ憂ンヤ、是脊之空國ナリ(財貨ニ乏シキ國ノ義ナリ)豈兵ヲ舉ケテ伐ツニ足ランヤ、茲國ニマサリテ寶ノ國アリ、金銀彩色多ク其國ニアリ、是ヲ新羅國トイフ若能吾ヲ祭ラハ(神自吾トイヘルナリ)乃ニ血ヌラスシテ其國必服セン、熊襲モ亦服セント、又皇后征伐ノ事ヲ畢ヘシ時先府庫ヲ封シ圖籍ヲ收メ、金銀彩色綾羅絹縑等ノ歲貢八十艘ヲ定メタルモ、以テ其意ノ在ル所ヲ見ルヘシ、コレヨリ後縫衣工、

冶工、釀酒工、醫師、木工、曆、天文、文學、佛教等ノ工人、學者等、年々入朝ノ其技藝ヲ我ニ傳ヘ、我邦舊來ノ技藝ト短長相補フテ本邦ノ開化コレヨリ一新セリ、然レハ神功皇后遠征ノ意、熊襲ヲ討ツト共ニ三韓ノ後援ヲ絶テ、大日本ノ武威ヲ遠境ニ耀シ、又ソノ技藝以下ヲ貢上セシメテ、大日本ノ文明ヲ進歩セシメントスルニアリシナリ、

(五)

三韓藩屬以後我邦ニ及ホシ、開化ノ大略  
神功皇后ノ三韓ヲ征服スルマテハ、東ノ方ニハ蝦夷、西ノ方ニハ熊襲アリ、孰レモ崛起ニシテ叛服常ナカリシカハ、政府ノ權力未遠ニ及ハサリシニ、三韓服從シテ熊襲亦叛カス、此ヨリ中央集權漸固クシテ施政上大ニ其便ヲ得タリ、故ニ三韓ニ其技術文藝ヲ貢セシメテ固有ノ制度ノ短所ヲ補ヒ、百事大ニ面目ヲ改ム、左ニ其大概ヲ舉ケン

文學ハイカン

(文學)應神帝ノ時、百濟ヨリ阿直岐王仁等ノ學士來リ、論語千字文以下ノ書籍ヲ上リ、文教興ル、(但文字ハ此前ヨリ傳ハルトイフ説アリ)後又五經博士段揚爾トイフモノモ來レリ、履中帝ノ時ニハ既ニ諸國ニ史官ヲ置テ、言事ヲ記サシムルマテニ進歩セリ、

醫術ハイカン

(醫術)允恭帝ノ時、新羅ノ大使金波鎮漢紀武來ル、此人藥方ヲ知り、天皇ノ病ヲ治ス、尋テ又醫ヲ其國ニ召ス、欽明帝ノ時醫博士來ル、於是固有ノ和方ノ外、亦韓法ノ醫術アリシナリ、藥物學モ百濟ヨリ貢セシ、欽明天皇ノ時ニアリ、

曆學ハイカン

(曆學)コレモ欽明帝ノ時、百濟ヨリ曆本曆博士等來ル、曆博士ノ名ヲ固德王保孫トイフ、推古帝ノ時、百濟僧觀勒曆本ヲ貢ス、書生ヲシテ就テ學ハシム、後遂ニ曆法ヲ用フルニ至レリ、天文學モ觀勒ソノ書ヲ携ヘ來ルニ始マレリ、

佛法ハ如何

(佛法)繼體帝ノ時、南梁ノ人司馬達等來リ、佛法ヲ弘メントスレ、人信セス、欽明朝百濟ヨリ佛像經論ヲ貢シテ、大臣蘇我氏之ヲ贊助シケレハ、漸國內ニ行ハレ、人ノ思想更ニ一變セリ、

工藝ハ如何

(工藝)雄略帝ノ時木工猪名部眞根アリ韓人ノ裔ナリ、造家造船ニ巧ニシテ、妙技ノ名アリ、敏達帝ノ時ハ造寺工造物工等來リ、崇峻帝ノ時鑪盤工來ル、(冶工ノイナリ)瓦工ハ百濟ヨリ來リ、革工ハ高麗ヨリ至ル、陶工織工紙墨工ノ如キ亦皆三韓ニ取レリ、就中織工ノ如キハ韓人支那人共ニ來リ、大ニ進歩ヲ見

鑪盤工ハ塔ノ上ニ置クモノヲ作ル職人ナリ其物ハ鑪治シテ作ルナリ

美術ハ如何

ルモノアリ、タ、養蠶織絹ノ盛ナルノミナラス、錦綺綾羅ヲモ織出スニ至レリ  
 (美術)書畫モ亦韓法ヲ參ユ、サレト書ハ專韓法ニヨラス、概六朝唐初ノ風ニ似タリ、畫ハ雄畧帝ノ世ニ傳ハリ、佛法傳來ノ後ハ需用益多ク、彫刻ハ佛法傳來シテ造佛工等相踵テ來ル(第八問ノ答案ヲ參考セヨ)其遺刻タマ〜南都諸寺ニ寶重スルモノアリテ、技巧ノ進歩ヲ知ルニ足レリ、音樂ハ固有ノ舞樂ノ外、佛法ト共ニ韓樂來傳シ、從來ノ樂器琴笛ノ外更ニ種々ノ樂器サヘ行ハレヌ、

右ノ如ク三韓ノ内附セシ以來、其開化ヲ輸送シ來リテ我國文明ノ進歩ヲ見ルニ至レリ

(六)

韓地叛服ノ有様イカン

神功皇后ハ三韓ヲ藩屬セシメタレ共カノ韓地ハ遙海ノ外ニ在リテ、航行マタ今日ノ如ク便ナラス此ヲ以テ叛服常ナク、或ハ隣邦ヲ侵畧シ(任那ノ亡サレシ類)土地ヲ擴メンテ謀リ、機ヲ見テハ我ニ背キテ跳梁セントシ、朝貢ヲ

三韓ノ内最叛服常ナキハ何國ナリヤ  
 百濟ハ如何

征韓ノ大ナルモノ何度ナリヤ  
 三韓ノ藩屬ヲ解キシハ何時代ナリヤ

(七)

允恭天皇ノ時氏姓ノ詐冒ヲ正ストハイカナル事ソ

コノ答案ヲ述ヘンニハ、先當時ノ政治ヨリ言ハサレハ解シカタキヲアリ、因テ先之ヲ畧叙セン、神武天皇中國ヲ平定シテ功臣ヲ賞セシヨリ後、孝德天皇ノ大化ノ改制マテ、凡一千三百年許ノ間ハ、所謂封建政治ニ似テ今ノ時勢ト甚異ナリ、中央政府ノ官職タル臣連ヨリ、地方官タル國造縣主ニ至ルマテ、ミナ世職ニテ代々同職ナリシモノナリ、此故ニ人々皆其家柄ノ貴キヲ欲シ、而シテ家柄ノ尊卑ハ重ニ其出自ノ尊卑ニヨルナナルカ故ニ、皇胤神胤ナトハ

官制ハ世官ナリシヤ否ヤ

概其職モ重キ方ヲ掌リ、外國人ノ歸化セシモノ、子孫、即蕃族ナトハ從テ賤職ニアリシカ故ニ、卑職ナル類ナリ、

氏トハ如何  
姓トハ如何

次ニ氏姓ノ「氏」ハウチ姓ハカハ子トヨム、コレ我國ノ古言ナリ、氏トイフハ一族世職ニ付タル名ナリ、(前ニイフ如ク世職ニテ代々ツギ他族ニ移ラサルカ故ナリ)姓トイフハ尊卑ノ階級ニテ、即家格タトヘハ華族士族平民ナトノ階級ノ如シ、尙例セハ左ノ如シ、

中臣連 ナカトミノムラジ ハ中臣ハ氏ナリ、代々祭祀ノ事ヲ掌ル、連ハ其氏ノ階級、即姓ナリ、

大伴連 オホトモノムラジ 大伴ハ氏ナリ、代々武官ノ家ナリ、連ハ其氏ノ階級、即姓ナリ、

膳臣 カシハラン 膳ハ氏ナリ、代々天皇ノ御膳方ノ家ナリ、臣ハ姓ナリ、

酒部公 サカベノキミ 酒部ハ氏ナリ、代々天皇供御ノ酒ヲ作ル家ナリ、公ハ其姓ナリ、

文首 フミノ 文ハ氏ナリ、代々朝廷ノ記録ヲ掌ル家ナリ、首ハ其姓ナリ、

其他スヘテ此例ナリ、氏ハ即ソノ職官ノ如キモノナルカ故ニ、甚多シトイヘル、姓ニ至リテハ尊卑ノ階級ナルカ故ニ、臣、連、造、公、首、國造、縣主、稻置等ノ數者ニ過キス、猶今ノ世、官名ニハ種々アレル族ニハ階級少キカ如シ此ノ如クナルカ故ニ、連ノ家ハ代々連ニシテ首ノ家ハ代々首ナリ、サレバ若大過失アルハ一等降サル、トアリ、允恭天皇ノ時鬪鷄國造(大和國邊ノ地ノ長官)カ皇后ニ不禮アリテ稻置ニ下ケラレタル類是ナリ、

世職ニテ家格定マリ居ルハ功罪ニヨリテ黜陟スルコトアリキ無シヤ

何故ニ詐冒ナシトヤ

(八)

佛教傳來始末ノ大略ヲ舉ケヨ

當時ノ制ホ、右ノ如シ、サテ諸氏共ニ子孫蕃衍スルニ及ヒテハ、本家分家甚多クナルニ從ヒ、人々卑テ避ケテ尊ヲ願フ人情ヨリ、造姓ノモノハ連姓ナリトイヒ、連姓ノモノハ臣姓ナリトイヒ、斯クイフニ就テハ神胤ノ者ハ皇胤ナリトイヒ、蕃族ノモノモ神胤ナリトイヒ、相互ニ詐冒サナスニ至ル、コレ自然ノ理ナリ、允恭天皇ノ時ニ至リテハ、神武帝ヲ距ルコト年代遠ク、カクノ如キコト多クシテ、臣民家格ノ貴賤紛乱セシカ故ニ、詔シテ此詐冒ヲ正サレシモノナリ(尙、第十第十一題ノ答案ヲ參考スヘシ)

初テ佛法ノ來リシ年代ハ如何

佛法ノ我國ニ傳來セシコト、世ミナ欽明帝ノ時百濟ヨリ至ルヲ始ナリトス、然レバ元亨釋書ニ據ルニ此時ヨリ二十年前、既ニ繼體天皇ノ十六年南梁人司馬達等ト云フモノ來リテ、布教ニ從事セリ、然レバ人未之ヲ信セス、歸依セル



崇佛黨ノ主領ハ誰

排佛黨ノ主領ハ誰

者アルヲナカリシトイフ、斯テ欽明天皇ノ時ニ及テ百濟ヨリ佛像經論及佛具ヲ獻シ、上表シテ其功德ヲ讚美セリ、帝群臣ヲシテ其禮スヘキヤ否ヲ議セシム、蘇我稻目之ヲ禮セント請フ、物部尾與中臣鎌子俱奏ス、國家宗廟百神儼在ス、別ニ蕃神ヲ敬ス可ラスト、帝之ニ從ヒ、佛像ヲ稻目ニ賜フ、稻日向原寺ヲ建テ、之ヲ奉ス、時ニ諸國大ニ疫ス、尾與等奏ス佛ノ致ストコロナリト、乃寺ヲ燒キ佛像ヲ難波ノ堀江ニ投ス、明年天皇河内國ニ漂着セシ樟木ヲ以テ佛像ニ軀ヲ造ラシム、敏達帝ノ時ニ至リテ百濟又經論、及律師、禪師、比丘尼、呪禁師、造佛工、造寺工各一人ヲ獻ス、後又新羅ヨリモ佛像ヲ獻ス、此ノ如ク頻年佛像經論僧尼等到來シタレトモ、未大流行ニハ至ラザリキ、十三年(敏達帝ノ)遣百濟使彌勒ノ石像(佛ノ名)及佛像各一軀ヲ得テ還ル、大臣蘇我馬子ハ稻目ノ子ナリ、世々佛法ヲ信スルヲ以テ請テ之ヲ受ケ、僧尼ヲ聘シ衣服ヲ供シ、佛殿ヲ建立シテ之ヲ崇奉ス、司馬達等此時尙此國ニ留ル、馬子ノ佛ヲ信スルヲ機會トシテ之ニ附從セリ、達等會テ佛舍利(佛骨ノ玉石ノ如クナルモノ)ヲ齋飯ノ中ヨリ得テ馬子ニ獻ス、馬子試ニ鉄槌ニテ之ヲ摧カントスレモ摧ケス、

佛舍利トハ何ソ

之ヲ水ニ投スレハ浮沈其欲スル所ニ從フ、馬子遂ニ佛法ノ奇特ヲ信シ、茲ヨリ其教大ニ蔓衍セリ、此時物部守屋中臣勝海亦大臣ニ次キテ政務ヲ執リテ權勢アリ、佛法排斥論ヲ持シテ帝ニ奏シ、近年惡疫ノ流行スルハ全ク崇佛ニヨリテ國神ノ譴責スルナリ、速ニ之ヲ斥ケント、乃佛像ヲ燒キ寺塔ヲ毀テ、僧尼ヲ擿ツ既ニシテ馬子亦請テ之ヲ禮セントス、天皇詔シテ汝獨コレヲ行ヘ、他人ヲシテ爲サシムルト勿レト、馬子大ニ悅ヒ、僧尼ヲ禮シ、新ニ精舎ヲ營ム、用明天皇ノ時ニ至リ、厩戸皇子素佛ヲ信シ、三寶佛法僧ノ三ヲイフヲ祈念ス、天皇病スルニ及テ亦之ニ歸依セントス、守屋勝海之ヲ沮ム、而馬子之ヲ慫慂シ、僧ヲ延テ禁中ニ入ル、守屋怒ル、コレヨリ厩戸馬子ト守屋勝海ト怨隙アリ、厩戸馬子兵ヲ以テ二人ヲ攻メテ之ヲ殺ス、此ヨリ厩戸馬子共謀シテ佛法ノ弘通ヲ圖ル而シテ馬子益專横ナリ、崇峻帝立テ已ニ不利ナルヲ知リ、私ニ人ヲシテ天皇ヲ弑セシムルニ至ル、厩戸皇子知テ咎メス、唯曰ク天皇ノ過去ノ報ナリト、措テ問ハス、一人マタ肘ヲ掣スルモノナキヲ以テ、大ニ弘教ノ力ヲ盡クシ、二韓又シキリ佛經僧尼以下ヲ貢ス、於是欽明帝ノ十二年ヨリ推古

兩黨ノ勝敗如何

馬子ノ暴虐

寺及僧尼ノ數

帝ノ時マテ七十二年間ニ、四十六ヶ寺八百十六人ノ僧ト五百九十六人ノ尼アルニ至レリ、

(九) 佛教渡來以前宗教ノ有無如何

佛教ノ未タ來ラサリシ前、我國固有ノ神道アリ、忠孝仁義等ノ名ナシトイヘ  
凡其實ハ白人々ノ心ニ根サシ、君主ニ盡クストコロ、國家ニ對スル所、祖先ノ  
德ヲ追念スルモノ、ミナ備ル、コレヲ神道ト云フ、而シテ禍福吉凶枉直ノ事ミ  
ナ神ノ冥助ヲ得テ裁決スルノ慣習ナリキ、其後儒教入りテ頗ル人心ニ影響  
ナ與ヘタレトモ、其主義ハ神道ト大ニ相補助スル所アリテ相悖ラス、佛法ハ  
未來ノ快樂ヲ主トシ、現世ヲ以テ假トナスカ故ニ、所謂忠君念祖ノ志ヲ薄カ  
ラシメ遂ニ、天皇ヲ弑シタル蘇我馬子ノ如キモノアリ、父ヲ殺セシ僧モアリ  
キ、コレニ因テ天子ノ威嚴臣子ノ忠厚ハ大ニ損シタルモノナリ、但社會ノ文  
物ハ、佛教渡來以後百事頻繁ナルカ爲ニ、工藝技術ノ如キハ多少ノ進歩ヲ現  
ハスニ至レリ、

神道トハ何ソ

神道ト儒道トノ關係如何

(十) 臣連伴造國造トハ如何ナルモノソ

己ニ上ニイヘルカ如ク神武天皇天下ヲ平定シテ、大ニ功臣ヲ封シ、國造縣主  
等ノ職ヲ置キシヨリ、歷朝其聖緒ヲ續キテ、内外ノ職漸備ハリ、其制孝德天皇  
ノ大化ノ改新マテ繼續シタリ、即此間ハ所謂封建制度ニ似テ、百職ミナ世襲  
ナリ、當時中央政府タル朝廷ニアリテ、大政ヲ執ルモノ、臣姓ノ族長コレヲ大  
臣トイヒ、連姓ノ族長コレヲ大連トイフ、大臣ハ武内宿禰ノ子孫世々之ニ任  
シ、大連ハ大伴連物部連ノ兩家世々之ニ任スルヲナリ、此二族ハ百職ノ長ナ  
リ、是ヲ略シテ臣連トイフ

大臣ハ誰家ノ職ソ  
大連ハ誰家之ニ任  
スルカ

其外ニ種々ノ氏アリ、中臣氏ハ世々祭祀ヲ掌ルノ職ナリ、玉作連ハ代々玉ヲ  
彫琢スルヲ職トシ、土師連ハ陶器ヲ作ル職ナリ、春米連ハ天皇供御ノ米ヲ  
春テ輸送シ、鳥取造ハ供御ノ鳥ヲ捕リ、膳臣ハ天皇ノ御膳ヲ調進スルヲ職  
トシタリ、コノ外尙多シ、概シテ伴造トイフナリ、臣連ト伴造トハ共ニ在京ノ  
官ナリ、(伴造ノ中ニハ、希ニハ地方ニ在ルモアレト)伴造ニハ各氏皆所屬ノ部  
曲アリ之ヲ部曲トイフ、タトヘハ鳥取造ノ下ニ鳥取部アリ、春米連ノ下ニ春  
米部アルカ如シ、コレハ造ノ命ヲ奉シテ事ニ從フモノナリ、猶主從ノ關係ノ

伴造ト部曲トノ關係如何

稻置ハ何ヲ掌ルカ  
村主ハイカン  
首ハイカソ

内外百官ヲ概轄シ  
タル稱呼ヲ何トイ  
フカ

(一十)

如キモノナリ、  
地方官ニ至リテハ、國造ハ一國ヲ治メテ、勸業租稅凡テ地方ノ政務ヲ掌ル、縣  
主マタ國造ト相似テ較下レリ、稻置イナギトイフハ租稅ノ出納ヲ預リ、村主ムラウヂ、首等ウヂハ  
戶籍等ノ類ニ與レリ、即一郷一村ノ長ナリ、皆世官世祿他ノ職ニ轉スルコトナ  
ク、代々コレヲ務ムルコトナリ、  
サテ此地方官ト、在京諸官ナル諸族ヲ概稱シテ、臣連伴造國造トイフ、地方官  
ハ國造ノ外、縣主、稻置、村主等ノ職アレトモ、就中國造ハ其上官ナルカ故ニ、  
概シテイヘルナリ、斯ノ如ク一口ニイヘハ臣連伴造國造トテ、少キヤウナレ  
共、國造ノ職ノ家ハカリニテモ百四十餘アリ、從テ縣主稻置ナトモ之ニ准シ  
テ多カルヘク、伴造ハ古モ、ヤソノトモ百八十部トイヘハ其多キヲ知ルヘシ、臣連兩族トテ  
モ別家支流アレハ亦多シ、サレト概稱シテ臣連伴造國造トイフキハ、在京ノ  
執政官雜職官ト、地方官トイフコト見テ大差ナシ、  
氏族ニ三別トイフコトアリ其要ヲ問フ  
三別トハ、一ニ皇別、二ニ神別、三ニ蕃別ナリ、皇別トハ神武天皇以下、代々ノ

(二十)

蘇我氏ハ誰ノ子孫  
ナリヤ

天皇ノ御胤ヨリ出タルモノナイフ、神別トハ神代ノ諸神ノ裔ニテ、即大國主  
神ナトノ子孫モ此中ナリ、蕃別トハ外國ヨリ歸化セシ人ノ子孫ナリ、韓人モ  
アリ支那人モアルナリ、古ニハ漢靈帝ノ子孫、吳王夫差ノ子孫ナトイフモノ、  
此國ニ歸化シタリ、  
此區別ハ、古人ハ人々我家系ヲ重シ、其出自ヲ明ニシテ失ハサル風俗ニテ、今  
ノ世ト大ニ異レリ、故ニ諸氏族類衆ク増殖シ、人口繁多ナリトモ、皆コノ區別  
ニヨリテ次第ヲ立テタリ  
維新後、華族五百餘氏ヲ類別シテ、部族ヲ分ナシキモ、此制ニヨリテ皇別、神  
別、外別ト立テタリ、  
蘇我氏ノ專横ナリシ原因如何

蘇我氏ハ武内宿禰ニ出ツ、武内宿禰ハ景行成務仲哀應神仁德ノ五代ノ天皇  
ニ歷事シ、忠正勤勉功勞頗ル多シ成務天皇ノ時ニ始テ大臣トナル神功皇后  
ノ征韓ノ役ニハ、帷幄ノ中ニアリテ軍事ヲ參畫シ、又應神帝立ニ及テハ幼主  
ヲ補佐シテ大功アリ、此ヲ以テ自權勢アリ、宿禰長壽ニシテ亦子ニ富メリ、其

蘇我氏專横ノ原由  
ハイカン

馬子ハ如何

第三子ヲ蘇我石川宿禰トイフ、コレヨリ此族ヲ蘇我トイフ、父祖ノ功ヲ以テ世々朝廷ニ事フ、稻目ニ至リテ稍政權ヲ擅ニセリ、初神武天皇已來十數代ノ間時ニ盛衰沿革アレトモ政權ハ常ニ天皇ヨリ出テ、臣族ノ之ヲ專領スルコトアラザリキ、蘇我盛ナルニ至テ一時政權其手ニ歸セリ、稻目ハ宣化欽明ニ代ニ歷事シテ大臣トナル、其子馬子父ニ襲キテ大臣トナリ、敏達用明崇峻推古ノ四朝ニ仕フ、而シテ欽明帝ノ皇后及妃ハ稻目ノ女ニシテ、其生メル子、用明崇峻推古ノ三帝ナレハ、馬子ハ外戚ノ權ニ賴リテ朝政ヲ專ニセリ、然レモ大連物部尾與其子守屋等朝政ニ參與スルカ故ニ、ヤ、意ノ如クナラザリシニ、馬子廐戸皇子ト謀リ物部氏ヲ亡ボスニ及テハ、亦憚ル所ナク、崇峻帝其專横ヲ嫉ムヲ聞クニ及ヒテ遂ニ弑逆スルニ至レリ、乃群臣ト謀テ女帝推古天皇ヲ立ツ、又我家ノ女ノ生トコロニシテ同黨ナル廐戸ハ皇太子トシテ政ヲ攝ス、太子薨シテ後ニ百段ノ政ミナ其手ニ歸ス、大臣ノ位ニ居ルコト五十五年、子蝦夷エミシ僭横ナリ、皇極帝ノ代ニ已カ祖廟ヲ造リ又生前ニ壽藏ユキカズ(生前ニ立ツル墓ナリ)ヲ建テ、儀式制度ミナ天皇ニ擬ス、其居ル處ヲ宮ミヤマタハ御門ミカドト稱ス

蘇我氏ヲ亡ホシ、  
ハ誰ノ功ナリヤ

ルニ至レリ、其子入鹿マタ父ニ勝リテ國政ヲ專ニシ、天皇ヲ蔑如シ、其領地ノ地方ニアルモノハ、恣ニ人民ヲ驅使シ、公民ヲ掠メ公領ヲ奪フニ至レリ、畢竟稻目已來權勢ノ歸スル所、次第ニ馴致シテ此ニ至リ、其極度ニ達セリ、中臣鎌足中大兄皇子(即天智天皇)ト謀リテ、密ニ之ヲ斃サントス、會ニ韓ノ使者入貢シテ表文ヲ上ル、中大兄鎌足ト此機ニ乘シ、卒ニ入鹿ヲ大極殿ニ誅ス、蝦夷之ヲ聞キ、其第ヲ燒キテ自殺ス、蘇我氏遂ニ亡ヒタリ、コレヨリ後、政体一變シテ大化ノ政新トナリヌ、

(三十)

大化改新ノ政トハ如何ナル變革ソ

紀元一千四百年代ノ初メ、孝德天皇ノ時漢土隋唐ノ制度ヲ參酌シテ、新ニ郡縣ノ制ヲ布キ百度コ、ニ改マレリ、コレヲ改新ノ政トイフナリ、大化トハ其年號ニテ、此時マテ末年號ヲ建テタルコトハナカリシテ、初テ此號ヲ立テ、天下ノ耳目ヲ一新セリ、其改新ノ事實中重ナルモノハ左ノ如シ、

土地ノ事、從來全國ヲ分テテ百四十餘國トナシ、其下ニ縣アザマアリ縣ノ下ニ邑アリ、國造縣主等ノ領地ト朝廷ノ公領ト犬牙錯綜セルヲ廢シ、國ト郡ト里トヲ

郡縣ノ制如何

國司郡司ハ如何

定ム、里ハ又郷トモイフ、民戸五十戸ナ一里トシ、(里町間ノ里ニアラス、所謂  
 サトノ義ナリ)四十里アル地ヲ大郡トス、二千里以下四里以上アル地ヲ中郡  
 トシ、三里アル地ヲ小郡トス、凡テ郡ニ三等アリ、皆其地ノ戸口ヲハカリテ之  
 ヲ立テタリ、(此後ニ國ニモ等級アリテ、大上中下ニ分テリ)一國ヲ治ムルモノ  
 ナ國司トイヒ守(長官)介(次官)掾(目等)ノ屬官アリ、概三四年毎ニ京ヨリ交替  
 シテ上リ、土着世襲ノ弊ヲ除ケリ、郡ニハ郡司トテ大領小領主政主帳等ノ官  
 アリテ之ヲ治ム、郡司ハ大抵土着ノ人、其地ノ事情ニ明ナルモノヲ取ル、故ニ  
 古ノ國造ヲトテ任スルヲナリ、郡司ハ今ノ郡長ノ如ク、國司ハ今ノ縣知事ノ  
 如シ、又里ニハ里長(後ニ郷長トイフ)アリテ郷内ノ人民ヲ治ムルナリ、  
 八省百官ノ事、中央政府ニテハ神祇太政ノ二官、及中務、式部、治部、民部、兵部、  
 刑部、大藏、宮内ノ八省ヲ創置シ、冠位ヲ定メテ三十階トシ、諸省各所務ヲ分掌  
 シ、官吏ニハ職ニ應シテ封祿ヲ賜ヒ、昔ノ如ク世職ノ事ヲ少專人材ヲ登用シ、  
 相轉任スルヲトナシ、賞罰ヲ嚴ニセリ、其朝廷ニ於テハ極官ヲ左大臣トシ、阿  
 倍内麻呂之ニ任シ、次ヲ右大臣トシ、蘇我石川麻呂之ニ任シ、次ヲ内臣トシ中  
 臣鎌足之ニ任ス、而シテ此改革ハ皇太子中大兄皇子ト鎌足ノ專計畫スル所  
 ナリキ、

官制如何

戸籍ノコトハイカン  
 計帳トハ何ソ  
 班田収授法ハイカ  
 ノ

戸籍計帳班田ノ事 戸籍ハ民戸ノ數ト人口年紀トヲ記シ、六年ニ一回之ヲ  
 製ル、計帳ハ毎年之ヲ製シ調庸ヲ出スヘキ人員ヲ計リ、其額ヲ豫算ス、即歲入  
 豫算帳ナリ、班田ハ男子一人ニ田二段ヲ頒テ與ヘ、女子ニハ其三分ノ二ヲ給  
 シ、六年毎ニ生死ヲ檢校シテ収授ス、之ヲ班田収授トイフ、古ハ人民所有ノ土  
 地ハ、ミナ其私有ノ如ク、世々相續所有シ、後ニハ強弱相兼并スルノ弊アリシ  
 故ニ、皆之ヲ官ニ収メテ、悉ク公田トシ、口分田ヲ割渡ス事トナセルナリ、田租  
 ハ一段ニ付稻二束二把ヲ出スヲ定額トス、蓋一段ノ田地ヲ耕ス時ハ概五十  
 束ノ稻ヲ得ルヲ以テ、此租額ハ收穫ノ二十五分ノ一ハカリニ當ルナリ、租ノ  
 外ニ調トテ土地ニ生スル産物ニテ、絹、絶、紬、布、鹽、油、麻、鹿角、魚介、菜藻ノ類  
 ヲ貢セシム又庸トテ歲役ニツカハル、コソリ、正丁ハ一年二十日ツ、國事  
 ニ役スルナリ、大工ナラハ官ノ土木工事ニ出ツルノ類ナリ、若之ニ自身出ツ  
 ルヲ能ハサルモノハ、布ヲ其日割ニ應シテ納メシム、即代納ノ義ナリ、是ニ於

租ヲ徵スル率法イ  
 カン

改新政度ノ重ナルモノハ

テ全國ノ稅率一樣ニナリシナリ、  
改新ノ政ノ重ナルモノ大抵右ノ如シ、就中大ナルハ前ニイヘルオミムラフコトモノミヤツククニ臣連伴造國造ヲ停メ、姓即職ナリシヲ割テ、姓ト職トヲ分テ、其部曲ノ私民ヲ收メテ公民トシ、處々ノ田莊ヲ收メテ公地トシ、全國ミナ朝廷直轄ノ下ニ歸セシテ是ナリ、(已上ハ孝德帝ノ時ノ制定ノ外ニ、少シ後ノ制ヲモ加ヘ。考ヘ合セテ記セルナリ、後ノ制トイヘル、大化ノ改新ノ聖意ヲ受ケテ之ヲ補足シタルモノナレハナリ、且又日本紀ノ文面ノミニテハ十分意ヲ達セサル所アルカ故ナリ、看者之ヲ諒セヨ)

(四十)

當時ハ何物ヲ通貨トセシヤ

金錢通用ナキ以前ノ通貨ノ有様如何  
太古ニ、金銀白銅等ノ金屬ヲ以テ器物トスルコトアレトモ、未貨幣トセシコトハナシ、顯宗天皇ノ時米一斛アタヒノ直銀錢一文トイフコトアレハ、此時銀錢アリ然レル廣ク通用セス人民大半ハ稻ト布トヲ以テ交易ノ媒トシタルカ如シ、即稻ト米トハ當時ノ通貨ナリシナリ、タトヘハ缺一挺ノ價稻何束、又布何尺トイフカ如クナリシナリ、當時ハ租稅ヲ初メ通用ノ稻モ、今ノ如ク粃ヲ去リテ米

何ニ由テ稻布ヲ通貨トセシツ

(五十)

和同開珍

トスルコトハ無ク、大概稻ノマ、束子テ交易ノ資トナス、故ニ何束トイフナリ、右ノ如キコトハ、今ヨリ思ヘハ、甚不便ナルカ如シトイヘル、瑞穗ト稱スル我國ニ於テハ產物中尤饒カニシテ、且人々需用ノ急ナル處ヨリ、稻ヲ以テ通用シ、又併セテ布ヲ用ヒシモノナリ、且通用ノ錢ナク、又有リテモ、少キ時代ニハ此ヲ却テ便利トシタルナリ、外國ニテモ古代ニアリテハ、美麗ナル貝ヲ以テ通貨トシ獸皮ヲ以テ貨幣ニ充テタル所モアリ、怪ムニ足ルコトナシ、  
錢貨ノ初ヲ問フ及其通用ノ有様如何

錢ノ通用アリシコト已ニ顯宗天皇ノ時ニ見ユ、然レル當時ノ事未詳ナラス、元明天皇和銅元年武藏國ヨリ銅ヲ獻ス、ユレニヨリテ始テ錢ヲ鑄ラシム、文ニ和同開珍トイフ(即和銅開寶ナリ)此年コレヲ通行セシム、當時官定ノ相場穀六升ニテ銅錢一文ナリキ、

人民錢ヲ便トセシヤ如何

然レル人民未錢ノ通用ニ慣レス、トカク之ヲ厭ヘリ、旅人ノ遠方ニ行クモノモ、初ハ各糧食ヲ荷ヒテ行キシニ、錢アリシヨリ後ハ錢ヲ携フルトキハ輕便ナレ共、土人錢ヲ厭テ米ヲ賣ラス、旅人ノ便ヲ失フコトアリ、因テ勅諭シテ錢ヲ

(六十)

舊事紀ハイカン

取ラシメ後又諸國ノ人錢ヲ多ク蓄フルモノニハ、其賞トシテ位ヲ授ケント勅セラル、ニ至レリ、此ノ如ク百方開諭獎勵シテ、始テ貨幣ノ流通漸ク凝滯ナキニ至リシモノナリ、コレ亦古今時勢ノ相異ル所以ナリ、

國史ヲ撰修セシ初ハ如何

我國ニテ歴史ヲ作りシ初ハ、推古天皇ノ二十八年、麻呂皇子蘇我馬子ト天皇記、國記、臣連伴造國造百八十部、並公民等ノ本紀ヲ撰ストイフモノコレ初ナリ、然レモコレヲハ蘇我氏ノ亂ノ時焚テ大抵亡ヒヌ、今舊事本紀トイフモノナ此書ナリトイヘモ否ラス、此書ハ後ノ偽作ナリ、但其中ニハ眞ノ舊事記ノ殘リシモノト見ユルモアレト、トニカク全備ノ書ニハアラス、

古事記ハイカン

元明天皇ノ和銅四年太朝臣安麻呂ニ勅シテ國史ヲ撰錄セシム、五年正月ニ至リテ成ル、コレヲ古事記トイフ、今三卷アリ、ホ、漢文體ニ似タレトモ、大抵國語ヲ用ヒテ事實ヲ失ハサラシメントセシモノナリ、

日本紀ハイカン

元正天皇ノ養老四年五月、舍人親王、大朝臣安麻呂等ノ撰修セシ日本紀三十卷成ル、コレハ天武天皇ノ時ヨリ編輯ヲ始メラレシカ、後遷延シ此時ニ至リ

(七十)

畿内ハ何代ニ定レ

竣功セシナリ、全部漢文ヲ用ヒ、ツトメテ漢史ト同シカラシメンカ爲ニ、修飾スル所多シ、年月日ヲ追フテ事ヲ記ス、全ク編年ノ史ナリ、已上二部上古ノ正史ナリ而又日本紀、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄、ユノ六部ヲ六國史トイフナリ、

全國ヲ分ケテ畿内七道六十六國ニ嶋ト定メシハ何時ノ頃ナルヤ

何帝ノ時ニ、此間ノ如ク定マリシトイフ制度ハナキヲナレトモ、淳和天皇ノ時ヨリ此通りニテ、維新前マテ行ハレシモノナリ、其故如何トナレハ、古ク成務天皇ノ時ニ國郡邑里ヲ定メ、國界ヲモ定メラレタルヲアレ共、上古ノ事ナレハ明ナル制度ハ傳ハラヌ、孝德天皇ノ時畿内ノ制定マリ、持統天皇文武天皇ノ頃ニ及ヒテ、始テ七道ト稱スルヲトナル、然レモ國ノ數ハ時ニ從テ一定セス、シハノ合併分割アリ、

今元明天皇ノ時ヨリ、淳和天皇ノ時マテニ、廢置ノ國名ヲ舉ケンニ、(國ノ次第ハ廢置ノ年ノ順序ニ因ルナリ)

- (新置ノ國) 出羽 丹後 美作 大隅 和泉 能登 安房 加賀

新置ノ國々ハ

廢セラレシ國ハ  
石城ハ今ノ磐城  
石背ハ今ノ岩代  
諏訪ハ信濃ノ内  
多禰嶋ハ今大隅  
國ニ屬セリ

(八十)

(廢セシ國) 石城 石背 諏訪 多禰嶋

右ノ如ク嵯峨天皇ノ時加賀國ヲ置キ淳和帝ノ時多禰嶋ヲ廢セシ以後諸國ニ分合ナク是ヨリ永ク六十六國一島トナレリ

大寶令ノ制定ハ如何

大化ノ新政アリテ、地方分權ハ廢絶シテ中央集權トナリ、海内ノ庶政一ニ朝廷ニ統フ、然レモ古來未會有ノ創業ニシテ法度未整ハス、時ニ盛ニ交通スル所ノ支那ハ唐朝ノ始ニテ、盛美ヲ極ムルノ世ニ當リ、時ノ帝太宗ハ英主ナリ、杜如晦房玄齡等ノ大臣ハミナ良佐ナリ、典章文物大ニ定マリ、所謂唐令唐律(唐令ハ彼國ニモ我邦ニモ亡ヒテ傳ハラヌ、律ハ我國ニ傳ハリシヲ後世支那ニモ渡レリ)ノ制定モ、是時ニ創マリシ程ナレハ、天智天皇此ニ聖慮ヲ用ヒラレ、即位ノ元年始テ内臣中臣鎌足等ニ勅シテ律令ヲ撰セシム、之ヲ近江令ト云フ(近江朝廷ノ令ト云フヲ略言セルナリ、近江トハ天智帝ノ都セシ地ナレハナリ)天武帝ノ時之ヲ刊修シ、持統帝ノ時ニ頒布施行シ、文武天皇ノ大寶元年ニ又刊修シテ令十一卷律六卷成ル、大寶令大寶律ト云フハ是ナリ、後又元

近江令ハ何帝ノ時ノ制ナルヤ

正帝ノ養老二年藤原不比等等ニ刊修セシメラレタレト、格別ノ異ハナシトテ、今アル所ノ令ヲ大寶令ト稱セリ、今、令義解ト題スルハ、天長中ニ令文ノ注解ヲナシタルモノナリ、令ノ目左ノ如シ、

(一)	官位	(二)	職員	(三)	神祇	(四)	僧尼	(五)	戶
(六)	田	(七)	賦役	(八)	學	(九)	選叙	(十)	繼嗣
(十一)	考課	(十二)	祿	(十三)	宮衛	(十四)	軍防	(十五)	儀制
(十六)	衣服	(十七)	營繕	(十八)	公式	(十九)	倉庫	(二十)	廩牧
(廿一)	醫疾	(廿二)	假寧	(廿三)	喪葬	(廿四)	關市	(廿五)	捕亡
(廿六)	獄	(廿七)	雜						

律ハ今散逸シテ全ク存セサレトモ目ハ左ノ如シ

(一)	名例	(二)	衛禁	(三)	職制	(四)	戶婚	(五)	廩庫
(六)	擅興	(七)	賊盜	(八)	鬪訟	(九)	詐僞	(十)	雜律
(十一)	捕亡	(十二)	斷獄						

右ノ如ク律令ノ撰定アリ、又屢改正増損シテ大成セシカハ、官制、稅制、祿制、

令律トモニ存スルヤ如何



兵制、刑制、學制大ニ定マリ、天智帝ヨリ桓武光仁帝ノ頃マテヲ王朝ノ盛時トセリ、

(九十)

律令格式ノ用ヲ向フ

令ト律トノ用ヲ論スルニ、令ハ未然ニ教令スルモノ、勸誡ヲ本トス、律ハ既往ヲ罰スルモノ、懲肅ヲ本トスルナリ、此後ニ格式ノ二種アリ、格トハ時ニ應シテ令ノ制ヲ變更スヘキコトアルキノ臨時ノ制定ナリ、式トハ官吏ノ章程ノ如キモノナリ、律令格式ノ四ツヲ以テ當時國家ヲ治ムル大要トナシ、ナリ、格式ノ二ハ弘仁貞觀延喜ノ三度ニ出來シカ、今ハ亡ヒテ延喜式ト類聚三代格ノ殘欠本トアルノミ

大化ノ新政ハ、律令ノ制定ニ至リテ大ニ定マリヌ故ニ新政已後ノ大事ハ、律令ノ制定ヲ以テ第一ニ筭フヘキモノナリトス、

(十二)

平城ノ京トハ何帝ノ時代ノ都ナリヤ

平城ハ大和國ノ奈良ナリ、元明天皇ノ和銅三年始テ此ニ都シ、左京右京ヲ分テ帝都ノ規模ヲ恢ニセリ、爾來元正、聖武、孝謙、淳仁、稱徳、光仁、桓武凡八代八

十五年間ノ帝京ナリ、桓武帝ノ延暦十三年山城國葛野ニ徙リテ後、廢都ニ歸セリ、

歷代帝都ヲ改メシハ何故ソ

初神武天皇カンハラ橿原ニ都セシヨリ、歷代ノ帝ミナ都ヲカヘテ一所ニ居ラス、其故

ハ皇太子ニテモ當時ハ母ノ許ニ生長シテ、父王ト同居スルコトナク、(原來當時ノ風俗トシテ夫妻同居スルコトナク、女ハ毎ニ親ノ許ニ生長シ、年、人ノ妻トナルニ堪エタルニ至リテモ、尙然リ、故ニ男子ハ妻ヲ娶リテモ我家ニ置クコトナク、尙女ノ生家ニ置キテ、男子ノ方ヨリ此ニ往來起臥スルコトナリキ、故ニ妻妾多クシテ子女各其母ノ許ニ成長スルトキハ、兄弟姉妹モ其面ヲ相知ラス、此ヲ以テ古ハ異母兄弟ノ結婚ハ宥有セシモノナリ)故ニ父ノ天皇崩スルトキハ皇太子其在所ニテ即位シ、百官モ後世ノ如ク事務多カラス、日々ノ朝參モ繁カラサルカ故ニ、亦皆在所ニアリテ朝ニ仕フ、朝堂モ從テ簡略質朴ナルヲ以テ、別ニ皇宮ヲ新造スルニ及ハス、新造ストモ後世ノ如キ大廈高閣ヲ構フルニアラス、サレハ代々都カハリテモ人民甚勞苦ヲ感セサリシナリ、(史ニ遷都ト書クコト實ハ穩カナラス)

何故元明帝已後都  
ノ一定セシヤ

(一廿)

然ルニ大化新政以後ハ彼ノ如ク、法制定リ百度張り、事務從テ繁多ナルニ至  
リテハ、大廈高閣ノ政廳ヲモ要シ、中央集權ノ力ヲ鞏固ナラシメンニハ、帝闕  
ノ尊嚴モ必用ノ事トナリシカ故ナリ、殊ニ當時外交連年絶エス、唐使モ時ニ  
來朝スルコトナレハ、別シテ其用ヲ感セシモノナリ、

聖武天皇以後佛法ノ盛ナリシ大概ヲ舉ケヨ

天智天皇已後、國家大ニ治リ、世太平ヲ樂ミ、國庫モ充實セシ後ニ當テ、聖武天  
皇位ニ即キ、無事ノ餘リ意ヲ佛法ニ傾ケタリ、佛法ハ蘇我氏大ニ之ヲ興立シ  
同氏亡テ後モ衰ヘス、天武持統亦コレヲ尊崇セリ、然レモ甚盛ナルニハ至ラ  
ス、但當時ノ僧ハ遣唐使ノ度コトニ、唐ニ留學スルモノ多ク、有識ノ僧徒モ頗  
多カリシカハ、漸朝廷ニ用ヒラレ常ニ宮中ニ出入シテ聖體ノ安全國民ノ幸  
福ヲ祈禱シ、又コノ頃ノ僧ハ醫藥ノ事ヲモ知レルカ故ニ、天皇群臣又庶民ノ  
病ヲ療シテ歸依益深クナリ、親王ノ薨去等アレハ多クノ僧徒參内シテ佛齋  
ヲ行ヒ、日夜宮中ニ伺候スルモアリ、カ、ル時勢ナルカ故ニ玄昉ハ聖武ノ皇  
后光明子ト醜聲アリ、道鏡ハ孝謙帝ト醜聲アルニ至レルモ、其本ハ佛教コレ

玄昉  
道鏡

行基ハ何ナシ、  
ヤ

宗派ノ起リハ如何

カ媒介ヲナセルナリ、玄昉道鏡共ニ破戒無慚ノ比丘トイヘトモ、學業ハ大ニ  
衆ニ超エタリ、又同時ニ行基菩薩トイフ僧アリ、諸國ヲ勸化シテ道橋ヲ修繕  
シ、愚蒙ヲ行化シテ世益アリ、其他名僧多カリシカハ佛法大ニ興ル、帝ノ奉佛  
ノ心モ從テ厚ク、東大寺ヲ建テ丈六ノ盧舍那佛ノ大像ヲ鑄テ、自ラ諸臣ヲ率  
井テ拜趨シ、三寶奴ト稱シテ之ニ事フルニ至レリ、又護國滅罪ノ爲ニ、國々ニ  
國分寺ヲ建テ、多クノ寺田ヲ附シ、國庫漸空シク大寶ノ令制稍弛ヘリ、  
此頃佛法ノ盛況此ノ如クナルヲ以テ、宗門モ新ニ起リ、玄昉ハ唐ヨリ歸朝シ  
テ法相宗ヲ弘メ、鑑眞和尚ハ唐國ヨリ來朝シテ律宗ヲ弘メ、華嚴宗ハ天平八  
年唐僧道璿之ヲ傳ヘ、良辨僧正之ヲ弘メタリ、從來アル所ノ三論宗、成實宗、俱  
舍宗ト共ニ行ハル、

俱舍宗ハ、皇極帝ノ七年元興寺ノ智通智達ノ二僧唐ヨリ歸朝シテ之ヲ傳  
ヘ、成實宗ニ論宗ハ推古帝ノ時三韓ノ僧惠觀、惠慈、惠聰、觀勒等ノ僧ノ來朝  
シテ傳ヘシモノナリ、

藤原廣嗣ノ反セシ原因如何

(二廿)

反セシハ何チ目的  
トセシニヤ

廣嗣擧兵ノ結果イ  
カン

聖武天皇甚佛法ヲ信シ、光明皇后亦之ヲ信セリ、僧玄昉屢說法ト稱シテ宮中  
ニ入り、皇后ニ近侍シ、頗醜聲アリ、時ニ吉備眞備學識アリテ天皇ニ信任セラ  
ル、然レモ曾テ之ヲ諫メス、大宰少貳藤原廣嗣深ク玄昉眞備ヲ惡ミ、上表シテ  
之ヲ斥ケンヲ請フ、天皇納レテ、適玄昉廣嗣ノ妻ノ美ナルヲ聞テ之ヲ姦セ  
ントス、廣嗣怒リ遂ニ兵ヲ徵シ京ニ入りテ二人ヲ除カントス時ニ天平十二  
年九月ナリ、天皇震怒シ大野東人ヲ大將軍トシ、一万五千人ノ兵ヲ發シテ之  
ヲ討タシム、廣嗣ハ一万ノ兵ヲ以テ板櫃河ヲ越エントス、官軍ノ將佐伯常人  
之ヲ拒キ累ニ廣嗣ヲ呼フ、廣嗣馬ヨリ下リテ再拜シテ曰、廣嗣何ソ敢テ朝命  
ヲ捍マンヤ、但朝廷ノ爲ニ罪人ヲ除カントスルノミ、廣嗣ニシテ朝命ヲ捍  
マハ天神地祇之ヲ罰セント常人曰ク何ノ故ニ兵ヲ擧クト、廣嗣語塞カリ馬  
ニ上テ退ク、後遂ニ擒ニセラレ斬ニ處ス、其徒ミナ責罰差アリ事平ク、然レモ  
玄昉穢行マス、甚シク時人之ヲ惡ム、十七年十一月ニ至リ、勅シテ玄昉ヲ  
筑紫ニ遷謫シ、孝謙天皇ノ天平勝寶二年ニ至リ眞備ヲ筑前守ニ貶シタリ、眞  
備廣嗣ノ墓ヲ祭リ、祠ヲ立テ又寺ヲ建立シテ、毎年祭祀ス、當時シキリニ廣嗣

ノ崇アリシカ故ナリト

(三廿)

適齡年限イカン

王朝ノ盛時徵兵ノ法及軍團配置ノ大畧如何

凡諸國ノ人民男子二十一歳ヨリ六十歳マテ正丁トス、毎年六月三十日以  
前ニ、京ハ京職、(府廳ノ如キモノ)諸國ハ國司(縣廳ノ如キモノ)ニテ、所管内ノ  
人民適齡ノ者ヲ檢査シ、帳簿ヲ造リテ八月卅日前ニ太政官ニ具申ス、大抵一  
國ノ正丁ノ總數三分ノ一ヲ取ル、其徵發ノ順序ハ富強ノ子弟ヲ先ニシ、貧弱  
ノ子弟ヲ後ニシ、一戸内多丁ヲ先ニシ、少丁(正丁ノ人數少キ家ナリ)ヲ後ニ  
ス、徵發セシ兵士ハ、其國ノ近傍ナル軍團ニ入ル、軍團ハ營所ナリ、大抵四五郡  
毎ニ一軍團アル割合ナリ、軍團ニ入ラサル兵士ノ筑紫ニ派遣シテ邊塞ヲ守

此時全國郡數五  
百九十八許ナリ

人員ハイカン

全國軍團ノ數何程  
アリシヤ

(四廿)

軍隊編成ノ法如何

兵ニ騎兵步兵アリ、五人ヲ一伍トシ、十人ヲ一火トシ、五十人ヲ一隊トシ、隊ニ

隊正アリ、百人ニ旅師アリ、二百人ニ校尉アリ、五百人ニ少毅アリ、六百人以上ニ大毅アリ、一千人ニハ大毅一人、少毅二人アリテ、之ヲ統率ス。大少毅ハ兵士又ハ郡司等ヨリ撰任ス、一火毎ニ軍器ヲ備ヘ、六駄馬ヲ養フ、兵器ハ兵士ノ自辨ニシテ、無事ノ時ハ庫中ニ貯フ

編制法ハ、兵士三千人ニ滿ツルキハ、將軍副將軍軍監軍曹ノ官アリテ之ヲ統攝ス、之ニ於テ始テ一軍トナル、軍ニ三等アリ、五千人以上、一万人以上、三千人以上ト人數ノ多少ニヨリテ武官ノ員數モ同シカラス、此ノ如キ軍三ツ合セタルヲ三軍トイフ、大將軍一人之ヲ統フ、コレ軍陣アル時ノ事ニテ、臨時ニ命スル所ノ官ナリ、畧圖左ノ如シ

- 一軍 萬人 將軍一人 軍監二人 軍曹四人
- 一軍 以上 副將軍二人 錄事四人
- 大將軍 一軍 九千人以下 將軍一人 軍監一人 軍曹四人
- 三軍 一軍 五千人以上 副將軍一人 錄事二人

(五廿)

王朝ノ盛時蝦夷叛服ノ有様如何

- 一軍 四千人以下 將軍一人 軍監一人 軍曹二人
- 一軍 三千人以上 副將軍一人 錄事二人

蝦夷トハ今ノ三陸兩羽地方ノ總稱ナリ、人強暴ニシテ王化ニ服セス、初日本武尊ノ東夷ヲ征セシヨリ、歷代其綏服ニ心ヲ用ヒラル、仁徳天皇ノ時ニハ上毛野田道、舒明天皇ノ時ニハ上毛野形名、共ニ將軍トシテ之ヲ征シテ官軍爲ニ破ラル、此頃ハ上總下總上野下野ノ地方マテモ、其巢窟ナリシヲ以テ、部落モ多ク、剩ヘ其行爲悍勁ナルヲ以テ、代々官軍志ヲ得ス、齊明帝ノ時阿倍比羅夫從前ノ方畧ヲカヘ、(古ハ官軍ミナ陸路東ノ方ヨリ攻伐セシナリ)西ノ方海ヲ渡リ越國ヨリシテ水師一百八十艘ヲ率テ、深ク敵地ニ入り、其酋長ヲ下ス、此時ハ秋田淳代ヨリ津輕外ヶ濱ニ至ルマテ、地ヲ闢クハ數千里、遂ニ肅慎ヲ征シ、黑龍江ニ至ル、此後聖武帝ノ時大野東人、淳仁天皇ノ時惠美朝獲、(多賀

土地ノ開ケシ順序  
ハイカン

城ノ碑立テシ人ナリ桓武天皇ノ時坂上田村麿陽成天皇ノ時小野春風アリ、  
ミナ勇將ノ名アリ、地ヲ開キ境ヲ廣メ大ニ蝦夷ヲ平ク、  
歷朝將帥遠征ノ順序右ノ如シ、其土地ノ開ケシ次第ヲ舉ケシニ、元明帝ノ時  
越後ノ地ヲ割テ出羽國ヲ置キ、國府ヲ田川郡ニ建テ、土人ヲ懷服シ、聖武帝  
ノ時多賀城ヲ築キ後コレヲ鎮守府トシテ軍團ヲ白河玉造等ニ建テ、蝦夷ヲ  
經營スルノ根據トナス、天平中ニ至リ出羽國府ヲ秋田城トナシ、山川ノ形勢  
ニ據リテ嚴威ヲ示シ又雄勝城ヲ築キテ蝦夷西上ノ衝ヲ捍衛ス此後天平寶字  
四年牡鹿郡ニ桃生城ヲ作り神護景雲中ニ伊治城ヲ造リ光仁天皇ノ寶龜中ニ  
覺警城ヲ建テ桓武帝ノ延曆中ニ膽澤城ヲ造リテ、多賀城ヲ移シ、遠ク出羽ノ  
雄勝城ト相連絡シ、前後首尾相助クルノ勢アリ、コレ皆前ニイヘル四勇將等  
ノ經營スル處ニシテ、此後陸奥ノ蝦夷復叛カス、境土大ニ拓ケタリ、但志和閉  
伊、以北ノ地ハ未全綏服ニ至ラサルニ似タリ、源賴朝藤原泰衡ヲ滅スニ及テ  
其地始テ化ニ向ヘリ、

(六廿)

藤原氏ノ政權ヲ握リタル起原並ニ之ヲ失ヒタル顛末ヲ略述セヨ

藤原氏ノ四流トハ  
何ソ

藤原氏ノ始祖鎌足、天智天皇ヲ輔ケテ蘇我氏ヲ亡シ、中興ノ業ヲ創メテ大勳  
勞アリ、其子不比等ハ持統文武元明元正ノ四代ニ仕ヘテ、大臣トナリ、律令撰  
修已下ノ大功アリ、子孫南家、北家、京家、式家ノ四流ニ分レ、族類太多ク、ミナ  
祖宗ノ功ニヨリテ世々重職ニ任ス、其女ノ宮ニ入りテ后妃トナリシモノ、文  
武、聖武、桓武、仁明、文德、清和等ノ後宮ニ列セリ、宇多ヨリ後ハ、藤原氏ノ女ノ  
後宮ニ入ラサルモノナキニ至ル、而シテ其女ノ生メル太子ノ位ニ即ケルモ  
ノ亦少ナカラス此ヲ以テ外舅ノ重ニ倚リ、勢力相積ム、然レモ其積勢未遽ニ  
發セス、文德帝多病ニシテ早ク崩シ、清和帝立ッ、帝ハ右大臣良房ノ女ノ生ム  
所ナリ、其兄惟喬親王父皇ノ鍾愛スル所ナレトモ立タス、清和僅ニ九歳ニシ  
テ立テリ、良房乃太政大臣トナリ、外祖ヲ以テ攝政ス、藤氏ノ權ヲ專ニスル之  
ヲ始トス、其子基經陽成帝ノ朝ニ攝政トナリ、帝ノ心疾ヲ患フルニ及ヒ、廢シ  
テ光孝帝ヲ立ッ、臣下ニシテ廢立ヲ謀ルノ威力アリ、政權ヲ握ルノ勢既ニ成  
レリ、基經ノ長子時平ハ宇多帝ノ朝菅原道眞ト共ニ大臣トナリ朝政ヲ佐ク、  
帝ハ藤氏ノ權ヲ專ニスルヲ憂ヒ、之ヲ抑ヘントスルノ志アリ、道眞ニ委任ス、

藤氏專權ノ初ハイ  
カン

天慶ノ乱ノ起リ

權ヲ失ヘル原因イ  
カン

醍醐帝代リ立ニ及ヒテ、時平道真ヲ讒シテ遠謫セシメ、之ヨリ權勢ノ根更ニ固シ、此後大臣卿輔等ノ重職ハ皆其族ヨリ成リ、他姓ノ人伺フヲ得サルニ至ル、檢非違使ノ官、重職トイヘモ卿相ノ重キニ至ラス、平將門請フテ之ニ拜セントス、攝政忠平許サス、將門怒リテ天慶ノ亂アルニ至レリ、此後實賴、伊尹、兼通、賴忠、兼家、道隆、道兼、道長、賴通等ハ冷泉、圓融、花山、一條、三條、後一條、後冷泉等ノ諸朝ニ仕ヘテ、攝政關白トナリ、專横放恣、天子ヲ觀ルルヲ弁髦ノ如ク、諸國ニハ私領ノ莊園ヲ増設シ、威福皆一門ニ由レリ、然レモ概遊惰ニ流レ、王室ノ干城タル武備ハコレヲ修ムルヲナク、地方ノ豪長即源平二氏等ノ掌握ニ歸セシメタリ、前九年後三年ノ役ノ如キ、平忠常下總ノ反ノ如キ(後一條帝ノ長元々年ノヲナリ)ミナ源賴信賴義義家ノ功ナリキ、藤氏ハタ、金殿玉樓ニ暖衣飽食スルノミ、此ノ如ク天下ノ兵馬ノ大勢ハ隱然源平以下ノ武門武士ニ歸シタルヲ以テ、從テ藤氏ノ權ハ機ヲ得テ地ニ墮ケントス、後三條帝立ツニ及テ其權ヲ抑ヘントシ、賴通、教通等前後關白ニ備ハルトイヘモ、空位ヲ守ルニ過キス、万機皆宸衷ヨリ出ツ帝ノ後、白河堀河鳥羽帝以下相繼テ政ナ

院中ニ聽キ、攝關亦與ルヲ得ス、此後平清盛勢ヲ得ルニ至テ藤氏ノ權全地ニ墮ツルニ至レリ、

(七廿)

後三條帝ノ政治ニ如何ナル事蹟アリヤ、

後三條帝東宮ニアリシ時ヨリ、藤原氏ノ專權ヲ見テ心甚不平ナリ、又關白賴通ノ不禮ヲ怨ムヲアリ、而レモ尙忍テ發セサリキ、位ニ即クニ及テ痛ク其權ヲ抑ヘテ、政柄ヲ奪ヘリ、教通曾テ南圓堂ヲ作ル、時ニ國司ノ再任ヲ禁スル勅掟ナリシニ、教通之ヲ省ミス再任ヲ請ハントス、帝怒テ曰ク、攝政關白ハ外祖ナレハコソ憚レ、朕ハ畏ル、所ナシトテ(帝ハ三條帝ノ女ノ生ム所ナリ)其奏ヲ堅ク拒メリ、教通艷然トシテ起テ、大呼テ曰ク、藤原氏ノ卿相ハ悉ク罷レ、春日大明神(藤原氏祖先ヲ祭レル神ナリ)ノ神威ハ今日盡キヌト、於是諸ノ藤原氏ノ人、咸教通ニ隨テ出ツ、帝已ムヲ得ス之ヲ許セリ、一條帝以來ハ特ニ外戚ノ權盛ニシテ朝廷ハ大ニ衰ヘシテ、帝剛健嚴明ニシテ、其牽制ヲ受ケス、精ヲ勵シ治ヲ圖リ、紀綱大ニ張ル、帝位ヲ白河(皇太子也)帝ニ讓リ、院ニ居テ政ヲ決セントシ、位ヲ去リシカ幾ナラスシテ崩御ナリキ

某國司南圓堂ヲ立  
テシ工費ヲ出セシ  
故ニ任期畢リシ後  
マダ再任セシメン  
ト請ヒシナリ

王朝ノ盛時ニ當リテ輩出セル文學家ノ著明ナルモノヲ舉ケヨ

吉備眞備 聖武帝ノ頃、入唐留學シテ阿倍仲麻呂ナトノ徒ト名ヲ顯ハセリ、

眞備ハ道藝ヲ恢弘シ、親ヲ傳受シテ學生四百人ニ、五經三史明法法律學ヲ

リ(算術音韻籀篆等ノ六道ヲ習ハシム、又歸朝ノ時ニハ唐禮曆書以下數多

ノ書ヲ携ヘ來リ、又五十音圖ナトモ此人ノ作ナリトイヘリ、文學ニ功勞ア

リシ人ナリ

石上宅嗣 イソノケノヤカヅ 光仁帝ノ頃ノ人ナリ、博學經史ニ涉レリ、芸亭ヲ立テ、多ク書籍ヲ

貯ヘ、諸篤志ノ人ニ縱覽セシメ書籍館ノ創立ヲナシタル人ナリ、

淡海三船 アヲシノミフネ 延曆中(桓武ノ時)ノ人ナリ、博ク群書ニ涉リ、文ヲ善クス、曾テ勅

ヲ奉シテ神武ノ來ノ謚號ヲ定ム、

菅原道眞 宇多醍醐ノ朝、藤原氏ノ權ヲ抑ヘテ王家ノ隆盛ヲ圖リシ、希世ノ

政治家タリ、其文學ニ於ケル功勞ハ類聚國史二百卷ヲ撰シテ、後世ニ裨益

シ、又諸臣ト二代實錄五十卷ヲ撰シタリ、學問ニ篤カリシコトハ、菅家文章同

後集等ニ詳ナリ、道眞ノ子淳茂、其族文時、亦並ニ文學ニ名アリ、

五十音圖作リシ人ハ誰ソ

天皇ノ謚ヲ定メシ人ハ誰ソ

三善清行 菅公ト同時ニ名アリ、意見封事ヲ上リテ時勢ノ得失ヲ論シタリ、

小野篁 野相公ト稱ス、文章詩賦草隸ニ工ナリ、其詩唐ノ白樂天ニ匹ストノ

評アリ、其孫道風書ヲ能クシ、藤原佐理同行成ト三蹟ノ稱アリ、

光仁、桓武、平城、嵯峨數帝ノ頃ニハ、文學技藝其盛美ヲ極メ、天皇亦之ヲ好ミ

玉ヘル故ニ臣下ニ有名ナル人モ甚多カリキ、都良香、橘良相、島田忠臣、大藏善

行、藤原佐世、紀長谷雄等ノ類最ソノ秀拔ナルモノナリ、歌人ニハ紀貫之、大中

臣能宣、凡河内躬恒、壬生忠岑、清原元輔等アリ、貫之ハ始テ假名文ヲ再興シ

テ、歌文共ニ絶妙ノ名アリ、此後婦人ニモ才學優長ノモノアリテ、紫式部ハ最

才德ヲ兼備シ、源氏物語ヲ著セリ、源氏物語ハ我國古來ノ小説中ニアリテ、絶

テ無キ處ノ傑作ナリトス、之ニ亞キテ赤染衛門、清少納言、和泉式部等亦才名

アリ世ノ噪稱スル所タリ

王朝時代ノ教育法如何

天智帝初メテ學校ヲ起シ、ヨリ、天武帝ノ時ニハ大學寮アリテ教育ヲ掌ル、

大寶ノ時ニ及テ其制度備ハル、京ニアル官立ノ學校ヲ大學トイヒ、地方諸國

書家ニハ

歌人ニハ

女流ニハ

學校ノ初ハ

國學トハ何ノ謂ソ

ニアルヲ國學トイフ、大學ノ職員教官ハ左ノ如シ、

大學頭 同助 同大允 少允 大属 少属(各一人)○以上職員ナリ

博士 助教 明經博士 律學博士(明法博士モ云フ) 文章博士 音博士

書博士(習字ノ教官ナリ) 算博士○以上教官ナリ

生員ハイカン

明經生四百人 明法生十人 文章生二十人 算生三十人○以上學生ナリ

學生ノ資格ハイカ

學生ハ五位以上ノ人ノ子孫、並ニ東西史部ヤマトカハチノフヒトクトテ、代々史學者ノ家アリテ、其子

ヲ取ル、平民ハ入ルコトヲ得ス、八位已上ノ人ノ子ハ願ニ依リテ入學ヲ許サル、

イツレモ年十二已上十六以下ノ聽令ナルモノヲ擇ヒ、式部省ニテ之ヲ補ス、

在學年限ハイカン

在學ノ年限ハナケレト、滿九年ニテ學業成ラス、及第セサルモノハ退學セシ

ム、試業ニ及第スルモノニハ、ソレノ試験成績ニヨリテ位ニ叙スルコトナリ、

科試ノ法四アリ、秀才(博學ニテ文章上手ナルモノ)明經(經書ノ義理ニ委シキ

四科トハ何ソ

モノ)進士(時務ニ達スルモノ)明法(法律ニ委シキモノ)ナリ、之ニ書算ヲ加ヘ

テ凡テ六科ナリ、

國學ハ六十餘國一國ユトニ一ヶ所ツ、アリ、博士、醫師アリ、學生ハ大國ニ五

學生ト醫生トノ割  
合イカン

十人、上國ニ四十人、中國ニ三十人、下國ニ二十人ナリ、醫生ハ其五分ノ四ト定

メテアリキ、今諸國ニアリシ國學ノ蹟ハ亡ビタレト、タ、足利學校ハ今ニ存

シテ昔ノ國學ノ遺蹟ナリトイヘリ

私立學校ハイカン

以上ハ官立ノ學校ナリ、私立ノ學校ハ、和氣清麻呂ガソノ一族ノ爲ニ立テシ

弘文院アリ、藤原氏ノ學校ナル勸學院、マタ橘氏ノ學館院在原氏ノ弊學院、王

氏(皇族ナリ)ノ淳和院等、先後ニ創立セリ、僧中ニモ空海ノ綜藝種智院等ア

リ、文學大ニ興ルコトヲ得タリ、サレト概士大夫以上ノ教育ニテ、庶人ニハ普ク

及ハサリキ、

前同時代ノ刑法ハ如何

刑ノ五罪トイフハ  
如何

此時代ノ刑ハ五種アリ、答罪、杖罪、徒罪、流罪、死罪コレヲ五罪ト云フ、

答罪 小杖ニテ鞭ウツナリ、十ヨリ五十マテ五等アリ、

杖罪 大杖ニテ鞭ウツナリ、六十ヨリ百マテ五等アリ、

徒罪 懲役ノ類ナリ、一年ヨリ半年ツ、加ヘ三年マテノ五等アリ、

流罪 遠、中、近ノ三等ニ分ツ、京ヨリノ里數ニテ差別アリ、



死罪 絞ト斬トノ二等アリ、

磔、鋸挽、火炙等ノ慘刑ハ戰國ニナリ世亂レシ時ノトニテ此頃ニハナキコナリ

絞ト斬トノ輕重如何

五罪ハ唐朝ノ制ニヨリテ參酌セシナリ、五罪イツレモ人ニヨリ贖銅ノ差アリ、贖銅トハ金ヲ出シテ科料トスルコナリ、死罪ニ絞罪ノ斬罪ヨリ輕キハ、絞罪ハ刑名定マリテモ直ニ殺サス、時ヲ待テ殺ス、時トイフハ立春ヨリ秋分マテハ陽氣發生ノ時ナリトテ、死刑ヲナサス、其間ニ若赦令アレハ減等サル、コナリ、重キ罪ニテ斬ニ處セラル、ハ、時ヲ擇フコナシ、

- 八虐ノ刑名アリ
  - (一) 謀反 (二) 謀大逆 (三) 謀叛 (四) 惡逆 (五) 不道 (六) 大不敬
  - (七) 不孝 (八) 不義
- 右ニ當ルモノハ、常赦ニハ赦サヌコナリ應議ニモ減セヌコナリ、應議トハ六議ニ應スルコナリ、
- 六議トハ

- (一) 議親(天皇及太皇后皇后等ノ親族)
- (二) 議故
- (三) 議賢
- (四) 議能
- (五) 議功
- (六) 議貴

右ノ如ク親、故、賢、能等ノモノ罪アルトキハ、常人ナレハ定リタル刑罰ニ遭フヘキヲ詮議シテ宥免セラル、コナリ、又官吏ニハ除名、官當、免官、免所居官、等ノ法アリ、官吏過失アレハ其官位一階何ホド、等ヲ定メオキテ、官ヲ降シ、或ハ官ヲ免シテ罪ヲ贖フコナリシナリ、

官吏ノ刑法ハイカ

藤原氏盛ニシテ、朝廷衰フルニ及テ、刑法漸弛ヒ、法律遂ニ行ハレサルニ至レリ、

(一卅)

延喜ノ治

延喜天曆ノ治ニハ如何ナル政蹟アリシ乎

延喜ハ醍醐天皇ノ年號ナリ、醍醐天皇父宇多天皇ノ禪ヲ受ケテ位ニ即ク、初先帝嘗テ藤氏ノ權ヲ分タント欲シ、儒臣菅原道真ヲ登庸シ、藤原時平ト共ニ天皇ヲ輔佐セシム、時平ハ左大臣タリ、道真ハ右大臣タリ、道真ハ博學ニシテ、德望才幹アリ政事ニ練達ス、宇多上皇、天皇ト謀リ、專政權ヲ委テテ以テ藤原氏ノ積威ヲ殺カントス、時平之ヲ嫉ミ、遂ニ道真其女ノ宮

ニ入りテ生メル齊世親王ヲ立テ、帝ヲ廢セントスト讒奏ス、帝遂ニ之ヲ信シテ道眞ヲ筑紫ニ貶ス、上皇救ハントストモ能ハス、帝在位三十三年、攝政關白ヲ置カス、親政事ヲ視テ治ヲ圖リ、言路ヲ開キテ時勢ノ得失ヲ言ハシム、三善清行意見封事ヲ上リ、時弊十二條ヲ陳フ、又時平等ニ詔シテ延喜式ヲ撰定セシム、朝廷ノ制度典禮悉ク備ル、之ヲ延喜ノ治トイフ、

天曆トハ村上天皇ノ年號ナリ、天皇性寛裕ニシテ温恕ナリ、意ヲ政事ニ留メ、恩ニ偏倚ナシ、臣民安堵ス、嘗テ賤吏ノ老者ヲ召シ、密ニ問テ曰、當今ノ治、延喜ノ治ト孰レカ得失アルト、吏曰異ルコトナシ、帝切ニ曰フ、吏曰賤愚ノ下吏何ヲカ知ラン、唯主殿寮ノ燦燭ヲ多ク費スト、率分堂ニ草ノ生セシコト少異ルコト、天皇悟ル、是ヨリ益勉勵ス、後世コレヲ天曆ノ治ト稱ス、主殿寮燦燭ヲ費スト多シトハ、政務多事ニシテ毎ニ夜ニ入ルヲ云ヒ、率分堂草生ストハ、堂ハ諸國貢上ノ租税ノ幾分ヲ分ナテ貯ヘ置ク處ナレトモ、此頃經費多ク、財政乏シクシテ、此堂ニ貯ヘ置クノ餘裕ナシ、之ヲ以テ草生セシナリ、

二代ノ政治ハ善治トイフヘキカ

サルコモ亦少カラス、藤原氏ノ權漸分レントスル時ニ於テ、菅原右大臣ヲ謫セシハ最其失政タル所ナリ、且積年太平ノ餘ヲ承ケテ上下偷安、奢靡ニ長シ延喜式載スル所ノ紀綱モ、タ、文具ノミニテ、實際ニ行フコトヲ得ス、清行ノ封事ニ據ルニ、諸國人口ハ減少シ國庫ハ空乏ニシテ、用度足ラストイヘリ、又天曆ノ後ニハ天慶ノ乱(將門純友等ノ反亂ヲイフ)僅ニ平キテ、又天徳ノ内裏燒亡アリ、神鏡ハ燒損シ、文書寶器ハ亡失セリ、用度足ラサルカ爲ニ官位ヲ賣リテ以テ之ヲ補フニ至ル、禁内京紳ノ風俗ハ風流文雅ヲ主トシ、和歌飲宴ニ耽リタレトモ、地方ノ豪族ハ己ニ各土地ヲ占メテ、隱然朝權武門ニ移ルノ緒ヲ開ケリ、然レハ此時外觀ニ於テハ、兵革起ラス、四境警ナク、上下文恬武熙ヲ樂ム故ニ太平極治ノ時トハ云フコトヲ得ヘシ、但治極レハ又變ス、コレヨリ後國家遂ニ多故ナルニ至レリ、

院宣ノ政トハ何ソ

後三條天皇英明ノ主ヲ以テ藤原氏ノ權ヲ抑ヘ、位ヲ太子ニ讓リ、政ヲ院中ニ廳キ王政ヲ恢復セントス、不幸ニシテ早ク崩ス(事前ニ詳ナリ)白河帝父皇ノ志

(一冊)

院政ハ何帝ニ始ルヤ

ヲ紹キ、政ヲ院中ニ聞クテ四十餘年、大臣ハ員ニ備ハリ、天子ハ垂拱シテ成ヲ仰クノミ、別當北面ノ侍ヲ院中ニ置キ、院宣ヲ以テ天下ニ号令シ、院宣ノ勢力詔勅ヨリ重シ、天下ノ形勢此ニ至リテ一變セリ、

白河法皇院政ヲ執ルカ故ニ堀河鳥羽兩帝在位ノ間ハ政事ヲ親スルコト能ハス(鳥羽ハ後ニ院政ヲキケリ)法皇ハ後ニ二條帝ノ風アリテ明決ナレトモ佛法ニ溺レテ營造ヲ事トシテ國用空乏セリ

鳥羽帝ハ遜位ノ後、政ヲ院中ニ聽クテ二十八年ナリ、帝ハ女寵多ク、美福門院ノ愛ニ溺レテ保元ノ亂アリ、世漸ク亂ル、

此間崇徳近衛兩帝在位トイヘ、院政ノ故ニ政ヲ親ラスルコトナシ、後白河帝モ在位ハワツカニ四年ニシテ、政ヲ院中ニキ、シハ三十餘年、白河

鳥羽ノ例ノ如シ、帝性昏闇、叛臣側ニアレトモ知ラス、亂逆相踵キ武臣跋扈シ王室日ニ衰ヘテ振ハス、コレヨリ平源二氏互ニ政權ヲ握リテ、建武中興(後醍醐帝ノ北條高時ヲ亡ホセシ時ナリ)ノ時ニ及ヘリ、

二條、六條、高倉、安徳、後鳥羽ノ諸帝在位中ハ、院政ナリキ

鳥羽ノ院政

後白河ノ院政

後鳥羽ノ院政ハ如何

此後モ後鳥羽上皇ハ數十年間院政ヲ聽ケリトイヘ、此時ハ源賴朝已ニ鎌倉ニ幕府ヲ開キテ、天下ノ大權ハ此ニ移リタレハ、院宣ノ政ヲ以テ天下ニ號令セシハ、前數代ノ法皇ノ間ニアルナリ  
院宣トハ、院トハ法皇ノ御所ナイフ、宣ハ宣旨ナリ重キコトニハ詔勅トイヒ、簡易ナルニハ宣旨トイヒシナリ、故ニ院宣トハ法皇ノ勅旨トイフカ如キモノナリ、

陸奥前九年後三年ノ役トハ何ソ其概畧ヲ叙セヨ

後冷泉帝ノ天喜四年(紀元千七百十六年)陸奥ノ安倍賴時乱ヲ起ス、賴時父祖數代陸奥ニ居リ、部族強大、陸奥ヲ横行シ、自ラ六郡ノ酋長トナリ、貢租ヲ納ル、而シテ國守制スル能ハス、源賴信ノ子賴義勇畧アリ、命シテ賴時ヲ討ム、戰フコト屢次、五年九月ニ至リ賴時終ニ誅ニ伏セリ、然レ、其子貞任尙屈セ、荐リニ殘兵ヲ集メテ善ク闘フ、互ニ勝敗アリテ數年決セズ、康平五年出羽ノ俘囚ノ長清原武則、兵一萬ヲ以テ來リテ賴義ニ從フ、賴義大ニ力ヲ得テ共ニ攻テ貞任ノ弟宗任ガ小松ノ柵ヲ拔キ之ヲ走ラシ、勝ニ乘シ進ンデ貞任ヲ

(三十三)

前九年ノ乱ノ起リハ何ソ

源賴義ニ助力セシハ誰ソ  
俘囚トハ中國ノ人蝦夷ニ因ハレテ久シク夷地ニ住居シタルモノ

ヲ云フ

厨川城ニ攻ム、城兵守嚴ニシテ近ヅクコトヲ得ズ、賴義乃チ火ヲ城中ニ縱テ、貞任以下諸弟并ニ其黨與ヲ誅ス、宗任族ヲ率井テ降ル、初メ賴義往テ征スルニ及ンテ、賴時風ヲ望テ降ル、既ニシテ其子貞任罪アリ賴義之ヲ刑セントス、賴時忿リテ曰、誰カ妻子ノ愛情無カラシヤ、吾今兵ヲ起シ命ヲ拒ムモ亦妻子ノ爲ナリト、復叛キ賴時貞任前後誅戮セラル、ニ至ル、其間連戰九年亂始メテ平グ、之ヲ前九年ノ役トイフ、(後ノ堀河帝ノ時ノ戰ニ對シテイフナリ)堀河帝ノ寛治元年(紀元千七百四十七年)陸奥守源義家兵ヲ出シ清原武衡家衡ノ乱ヲ平グ、初メ清原武則源賴義ニ從ヒ貞任ヲ滅セル功ニ因リテ、鎮守府將軍ト爲ル、其子武貞傳ヘテ陸奥六郡ヲ領シ、武貞ノ長子貞衡ニ至リ勢益強盛ナリ、異母弟家衡事ヲ以テ兄ニ背キ、兵ヲ擧ゲテ相攻ム源義家陸奥守ト爲リ、出羽ニ赴キ家衡ヲ圍ミテ利アラズ、家衡ノ叔父武衡義家敗ルト聞キ、兵ヲ起シテ之ニ應シ、仙北金澤ノ柵ニ據ル、義家大ニ怒リ數萬騎ヲ將井テ之ヲ攻ム、義家ノ弟義光京ヨリ下リテ力ヲ併ス、武衡家衡柵ヲ燒テ遁ル、義家追撃シテ二衡及ヒ其黨四十八人ノ首ヲ梟ス、奥羽平グ、コレヲ前ノ亂ニ對シ

武衡家衡ハ何故ニ  
乱ヲ生セシヤ

朝廷將士ノ功ヲ賞  
セザリシ結果如何

(四十三)

乱原ハ如何

テ、後二年ノ役トイフ、而シテ朝議義家ノ詔ヲ受ケスシテ兵ヲ擧ケシテ以テ、私鬪トナシテ功ヲ賞セス、義家乃チ私資ヲ以テ賞ヲ行ヘリ、源氏東國ノ亂ヲ定ムル凡テ三度、士民皆其恩信ニ服ス、相俱ニ請フテ其子弟ヲ擁戴シ、自家人ト稱スルニ至ル、後ニ賴朝流人ノ身ヲ以テ、一呼シテ關八州ノ將士悉集リシハ、ミナ祖先以來ノ家人ト稱スルモノアリシニヨレリ、保元ノ亂ノ起原并ニ其終結ヲ叙セヨ

保安四年崇徳天皇、鳥羽帝ノ讓リヲ受ケテ位ニ即ク、崇徳ハ鳥羽ノ子ナリ、然レモ故アリテ之ヲ疎ンス、鳥羽法皇寵姫アリ美福門院トイフ、保延五年皇子體仁<sup>ナリヒト</sup>ヲ生ム、法皇大ニ悦ビ生レテ僅ニ四月、立テ、儲貳トナス、美福門院法皇ニ體仁ノ速ニ登祚センコトヲ勸ム、法皇乃チ崇徳帝ニ逼リテ位ヲ退カシメ、遂ニ體仁ヲ立ツ、之ヲ近衛帝トス、崇徳固ヨリ位ヲ去ルノ志無シ、近衛帝崩スルニ及ビテ崇徳上皇復位ヲ冀フ、既ニシテ後白河天皇立ツ、崇徳大ニ失望セリ、(是)一因保元元年鳥羽法皇崩ス、崇徳入テ臨ム、遺命シテ宮ニ入レズ、上皇大ニ恚ル、(是)一因此時左大臣賴長ハ、其兄忠通ト權ヲ争ヒ相惡ム、(是)一因崇

德帝鳥羽法皇ト隙アルニ及ンデ、賴長ハ崇徳上皇ヲシテ重祚セシメ、己レ忠通ニ代リテ權ヲ專ニセント欲シ、之ヲ賛ケテ兵ヲ舉ゲシム、内大臣實能之ヲ諫ム、上皇聽カズ、賴長ヲシテ源爲義爲朝等ノ將士ヲ召シテ、白河ノ北殿ニ據ル後白河ハ源、義朝平、清盛等ヲシテ來リ攻メシム、勢甚ダ盛ナリ、爲朝等奮戰之ヲ却ク、義朝火ヲ縱ツ宮中大ニ亂レ、上皇蒼皇出テ走り如意山ニ入ル、遂ニ執ヘラレ讚岐ニ流サル、賴長流矢ニ中リテ死ス、爲義ハ子義朝ニ就テ出デ降ル、義朝己レノ功ヲ以テ其命ヲ贖ハンコトヲ請フ、時ニ清盛ノ叔父忠政上皇ニ與シ出テ降ル、清盛之ヲ殺シテ義朝ノ爲義ヲ殺サンコトヲ促ス、義朝遂ニ之ヲ殺ス、獨リ爲朝逃レシガ後捕ヘラレテ伊豆ノ大島ニ流サル、事平グ、之ヲ保元ノ亂トイフ、天皇上皇兄弟ヲ以テ相讐シ、忠通賴長亦兄弟相軋リ、義朝ハ爲義ヲ殺シ、清盛ハ忠政ヲ殺フ、人倫ノ紊亂前古未曾有ノ事ト云フヘシ、平氏ノ勢ヲ得タル所以如何

## (五十三)

平氏ハ桓武天皇ノ皇胤ヨリ出ツ、鎮守府將軍貞盛六世ノ孫ニ忠盛アリ、代々武ヲ以テ著ル、然レモ當時朝廷武人ヲ賤メ、忠盛ノ時ニ至ルマテ昇殿ヲ許サレシ、忠盛鳥羽上皇ノ得長壽院ヲ建立セシ時、土木ノ事ヲ司ル、其功ニヨリテ、但馬守トナリ、尋テ刑部卿トナリ昇殿ヲ許サル、然レモ人尙之ヲ卑シメテ侮辱スルニ至レリ、上皇、寵姫祇園社ノ傍ニ在リ、上皇嘗テ此ニ潛行ス、忠盛從ヒ、路鬼物ニ逢フ、忠盛直ニ捉ヘテ視レハ則一老僧ナリ、上皇其勇ヲ感シテ益寵ス、後姫ヲ忠盛ニ賜フ、時ニ姫身メルコトアリ、上皇曰、若男ナラハ汝子トセヨト、清盛是ナリ、

平氏ノ用ラレシ始  
イカン

清盛ノ恃ム所何レ  
ニアリヤ

清盛長シテ勇アリ、平治ノ亂、清盛、義朝、信賴等ヲ討テ功アリ、其子弟マテ官爵ヲ進メラレケレハ、勢威漸加ハル、既ニシテ其女徳子ヲ高倉天皇ノ宮ニ納レテ皇子ヲ生ム、後、安徳天皇トナル是ナリ、此ヲ以テ清盛身皇胤ニ出ツルヲ特ニ父祖及自己ノ功アルヲ恃ミ、外戚ノ尊貴ヲ恃ミ、威福己ニ由リ、子弟族人朝堂ニ掩映シ、領地二十餘國ニ跨カルニ至レリ、論者云、清盛往時藤原氏ノ盛ナルヲ羨ミ、コレニ倣フテ、以テ飽マテ富榮ヲ極メントスルノ志アリ、故ニ志ヲ得ルニ及テ、一門ノ榮耀彼カ如ク、暴ニ富榮ヲ致セリ、而レモ幾ナラスシテ、又暴ニ滅亡スルニ至レルモ、其暴戻驕橫自招ク

(六十三)

所ナルノミ

鎌倉幕府創立ノ概略ヲ叙セヨ

源賴朝伊豆ヨリ起リテ、治承四年八月始テ兵ヲ舉ケシナリ、關東ヲ平定セシカハ、大庭景義ヲシテ鎌倉ノ新第ヲ營作セシメテ此ニ遷ル、サレト未覇業ヲ開クニ至ラス、平氏西ニ滅ビ、源義仲亦亡フルニ及ヒ、兵馬ノ權ヤウヤク我ニ歸セシカハ、元暦元年八月兵ヲ起シ、ヨリ五年ナリ營所ニ就テ新ニ公文所ヲ造リ、別當寄人等ノ職員ヲ置ク建久元年冬賴朝右大將ニ拜スルニ及テ、公文所ヲ改メテ政所ト稱ス、號令賞罰悉ク此ヨリ發ス、世人賴朝ヲ稱シテ鎌倉殿トイフ、此時賴朝ノ弟義經平氏ヲ討テ功アリ、賴朝之ヲ忌ミ、兵ヲ遣ハシテ襲ヒ殺サントス、義經遁レ竄ル、賴朝乃チ大江廣元ノ策ヲ用ヒ、義經ヲ追捕セシメ、尋テ自將トシテ泰衡ヲ擊テ亡シ、悉ク奥羽ヲ平ク、是ニ於テ天下復抗スルモノナシ、賴朝諸國ノ租稅ノ滯納ヲ免シ、武士ノ大番(諸國ヨリ京都ニ交番

重ナル政廳ヲ何トイフヤ

賴朝兵ヲ起セシヨリ幾年ニシテ征夷大將軍トナリシヤ

(七十三)

鎌倉幕府ノ官制ヲ問フ

禁衛スルモノノ年限ヲ縮メ、以テ民心ヲ懷ケタリ、建久二年征夷大將軍ニ任セラル、是ヨリ政權ハ全ク鎌倉ニ歸シテ人復朝廷アルコトヲ思ハス、遂ニ六百年武治ノ始ヲナセリ、(兵ヲ舉ケシヨリ僅ニ十二年ナリ)

幕府ノ重職ヲ何トイフヤ

問注所トハ何ソ侍所トハ何ソ

幕府ノ海内ヲ制馭スルヤ、將軍ニ次キテ執權連署ノ二職ヲ置キ、賴朝ノ妻ノ父北條時政ヲ以テ執權ニ任シ、内外ノ機務ヲ總ヘシム、世ニ後見職トモイフ、政所ニハ別當以下數職ヲ置キ、大江廣元等ヲ任ス、凡政令ノ此ヨリ出ツルモノヲ政所ノ下文トイフ、問注所ヲ置キ執事寄人等ノ職アリ、三善康信等ヲ任ス、訴訟ヲ判決スル所ナリ、其兵政ヲ總管スルハ侍所ナリ、別當所司ノ職アリ、和田義盛梶原景時等之ニ任ス、政所ト相對シテ重要ノ職タリ、北條義時和田義盛ヲ亡シテ之ニ任セシヨリ、北條氏後見職ヲ以テ内外ノ庶政ヲ統ヘ、又兵馬ノ權ヲ握ル、コレヨリ百事已ニ由リ、遂ニ九代國命ヲ執ルニ至レリ、地方ノ職ハ諸國ニ守護地頭アリ、守護ハ武事ヲ掌リ、地頭ハ租稅ヲ司ル、鎮西奉行ハ九州ヲ治メ、奥州總奉行ハ奥羽ヲ治ム、蝦夷(今ノ北海道)ニハ蝦夷代

地方ノ職制ハ如何

官アリ、内外相維持シテ政治行ハル、此時朝廷ニハ太平游惰ノ餘ヲ受ケテ、百官ミナ文弱ニナカレ、盜賊横行スレモ之ヲ捕フルト能ハス、政令亦繁苛ニシテ人民之ヲ厭フ、而シテ頼朝ハツトメテ簡易ニシテ實用ニ適センコトヲ主トシタリ、賞罰又嚴明ニシテ人才ヲ擇用セシヲ以テ、大ニ世態人情ニカナヘリ

北條九代トハ何ソ

- 第一代時政執權(自元治元年至元久二年)七年
- 第二代義時執權(自元久二年至元仁元年)廿年
- 第三代泰時執權(自元仁元年至仁治二年)十八年
- 第四代經時執權(自仁治三年至寛元四年)五年
- 第五代時頼執權(自寛元四年至康元元年)十一年
- 第六代長時執權(自康元元年至文永元年)九年
- 第七代時宗執權(自文永三年至弘安七年)廿年
- 第八代貞時執權(自弘安七年至延元元年)十九年
- 第九代高時執權(自正和五年至正慶二年)十八年

凡百二十餘年

(八十三)

征夷大將軍頼朝薨シテ後、北條時政執權ヲ以テ威權ヲ弄シ、頼家及ビ其子一幡ヲ弑シ、子義時襲テ執權トナリ、畠山和田ノ兩將ヲ殺シ、又頼家ノ子公曉ヲ誑キテ實朝ヲ弑セシム、甚ダシキハ三帝ヲ遷シ、二親王ヲ流スニ至ル、義時ノ子泰時勤慎ニシテ治體ヲ得タリ、子時氏早ク死シ、孫經時嗣グ、五年ニシテ病アリ、職ヲ弟時頼ニ讓ル時頼施政一ニ泰時ニ則リ、最モ儉素ヲ尙フ、其子時宗尙幼ナリ、族長時執權トナル、幾クモナクシテ時宗職ヲ嗣グ、時宗元使ヲ斬ルコト二回、元大舉シテ來ル、時宗之ヲ西海ニ鑿ニス、是ヨリ元再ビ日本ヲ窺ハズ時宗卒シテ其子貞時執權トナル、貞時頗ル賢名アリ、毎年使者ヲ諸國ニ遣ハシテ吏務ヲ察シ、其奸私ヲ摘ミテ罪ニ處ス、子高時職ヲ襲ギテ暴戾奢侈ニ耽リ、鬪犬ヲ好ミ田樂ノ戲ヲ爲シ、曾テ民治ニ心ヲ委テズ、諸國勤王ノ師起ルニ及ンテ新田義貞ニ討テ敗ラレ、北條氏はニ至リテ亡ブ、北條氏時政ヨリ高時ニ至ルノ間、時宗ノ幼時ニハ政村、又高時ノ幼時ニハ時村師時等假リニ執權タリ、然レモ代數ニハ加ヘズ、北條氏ハ實朝ノ薨後更ニ藤原氏ニ倣ヒ、常ニ幼主ヲ擁シテ天下ニ令シ、專ラ人心ヲ收メテ以テ大權ヲ

(九十三)

承久ノ乱トハ何ソ

竊ム一十九代百二十七年間ニ涉レリ、  
兩六波羅ヲ置キシ素心ヲ述ヘヨ  
北條時政義時等、賴朝、寡婦ヲ誑キ、其兒息ヲ叛賊シテ、專自家ノ專横ヲ恣ニシ、朝廷ヲ蔑如シ皇權ヲ蹂躪シケルヲ以テ、後鳥羽上皇時ヲ待テ之ヲ亡サシメテ謀リ、密ニ諸國ノ豪族ニ諭シ、又近畿ノ兵ヲ集メ、遂ニ義時ノ罪狀ヲ聲ラシテ之ヲ討タントス、官軍凡一萬七千餘人、義時乃十九萬人ノ兵ヲ發シテ之ヲ拒キ、官軍敗ル、乃三上皇ヲ遠國ニ遷シ、一親王ヲ流シ、與謀者ヲ罰シ事平ク、コレヲ承久ノ變トイフ、

義時之ニ懲リ、名ヲ大内警衛ニ藉リテ、時變ニ備ヘントス、時房泰時ノ二將ヲ京六波羅ノ南北ノ亭ニ分居セシメ、京畿及關西諸國ノ政務ヲ總管セシメタリ、之ヨリ後北條一門ノ世職トナリ、權勢關東ノ執權ト相匹セリ、此ニ於テ錄倉ニ准シテ諸司ヲ置キ、庶務ヲ分掌セシムルヲ如左、

- 評定衆
- 引付頭
- 奉行
- 越訴奉行
- 問注所執事
- 同寄人
- 侍所
- 檢斷所等ナリ

兩六波羅ハ誰ノ世職トナリシヤ

(十四)

北條氏ノ時代佛法ノ盛衰如何

王朝ノ盛ナリシ頃ニハ、佛法ハ三論、法相、俱舍、成實、律、華嚴ノ六宗アリ、シカレニ後世漸ク衰フ、平城嵯峨兩朝ノ頃僧空海(弘法大師トイフ)眞言宗ヲ唱ヘ、僧最澄(傳教大師トイフ)天台宗ヲ創ム、並ニ大ニ行ハレテ北條氏ノ時ニ至ル、賴朝ノ時僧榮西宋ヨリ歸朝シテ禪宗ヲ弘ム、禪宗ハ二派アリ、臨濟宗曹洞宗ナリ、曹洞宗ハ時賴ノ時僧道元宋ニ如キ禪ヲ學テ歸リ、其宗祖トナル、臨濟宗ハ、榮西ヲ以テ祖トナス、此時時賴時宗貞時ミナ執權職ヲ以テ之ヲ信シケレハ、禪宗大ニ興ル、

禪宗ノ二派ハ何々ナリヤ

淨土宗ハ誰ヨリ起リシヤ

淨土宗亦同時ニ弘マル、僧源空ヲ以テ宗祖トス、源空ハ美作ノ人ナリ、天台ノ教義ヲ學ヒ更ニ黑谷ノ叡空ニ從ヒ、名ヲ法然ト改ム、晚年惠心ノ往生要集ヲ讀ミテ悟ル所ナリ、舊業ヲステ、淨土專念ノ一宗ヲ立テ、吉水ニ居テ盛ニ之ヲ唱フ、後圓光大師ト諡ス  
法然ノ弟子ニ親鸞アリ、日野氏ノ族ナリ、淨土宗ヨリ出テ、別ニ一向宗ヲ起ス、又淨土眞宗トモ云フ、肉食妻帶俗ト異ルヲナシ、本願寺ヲ立テ、其開祖タ



一向宗ノ中興ハ

リ、八代ノ孫蓮如、文明中ノ人ナリ、雄辯勸誘ニ長ス、多ク無頼ノ徒ヲ嘯合シテ兵ヲ蓄ヘ、屢戦争ヲナセリ、一向宗此蓮如ノ時ニ於テ大ニ興ル、因テ中興ノ祖トイヘリ

日蓮宗

北條氏ノ時日蓮アリ、安房ノ人ナリ、法華經ニ因テ一宗ヲ創メ、南無妙法蓮華經ノ七字ヲ唱ヘ、其功德ヲ説キ、嚴ニ他宗ヲ攻撃セリ、法華宗又日蓮宗ト稱ス、身延山ヲ開キ又本門寺(武藏國池上)ヲ創ム

時宗

又ユノ時代ニ時宗トイフモ始マレリ、時宗ハ僧一遍ヲ開祖トス、一遍ハ伊豫ノ人ナリ、常ニ諸國ヲ遍歴シテ人民ヲ教化ス、世コレヲ遊行上人トイフ、相摸藤澤ノ清淨光寺ヲ其本寺トス、

新宗ノ輩出セシ原  
因何レニアリヤ

之ヲ要スルニ當時人民武治ノ下ニ生活シ、概學問ヲ事トセス、右諸宗ノ説ク所卑近ニシテ俗耳ニ入りヤスキヲ以テ、大ニ時人ノ信仰スル所タリ、蓋上古ノ教義ハ上古ニ行ハレ、中古ノ教義ハ(天台眞言ノ如キ)中古ニ最盛ニシテ、近世ノ宗門ハ亦最近世ニ盛ナリトス、

一十四)

蒙古入寇始末ノ大要ヲ問フ

北條時宗執權ノ時ニ當リテ、支那ハ宋ノ代亡ヒテ、其北方ナル蒙古大ニ興リテ、支那全部ヲ領シ、四隣ヲ併吞シ版圖ヲ廣メテ國號ヲ元ト改ム、其帝姓ハ奇渥溫、名ハ忽必烈ト云フ、諸方ノ國ソノ勢ニ怖レテ降服スレトモ我日本獨リ之ニ從ハサルヲ見テ後宇多帝ノ建治元年先ッ其臣杜世忠何文著等ヲ使トシテ長門ニ來リ通信ヲ乞フ而書辭禮ナク我ヲ威服セシメントスルニアリ時宗之ニ鎌倉ニ召致シテ之ヲ斬ル

是ヨリ先キ、龜山帝ノ文永五年既ニ蒙古ヨリ高麗ノ牒狀ヲソヘテ通交ヲ促ス返書遣ハサ、ルカ故ニ同六年又蒙古ヨリ八人高麗ヨリ四人從類七十餘人ヲ遣ハシテ對馬ニ來レリ同八年ニモ趙良弼等來レリ然レモ遂ニ要領ヲ得ス十一年來リテ壹岐對馬ヲ攻掠ス遂ニ太宰府ニ寇セリ菊池武房其將ヲ斬ル船亦漂蕩シテ志ヲ得ス此ニ至リテ又使ヲ送レリ(以上ハ蒙古未宋ヲ亡ホサ、ル時ノナリ)

弘安二年元ノ使者又至ル、博多ニ於テ劄セシム、初元使ノ至ル天朝答書ヲ遣スヘキヤ否ヲ鎌倉幕府ニ下シテ議セシム、時宗聽カス、時宗剛武ニシテ膽略

アリ、前後其使ヲ斬リ、北條實政ヲ九州探題トナシ、精兵ヲ發遣シテ預メ元寇ニ備フ、朝廷マタ頻リニ使ヲ諸社佛寺ニ遣シテ祈禱防禦ノコトアリ、弘安四年(紀元千九百四十一年)忽必烈大ニ恚リ、十万ノ兵ヲ發シテ高麗ノ援軍ト共ニ先對馬壹岐ニ寇シ、七月肥前鷹嶋ニ集ル、船艦海ヲ掩フ、卅日ノ夜大風暴ニ起リ敵船漂颺ス、我兵勢ニ乘シテ之ヲ撃テ、閏七月一日ニ至リテ之ヲ鑿ニス、十万ノ兵生キテ還ルモノ僅ニ三人ナリ、之ヲ弘安蒙古ノ入寇トイフ、蒙古ハ國大ニ兵強ク當時世界比ナシト稱スルモノ、而シテ今此ノ如シ、時宗ハ功大ナリトイフヘシ、

(二十四)

後深草龜山兩統迭立ノ起リハ如何

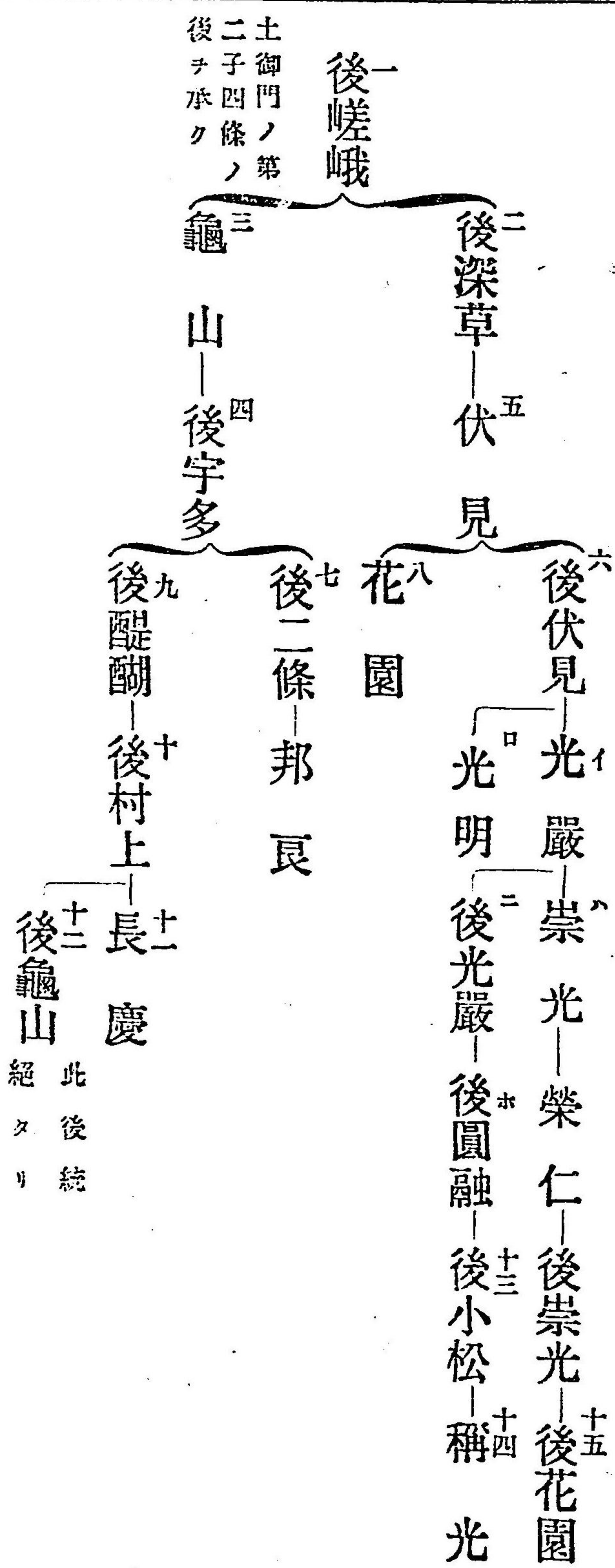
後嵯峨上皇龜山帝ノオアルヲ愛シ、後深草帝ヲシテ位ヲ讓ラシメ、其子孫ヲシテ世々帝位ヲ嗣カシメントス、龜山ノ子孫宇多帝立ツニ及ヒテ、後深草上皇イヨク勢ヲ失ヒ援ヲ北條時宗ニ求ム、時宗乃上皇ノ子伏見帝ヲ立テ、其子後伏見帝ニ傳フ時ニ時宗死シ、子貞時嗣ク、後宇多上皇其先帝ノ旨ニ違フヲ以テ、貞時ヲ誚ム、貞時遂ニ後深草龜山ノ兩統十年毎ニ迭ニ立ツノ議ヲ定メ、上皇ノ子後二條ヲ立テ事遂ニ定マル、

兩統迭立ノコトハイカナル結果ヲ招キシテ

(三十四)

南北朝ノ分レタル順序ヲ述ヘヨ

後深草ノ後ヲ持明院ノ流トイヒ、龜山ノ後ヲ大覺寺ノ流トイフ、皇權相分レテ朝廷益弱クナレリ、後ニ南朝北朝ト分ル、モノ、亦此兩流ニ出ツ畢竟北條氏ノ謀ル所遂ニ其備ヲナセルナリ



護良親王僧トナリ  
テ如何ナルヲ謀  
リシカ

義兵ヲ擧ケシ人ノ  
重ナルモノハ  
楠木ト書クヘキ  
川田剛先生ノ  
楠氏考ヲ看ルヘ  
シ

中興畢ヘサリシハ  
何故ソ

南北兩朝相分レシ  
年數代數如何

足利ノ京師ニ居リ  
シハ何故ソ

(四十四)

後二條帝位ヲ花園帝ニ傳ヘ、花園又後醍醐帝ニ傳フ(此マテハ兩統迭立ノ議行ハレシナリ)後醍醐幼ニシテ穎悟ナリ、祖父龜山上皇之ヲ鍾愛ス、花園即位シ後二條ノ子邦良マサニ立ツヘキニ、父後宇多上皇思フ所アリトテ、先ツ帝ヲ立テ、邦良ヲ其太子トセリ、既ニシテ邦良薨ス、帝皇子護良ヲ立テントス、北條高時迭立ノ議ヲ執リテ、後伏見ノ皇子量仁ヲ太子トス(即北朝ノ光嚴帝ナリ)護良延曆寺ノ座主トナリ、大塔宮ト稱ス、僧徒ニ結ヒ其力ヲ藉リテ北條氏ヲ圖ラントスルナリ、時ニ高時政ニ怠リ人心漸乖ク、帝之ニ乘シテ王威ヲ復セントス、事泄ル、後伏見上皇竊ニ之ヲ高時ニ告ケシナリ、高時遂ニ帝ヲ廢セントス、帝笠置山ニ遁ル、既ニシテ執ヘラル、

高時帝ヲ隱岐ニ還シ光嚴帝ヲ立ツ、楠木正成(楠ハ楠木ト二字ニカクヘシ)赤坂ニ城キテ勤王シ、諸國ノ義兵亦響ノ如ク應ス、帝竊ニ隱岐ヲ遁レテ出テ、伯耆ニ渡リ、名和長年ニ頼ル、時ニ上野人新田義貞子義顯弟脇屋義助等ト義兵ヲ擧ケ、鎌倉ヲ攻メテ高時ヲ殺ス、北條氏亡フ、後醍醐帝京師ニ還リ、光嚴帝ヲ廢シテ位ニ復ス諸將ノ功ヲ賞シテ諸國ノ守護トナシ、自政事ヲ聽キ、中興ノ業成ル、

既ニシテ帝政ニ怠リ、天下怨望スルモノ多シ、足利尊氏之ニ乘シテ反ス、其王師ニ抗シ賊名ヲ負フヲ忌ミ、光嚴上皇ノ院宣錦旗ヲ請ヒ、光明帝ヲ立テ後醍醐帝ヲ誑テ、神器ヲ傳フ、後醍醐偽器ヲ授ケテ吉野ニ幸シ、行在所トス、楠木正行等之ヲ衛ル、是ニ於テ同時ニ帝アリ、吉野ヲ南朝トイフ、眞ノ神器ヲ傳フ、正統ナリ(大覺寺ノ流京都ヲ北朝トイフ、閏位ナリ、(持明院ノ流)コノ後兩朝並立シ、南朝ハ二代北朝ハ四代ヲ歷テ相分ル、一五十七年、後小松帝ニ至テ兩朝統一セリ、時ニ紀元二千五百一十二年(明德二年)ナリ、而シテ後小松ハ持明院ノ流、ナリコノ後相承ク、大覺寺ノ流ハ遂ニ絶エタリ

足利氏ノ權ヲ鎌倉ニ分ナタル素心並其結果如何  
足利尊氏光明帝ヨリ征夷大將軍ニ任セラレ、室町幕府ノ業ヲ創メタリ、然レモ南朝常ニ京師ヲ伺フヲ以テ居ヲ京師ニ設ケ、此所ヨリ政令ヲ發シテ以テ軍國ノ事ヲ掌リ、而シテ別ニ子基氏ヲ鎌倉ニ置キテ東國ヲ管領セシム、盖足利氏ハ下野ニ起リ其族類祖先ノ時ヨリ東國ニ蕃衍セリ、是ヲ以テ尊氏ノ反

スル東國人士ノ力ニ頼ルヲ多シ、尊氏京都ニ居ルトキハ其頼テ以テ根據ト  
スル關八州ハ空虚ニ歸スルノミナラヌ、南朝ノ臣北畠親房子顯家等大軍ヲ  
以テ奥羽ニ居リ、不虞ノ警ナシトセス、是ヲ以テ基氏ヲ鎌倉ニ置キ關東ヲ治  
メシメタルナリ

關東兵勢ハ何故ニ  
京都ヨリ盛ナリシ  
ヤ

基氏ノ關東ヲ管領セシヨリ大ニ東國人士ノ心ヲ得ダリ、相傳ヘテ孫滿兼ニ  
至ル、コノ時鎌倉ノ兵勢京師ニ倍シ、百事室町ニ(幕府ノ在ル所ナリ)擬ス、滿  
兼大内義弘ト陰カニ約シテ東西相援ケ、以テ將軍義滿ヲ圖ル、義滿義弘ヲ誅  
シ、尋テ滿兼ヲ討ントス、上杉朝宗百方和ヲ講シ稍ク解クヲ得タリ、滿兼卒  
シ子持氏嗣ク、永享十一年持氏上杉憲實ヲ討ツ、克タスシテ自殺ス、基氏管領  
タリシヨリ四代九十一年ニシテ亡フ(正平四年ヨリ永享十一年マテ)後持氏  
ノ子成氏下總ノ古河城ニ據リ、管領上杉氏ト爭亂止マス、東國亂ル、  
初北條氏ノ幕府ノ執權タリシ時ハ、府ヲ鎌倉ニ定メ、而シテ京都ナル兩六波  
羅ニ支府ヲ設ケ、關西ノ事ヲ統ヘシム、足利氏ハ南朝ヲ虞ルカ爲ニ、之ニ反シ  
テ鎌倉ニ支府ヲ置ク、而レモ鎌倉ハ足利氏ノ根據ノ地、加フルニ基氏賢ニシ

テ士心ヲ得、室町ノ權岐レテ一ツトナル、此ヲ以テ義滿滿持ミナ陰ニ鎌倉ヲ  
圖リ爭亂止ムコナク、持氏死シ鎌倉亡フルニ及テ室町モ亦衰ヘタリ、

(五十四)

義滿ハイカン

足利將軍ノ國體ヲ辱シメシ一一一例ヲ示セ

足利第三代ノ將軍義滿、應永八年僧祖阿ヲ明ニ遣ハシテ好ヲ通シ、金千両馬  
十四及兵器扇紙等ノ物ヲ贈ル、參議菅原秀長ヲシテ書ヲ作ラシム、書辭甚恭  
シ、時ニ彼國ハ太宗建文ノ世ニシテ、年号ヲ永樂トイフ、明年明主僧道彝ヲシ  
テ報聘セシメ、義滿ヲ封シテ日本國王ト爲トイフ、義滿喜テ之ヲ受ク、義滿薨  
スルニ及テ、明主又諡シテ恭獻王トイフ、義滿豪奢ヲ好シ、花御所(殿ノ名)ヲ  
築キ、金閣寺ヲ建テ、華麗ヲ窮極ス、財用乏シ、明主時ニ永樂錢ヲ鑄ル、因テ  
之ヲ頒贈ス、義滿又喜テ受ク、

義政ハイカン

後將軍義政ノ時ニ至リテ、東山ノ亭ヲ營ミ、銀閣寺ヲ建テ奢侈ヲ好ミシカハ  
國用給セス、仍テ又明國ニ使ヲ遣ハシテ錢ヲ賜フコトヲ乞フ、寛正五年、文明  
七年、同十五年、凡三度ナリ、就中文明十五年ニハ錢十万貫ヲ賜フコトヲ得ハ、我  
國ノ用足ルト哀求スルニ至レリ(我國ニ永樂錢多キハ此故ナリ)

(六十四)

義滿、天朝ノ臣トシテ、濫ニ外國ノ封爵ヲ受ケ、義政マタ明ニ哀求シテ錢貨ヲ得、以テ國用ヲ足サントスルニ至レルナト、最我國體ヲ汙辱セシモノナリ、應仁ノ亂トハ何ゾ

後土御門天皇寛正五年、將軍義政其弟義視ヲ立テ、嗣ト爲ス、誓フテ曰ク若シ男ヲ擧ゲバ僧ト爲サント、細川勝元ヲシテ義視ヲ輔ケシム、後義政義尙ヲ生ム、其母僧ト爲スニ忍ビズ、山名持豊ニ托ス、持豊大ニ喜ビ、擁立シテ勝元ノ權ヲ奪フノ計ヲ爲ス、是ヨリ先キ畠山持國子ナシ、其姪政長ヲ養フテ嗣ト爲ス、持國義就ヲ生ム、因テ政長ヲ廢セントス、政長去テ勝元ニ依ル、勝元之ヲ援ク、持國モ亦之ニ黨ス、持國乃チ勝元ニ謝シ、義就ヲ逐フ、義就河内ニ走り、嶽山ニ據ル、政長勝元持豊ノ助ヲ得テ嶽山ヲ攻ム、義就敗走シテ高野ニ入ル、嶽山ノ戰、義就奮鬪ス、持豊其勇ヲ聞キ營救シテ以テ己レガ援ト爲サント欲シ、義政ニ請フ、義政乃チ義就ヲ赦シテ京師ニ還ラシム、應仁元年正月持豊義就ヲ政長ノ第二納レントス、政長兵備ヲ爲ス、勝元之ヲ助ク持豊亦戒嚴ス、義政令シテ政長義就手兵ヲ以テ雌雄ヲ決ス可シ、諸將相助クル勿レト、然レモ持

豊潛ニ義就ヲ援ケ撃テ政長ヲ走ラス、世人勝元ヲ嗤フテ怯ト爲ス、勝元慙憤シ其黨與ノ諸國ニ在ルモノニ檄シテ十六万ノ兵ヲ招ク、持豊モ亦十一万ノ兵ヲ集メ、勝元ハ東ニ陣シ、持豊ハ西ニ陣ス、義滿以來京師稍、少康ヲ得タルニ、是ニ至テ兩軍戰鬪已ム時ナク、東軍毎ニ利ヲ失フ、勝元將軍義政ヲ擁シ又天皇及ヒ上皇ヲ其軍ニ迎フ、是ヨリ東軍毎ニ勝利アリ、西軍モ亦義視ヲ奉シテ將軍兄弟ノ相爭フガ如クス、文明五年持豊勝元相尋テ卒ス、九年義視美濃ニ走り、西軍ノ諸將散歸ス、應仁以來前後十一年間京師爭戰ノ區ト爲ル是ニ至テ兩軍始メテ散ズ、然レドモ是ヨリ諸將互ニ攻略ヲ事トシ幕府ノ威令復行ハレズ、諸侯漸ク割據ノ勢ヲ爲ス、是ヨリ先キ義政老シ子義尙職ヲ襲ギ、名ヲ義熙ト改ム、義政第ヲ東山ニ營ミ、茶宴ヲ設ケ古器書畫ヲ集メテ奢侈ヲ極ム、賦役度ナク上下疲弊シ紀綱廢弛ス、

足利氏ノ時文學ノ狀態如何

文學ハ武治ノ世ニナリテヨリ大ニ衰ヘタレトモ、足利ノ時ニ至リテ最甚シク、文學ノ事ニ堪ヘタルハ僅ニ五山(京ニアリ)ノ僧徒ノミ、因テ外國通好ノ往

(七十四)

寺子屋ノ稱ハ淵源アリヤ

復書簡ヲ初、日記等ノ事ニ至ルマテ、重ニ僧徒ヲ採用シ、公卿武臣ハ曾テ文事ニ心ヲ用フルヲナカリキ、又用フヘキ暇日ナク、公卿ハ衣食ニ苦ミ、武人ハ戰爭ニ勞シタルナリ、如之度々ノ兵戰ニ、京洛ノ地ハ屢兵火ニ焚カレ、累代ノ史書圖籍大半之ヲ失ヒタレハ、文學ノ志アルモノモ得テ學フ可ラサルニ至レリ、又民間ニテ文筆ノ事ヲ知ラントスル者ハ、專寺僧ニ頼リテ之ヲ學フ、僧徒モ亦其任トセリ、後世私塾ノ書ヲ讀ミ字ヲ習フ所ヲ寺子屋ト稱スルモノ、當時教育ハ僧徒ノ與ル所ナリシ遺風ノ存スルナリ、足利ノ末造ニ及テハ益甚シク、京都ニ四書ノ素讀ヲ知レル人ナク、タ、公家衆ノ中山科言綱卿一人ナリシト老人雜話ニイヘリ以テ其一班ヲ見ルヘシ

(八十四)

戰國ノ際重ナル大名並ニ其割據ノ地方ヲ示セ  
應仁乱ノ後、足利氏威衰ヘ諸國ノ豪族諸方ニ割據シ爭戰已ム時ナシ元龜天正ノ際ニ至リテ最甚シ今列國割據ノ地方ト其大名ノ重ナルモノヲ舉ク  
近畿  
織田信長 美濃、尾張、近江、山城、大和、河内

北畠信雄 伊賀、伊勢、志摩

羽柴秀吉 攝津 根來僧徒及畠山氏 紀伊

東山東海

武田今川二氏 甲斐、信濃、駿河

關東

北條氏 武藏、相模、伊豆

里見氏 安房、下總ノ内

宇都宮、喜連川二氏 下野、下總

佐竹氏 常陸

奥羽

南部、伊達、大崎、相馬、蘆名ノ諸氏(陸奥) 秋田、大寶寺、最上ノ諸氏(已上出羽)

北陸

上杉謙信 越後、越中、飛驒、能登、加賀、上野、佐渡

山陰山陽

毛利氏 周防、長門、安藝、備中、備後、伯耆、出雲、隱岐等

山名氏 但馬、因幡

一色氏 丹後

宇喜多氏 備前

浦上氏 美作

赤松別所二氏 播磨

波多野氏 丹波

四國

細川三好(阿波、讃岐)長曾我部(土佐)河野(伊豫)

九州

大友氏 豊前、豊後、肥後

島津氏 薩摩、大隅、日向

龍造寺氏 筑前、筑後、肥前

宗氏 壹岐、對馬

(九十四)

戰國ノ時勤王ノ志アリシ大名ヲ舉ケヨ

内裏ノ有様ハイカ

織田信長ノ勤王ハ  
イガン

毛利元就ハイカン

足利氏ノ末、海内鼎ノ沸クカ如ク乱レテ、争戦已マス、朝廷ハ供御欠乏シテ、百  
度衰廢セリ、サレハ内裏モ田舎ノ民屋ニ異ナラス、築地(垣ナリ)ナトモナク、  
僅ニ竹垣ニ茨ナトヲ結ヒメクラシテ、之ヲ圍メルノミ、ソノ竹垣モ亦破レテ、  
土地ノ兒童等、紫宸殿ノ椽ニ上リテ遊戯スルニ至レリ、(ユノ事老人雜話ニ見  
エタリ)而足利將軍ノ威亦已ニ衰ヘタレハ、孰モ之ヲ顧ミルモノナシ、此時ニ  
當リテ善ク禁中ヲ造營シ、供御用度ヲ献スルモノハ、實ニ衆ニ卓越セル勤王  
ノ志アルモノト云ヘキナリ、

天文十二年織田信秀之ヲ慨シ、四千貫文ヲ以テ皇后ヲ修造シ、始テ尊嚴ヲ持  
ツニ至リシカハ、後奈良天皇叡感斜ナラス、子信長嗣キテ益勤王ノ志アリ、遂  
ニ内詔ヲ蒙ルニ至レリ、

弘治三年十一月正親町天皇踐祚マシ、ケレトモ、争乱ノ世ナレハ、三年ノ  
間即位ノ大禮ヲ行フ能ハス、毛利元就之ヲ聞キ、彼用度ヲ調進シテ、大禮始  
テ成ルヲ得タリキ、朝廷乃大膳大夫ニサレ、菊桐ノ紋章ヲ賜ヒ、又陸奥守  
ニ任ス、

上杉謙信ハイカン

永錄中上杉謙信、既ニ威ヲ北陸東山東海ノ諸道ニ振ヒ、從四位下彈正大弼トナル、謙信自謂ラク、當時戰國ノ際ナレハトテ、坐シテ朝官ヲ受クルト恐レアリ又將軍ニ謁セサルモ武門ノ耻辱ナリト、乃路ヲ隣國ニ借り、同二年五月僅ニ二千八百人ヲ率テ都ニ上リ、先皇居ニ參内シテ、而後ニ公方ニ謁セリ、以上ノ諸氏ハ、當時ニアリテ最其志ノ在ル所ヲ見ルニ足レリ、

鐵砲ハ何レノ時代ニ傳來シ何レノ戰爭ノ頃ヨリ使用シ來リタルカ

(十五)

天文十二年癸卯(西曆一千五百四十三年)八月葡萄牙人大隅種子島ニ來リ鳥銃ヲ傳フ、嶋主種子島時堯大ニ悦ビ、之ヲ購ヒ、家人ヲシテ其術及製藥ノ法ヲ學ハシム、紀伊根來寺ノ僧時堯ニ請フテ之ヲ傳フ、然レモ製法未備ハラス、十三年甲辰葡人復來ル、時堯鍛工清定ニ命シ其製法ヲ學ハシム、新ニ數挺ヲ製ス、後和泉ノ人、橘屋又三郎ト云フモノ種子島ニ學ヒ業成テ歸ル、島主時堯新ニ十挺ヲ製シ、國主島津貴久ニ獻ス、貴久之ヲ將軍義晴ニ獻ス、後數年天下ニ遍ク、傳テ利器ト爲ス、

鳥銃得タル後邦人

西書云、天文十二年葡萄牙人ヒントウ及セーモトノ種子島ニ往クヤ、支那ヨ

ノ進歩イカン

リ多ク手銃ヲ舶載ス、二人素ト射撃ニ練熟セリ、日本人之ヲ見テ大ニ驚キ幻術トセリ、地頭之ヲ聽テセーモトヲ召シテ其術ヲ試ミ、驚嘆シテ義弟ト爲シ、一室ヲ設ケテ之ヲ待ツ、セーモト手銃一挺ヲ贈リ、且火藥製造ノ方法ヲ教ユ、乃銀一千兩ヲ用テ之ヲ報ス、既ニシテ其說四方ニ噪ク、豊後ノ大友宗麟使者ヲ遣リヒントウヲ招キ、禮ヲ盡シテ之ヲ待ツヒントウ手銃ヲ獻ス、宗麟之ヲ珍トス、更ニ火器製造ノ方法ヲ傳テ去ル、後四年ヒントウ再ヒ九州ニ來リ日本人ノ火藥火器ヲ製造スルノ熟達ニ驚キタリ云々、

右野史南浦文集ヲ引テ外交志稿ニ舉ケタルニ據ル、鳥銃ヲ傳ヘシ年諸書ニ異說アレトモ、今普通ノ說ニ從ヘリ、

戰爭ニ用ヒシ始ハ軍器考補正評曰、按スルニ萬松院殿穴太記、如意カ嶽御普請ノ條ニ、尾先ヲハ二重ニホリ切テ二重ニ壁ヲ付テ、其間ニ石ヲ入タリ、是ハ鐵砲ノ用心也トアリ、是天文十九年ノ事也、其比ニハ既ニ鐵炮盛ニナリシヲ知ルヘシ、

羽柴氏ト毛利氏トノ間親密ニナリタル事情如何

(一十五)



毛利輝元  
吉川元春  
小早川隆景

兩氏締交ノ機會ヲ  
與ヘタルハ何ニ原  
因スル乎

此問題ニ答ヘンニハ、藩翰譜ノ文最要ヲ得ルヲ以テ、左ニ掲ケン、  
天正五年ノ頃ホヒ、毛利ト織田ト軍オコリ、羽柴筑前守秀吉大將ヲ承賜ハリ、  
播磨國ヲ打隨ヘ、備前國ヲハジメテ因幡伯耆ノ國人等ヲ降シ、同十年ノ春  
備中國ニ攻入、冠河屋等ノ城ヲオトシ、高松ノ城ヲ攻メ、輝元元春隆景八万  
餘騎ヲ率井テ後卷セントテ打出、信長ノ軍勢又雲霞ノ如ク攻下ルト聞タリ  
シカハ、毛利ノ人々相議リ、備中備後伯耆二ヶ國ヲ信長ニ授ケ渡シ、中直リ  
スヘシトテ秀吉ノモトニ使シテ、永ク兩家ノヨシミヲ結ブヘキヨシヲイヒ  
送ルコト度々ニ及ブ、カ、ル處ニ同六月二日信長明智カ爲ニ失ハレタマフ  
由、秀吉ノ陣ニ聞ユ、秀吉キツトモツ、マズ毛利カ使ニ向ヒ、織田殿既ニ逆  
臣ガ爲ニ討レタマヒヌ、カクテモ猶輝元秀吉トヨシミヲ結バン事、始ヨリ聞  
所ノゴトクニヤアラン、今ハ又違フ事ヤアルヘキ、汝トク歸リテ此ヨシヲ語  
リ、汝カ主ノ思ハン様ヲキツト承リ來レ、其上ニコソ返答ニハ及フヘケレト  
テ歸サル、輝元宗徒ノ人々ヲ召集メテ此事ヲ會議ス、當家信長ニコソ中直ラ  
ントイヒケレ、秀吉ガタメニアラス、信長忽討レン事偏ニ當家ノ幸ヒナリ、

親交ノ動議ヲ發セ  
レハ難ソ

一先本國ニ引返シ世ノ成行ンヤウヲ御覽ズビヤウモヤ侍ント、皆一同ニ申  
ケリ、小早川左衛門督是ヲ聞テ、隆景カ存スル處人々ノ議ニ同カラス、抑本  
朝ノ兵革頻リニウゴキ、テコ、二百餘年天下ノ乱既ニ極リヌ、世又泰平ニ屬  
スヘキ期ヤ、近キニアリ、此時ニ當テ自ラ天下ノ權ヲ握リ、海内ノ乱ヲ拂フ  
人ナトカナカルヘキ、此年頃彼秀吉ノ振舞ヲ傳ヘ聞ニ、其事モシ此人ニヤ有  
ヌヘキ、サレハ此度信長カ死セン事秀吉ノ身ニトリテハ深キ禍ヒニハ似タ  
レヒ、是併シナカラ天下此時ニ歸シヌヘキ時既ニ至リヌト覺ユル也、ヒロク  
此人ノ振舞ヲ論スルマテモ侍ラス、今當家ヨシミ既ニナラントスル時ニ臨  
ンデ、唯尋常ノ心ナランニハ、イカニモシテ信長ノ死ヲ深クカクシ、堅ク盟  
ヲ結ヒテコソ其事ヲモ披露有ヘケレ、夫ニカク眞直ニ申送ル條、甚以テ不敵  
也、然ルニ今始ノ詞ニ引カヘテ秀吉ト中違ヒタランニハ、長ク兩家ノ仇ヲ結  
ビ、我家終ニ彼カ爲ニ亡ヒン事遠キニアラス、唯此マ、ニ中直リシテ、前途後  
榮テ此人ト共二期シ玉フニハシクベカラスト、又餘義ナク申サレシカハ、福  
原越前守廣俊秀吉ノ陣ニ行向ヒ、信長ノ死ヲ訪ヒ和睦ノ事、變スヘカラサル

旨、輝元ヲ始トシテ、吉川小早川ノ人々皆起請文ヲ送ラレタリ、秀吉大ニ悦ビ此ヨリミ長クカユル事アラシトテ、是モ起請文ヲ書テアマヒケリ、此上ハ逆徒速ニ誅伐アルヘシトテ、明レハ六月六日秀吉備中ヲ立テ都ニオモムク、輝元ヤカテ秀吉ニ加勢シテ叔父藤四郎元綱ニ、桂民部大輔ヲ附テ人質ニハ出サレケル程ナク明智亡ヒテ、天下終ニ秀吉ニ歸セシ事、隆景ノ思フニ違ハス、カ、リシ後秀吉毛利ガ事オロソカニ思ヒタマハス、自ラ關白ニ任シタマヒシ時、輝元ニ從四位下サセ、次第ニ官位昇進シテ天正十六年四月十日參議ニ任シ、慶長二年三月十日從三位權中納言ニ至リ、一門多ク納言侍從ニ歷昇リヌ云々

兩民ノ親密ナリタル所以コレニテ知ルヘシ、但此說ニハ誤アル由、修史局ニテ調ヘシ古文書ヲ證シテ、重野安繹先生ノ說アリ、サレト此原問題已ニ此ノ如クナレハ姑ク藩翰譜ノ舊說ヲ引テ答案ヲ作レルナリ

歐洲ト交通セシ紀原ヲ問フ

日本人カ歐洲人ト交通ヲ始メタルハ、葡萄牙ヲ以テ嚆矢トス、天文十二年葡人

(二十五)

ピントウ、ホレヒ、セーモトノ三人、支那海ヨリ漂蕩シテ多瀨島ニ漂着ス、島主厚ク待遇シタリ、此時葡人天主教ヲ唱へ、又火器ヲ島主ニ贈ル、翌年葡人再ビ火工ヲ携へ來リ、火藥製造ノ法ヲ島人ニ傳フ、豊後ノ大名大友宗麟此事ヲ聞キ使ヲシテ火工ヲ呼寄セ、火器火藥ノ製造法ヲ研究シタリ、是時恰モ戰國ナリケレハ其火器ハ忽チ諸方ニ於テ使用スル所トナレリ、是ヨリ交通ノ道開ケ、葡人ハ印度支那地方ノ物品ヲ携帶シ、之ヲ歐洲ノ物貨ト稱シテ貿易ヲナシタリ、當時ノ市場ハ豊後薩摩ノ海瀨ナル市府ナリシカ、後遂ニ肥前ノ平戸ヲ以テ通商ノ市場トナシタルナリ、天文十六年ピントウ再ビ日本ニ來ル、此時ハ薩摩鹿兒島灣モ市場トナル、同十八年葡人ノ耶蘇教師ザウヰール平戸ニ渡航シ、宗教ヲ弘ム信者甚タ多ク、洗禮ヲ受クルモノ五百人ニ及ベリ、然レモ當時宗教ノ傳來ハ加特力ノ外渡ラザリシナリ、是ヨリ後十數年ノ間葡人ト日本人ト交通タエス、永祿八年葡人ノ爲メニ肥前ノ長崎港ヲ開キ居留ノ地ヲモ定メタリ、此時ニ當テ西教漸ク蔓延シ、加特力教ニ歸依スル者貴賤トナク其數頗ル多ク、大友有馬大村ノ諸侯モ深ク之ヲ信仰シ、遂ニ使者ヲ羅馬

當時ノ市場ハイツ  
レン

葡人來航ノ目的ハ  
初ハ何邊ニ在リシ  
カ

英吉利和蘭來航ノ  
初ハ

法王ノ許ニ派遣シ、歸依ヲ表スルニ至レリ、是日本人ノ西洋ニ使スル始ニテ、時天正十年也、使人日本ヲ發シテヨリ凡九年、諸國ヲ歴遊シテ歸ル、是時加特力教師、使人ト共ニ至リ、豊臣秀吉ニ謁シ、方物ヲ獻シテ還ル、コレヨリ後宣教師來ルテ屢次、西教漸蔓延セリ、秀吉此カ爲ニ國ヲ害センコトヲ恐レ、遂ニ嚴刑ヲ以テ其侵入ヲ防ケリ、然レモ秀吉薨後、西教又行ハル、是ヨリ先、英吉利和蘭二國、葡人ノ日本ニ通商スルヲ羨ム、慶長五年ニ至リ、二國始テ泉州堺浦ニ來テ貿易ヲ請フ、徳川家康之ヲ許シ、蘭人ヤンヤウス英人アンジンヲ江戸ニ置キ、時々召見シテ歐洲ノ事情ヲ問フ、慶長十六年蘭ノ商船ソノ國産及ヒ歐洲ノ貨物ヲ搭載シテ來ル、是レ同國ノ商船ガ日本ニ來ルノ始メナリトス、慶長十八年八月英國船又長崎ニ來ル家康之ヲ駿河ニ召見ス、英使國書方物ヲ獻シテ通適修交ヲ請ヒ許可ヲ得テ歸リシガ、元和二年ニ同國ノ商船二隻平戸ニ來レリ、是時ニ當テ蘭人專ラ日本通商ノ權ヲ有シケレバ、英人意ノ如クナル能ハズ、一旦ハ英蘭互ニ相仇視シ戰端ヲ開クニ至リシガ、後紛爭熄ミ、英人ハ到底日本ノ商權ヲ有スル能ハザルヲ察シテ、元和七

## (三十五)

年ニ互市ヲ辭シテ本國ヘ立歸リタリ、初メ英蘭ノ一旦渡來スルヤ、他ノ西洋諸國ヨリモ船舶ヲ派遣シ來ルモノ跡ヲ絶タス、孰レモ表ニハ聘問ヲ名トスレドモ、其實ハ交易ト布教ノ爲ノミナリキ

徳川氏ノ初世ニ鎖國ノ主義ヲ執リタル原因如何

徳川氏ノ初世ニ於ニハ、外交頗ル盛ナリシコト前條ノ如シ、然ルニ將軍家光ノ時ニ至リテ、鎖國ノ令ヲ嚴ニセシハ、耶蘇教ノ侵略主義ヲ以テ來リ、漸人心ニ浸染シ、不測ノ變ヲ醸サンコトヲ恐レタル時、恰嶋原ノ亂起リテ益邪教ノ害大ナルコトヲ證明セシヲ以テナリ、尙コレヲ詳説センニ當時西班牙葡萄牙人等ハ侵略ノ企謀ヲ以テ東洋諸邦ニ來リ、宗教ヲ以テ愚民ヲ誘ヒ詐術ヲ狹ミテ之ヲ劫奪スルノ漸ヲ開クカ故ニ、葡人ノ吾邦ニ來ルコト久シクシテ、邦人漸ク其陰謀ヲ知ルニ至レリ、

徳川家康秀忠ノ時ニ至リテ、此感觸ハ益ハゲシク、切支丹宗ヲ嚴禁スルノ令屢下レリ(此時英人蘭人ノミハ、只貿易ノ一途ヲ以テ來リタルカ故ニ、後年マテ長崎ニ限リテ互市ヲ許セリ、然ルニ英人ハ中途ニ止ミ、蘭人ト清國人トノ

鎖國主義ヲ召喚セ  
ルノ原因

鎖國主義ヲ召喚セ  
ルニノ原因

ミニナレリ。時ニ蘭人ヤンヨース英人アンジン等家康ニ説クニ葡人布教望ム所アルヲ以テ、コレヨリ禁令ヲ嚴ニセシナリ、然レトモ尙私ニ之ヲ奉スルモノナリ、寛永十二年船舶製造ノ制ヲ定メ龍骨ヲ禁シ船底ヲ平ニ造ラシメ、海外通航ノ路ヲ塞ク、明年九州ノ民天主教ヲ奉スルモノ、天草四郎時貞ヲ主トシテ天草嶋ニ據リ、嶋原ノ亂民ト近地ヲ焚キ劫シ、勢甚猖獗ナリ年ヲ踰エテ僅ニ平ク、此ヨリソ切支丹宗ヲ惡ムト益甚シク、嚴ク國禁トナシ、遂ニ和蘭支那ノ外、外人ノ來航ヲ禁シ、長ク鎖國ノ主義ヲ保持セリ

德川氏ノ時王室ノ有様如何

慶長十六年家康諸侯ニ命シテ上皇ノ宮ヲ修メシメ、多ク供御ノ田ヲ置キ、亡逸セル御府ノ秘書寶器ヲ搜索シテ之ヲ獻シ、尋テ禁垣ヲ改築ス、十八年又三十七藩ニ命シテ皇居ヲ修理セシメタレハ、禁裏ノ規模大ニ面目ヲ改メヌ、又公卿縉紳ニハ各采邑ヲ供給シ、天皇ニハ御領三万石、上皇ニハ七千石ヲ獻シテ用度ノ料トナス、當時ノ大名ハ大封小封ニ拘ハラヌ軍役賦課ヲ納メシムルヲナレトモ、朝廷ノ御料ハ勿論、公卿ヨリ賦課ヲ納ムルヲ免除セリ、

(四十五)

禁裏ノ御領イカン

公事上奏ノ順序如何

當時モ昔ノ如ク、諸公卿ハ三大臣納言參議辨官諸省ノ卿輔以下ニ任スルヲナレトモ、イツレモ虚官空位ニシテ事務ヲ執ル者ハナク、又執ルヘキ事務モナカリシナリ、(百事江戸ノ幕府ニテ與リシ故ニ)但關東ヨリ上奏スル公事ハ、所司代(幕府ヨリ京都ニ派遣シ置ク役ナリ)ヨリ傳奏ヲ經テ、關白ノ奏上スル所ナリ、凡官位ノ下ハ武家ノ執奏ニ非サレハ之ヲ公事ニ稱スルヲ得ス、此ヲ以テ禁内ノ諸事及武家ニ關スル政事ハ、左ノ三職ノ掌ルトコロノ外公卿ハ一切之ニ關スルヲ得ス、三職ハ、

三職トハ何ソ

關白(五攝家ノ内代ル)之ニ任ス)

傳奏(宸斷ニテ定メ、武家ノ承認ヲ受クルモノナリ)

議奏(コレハ宸斷ニテ任ス)

德川氏ノ王室ニ對セシ政畧ノ一端ヲ舉ケヨ

幕府ヨリ禁裏附二人、新院附二人ヲ置キ、旗下ノ士ヲ擇ミテ之ニ任ス、宮門ヲ衛リ出入ヲ監察シ、宮廷内外ノ動靜ヲ視察シ、乘輿服御ノ、物飲食賜予ノ供給マテ、一切管理セサルヲナシ、故ニ朝廷事アレハ禁裏附新院附コレヲ京都所

幕府ヨリ派遣ノ役  
人ハイカン

(五十五)

司代ニ報レ、所司代コレヲ江戸ニ報ス、故ニ京師ノ事ミナ關東ニ達スルノ組織タリ

幕府ノ内意イカン

原來徳川氏ハ陽ニ王室ヲ尊崇ストイヘ、陰ニハ務テ之ヲ抑制ス、蓋幕府ノ安寧ヲ保タレサルヲ恐レテナリ、此ヲ以テ朝廷明主アレハ、百方道ヲ求メ、勸メテ位ヲ讓ラシメ、傳奏王室ノ爲ニセンヲ謀ルモノアレハ、事ニ托シテ之ヲ罷メ、憚ル所アルヲナシ、後水尾天皇ノ讓位ノ如キ蓋幕府ノ所爲ニ出テタルモノアリトミエテ、御讓位ノ時親ヲ殿壁ニ書セ玉ヘル御製ニ曰ク、  
蘆原やちけらひとゆれ、おのりまゝ、迎も道ある世にあらひこそ、

世の中の上は目くつく横にはふあゝ間の蟹のあさまたしの世や、  
天皇幽憤ノ狀想ヒ奉ルヘシ

又大名ノ參勤交代毎ニ、京都ヲ過クルモ、此ニ止ルヲ得ス、天皇ニ拜謁スルヲ得ス、コレ又大名ノ天朝ヲ奉シテ幕府ヲ謀ルヲ恐ル、ナリ、其之ヲ恐ル、モノハ、抑制ノ極、天朝ノ鬱憤ヲ招クヲ知ルヲ以テナリ、

(六十五)

當時大名ノ制如何

鎌倉ノ幕府ヲ開キ、守護地頭ヲ置キシヨリ以來、封建ノ勢自成リテ其制亦稍定マル、然レモ足利氏ノ末海内分裂互ニ其雄ヲ争フ、必シモ封建ノ定制ニ從フニ非ス、織田氏其舊家名族ヲ討滅シテ、代ルニ世臣降將ヲ以テシ、豐臣氏之ヲ襲キ、其封地ヲ遷轉シ、其郡國ヲ封削スルヲ皆其意ノ如ク、始メテ封建ノ治ヲナスニヤカシ、而シテ其封建ノ體制大ニ定マル者ハ徳川氏ニ在リ、

關原ノ亂平キ、徳川氏ノ舊封駿遠參甲信ノ大名ヲ悉ク關西南海及北陸ノ遠地ニ遷封シ、其地ヲ以テ我親藩舊臣ヲ封建ス、是徳川氏四方ノ形勢ヲ辨シテ、國主城主ヲ配置セシ始ナリ、此時關八州ヲ以テ根本トシ、尾張越前越後ニ其庶子ヲ封シ、東海東山二道及ヒ近畿皆其世臣ヲ封ス、九州四國賀越能奥羽等ニハ外諸侯ヲ封シ、亦間スルニ譜代ノ大名ヲ以テス、

大藩ノ封土ハ、五六十万石、一方ニ孤立雄據ス、世臣ノ封ハ二十万石以下、相輔ルニ其親族子婿ヲ以テス、之ヲ合スレハ則亦六七十万石ニ至ルモノアリ、尾紀越等ノ親大藩ハ外大藩ト相抗ス、世臣宿將ノ封土ハ親藩家門ト相對ス、亦互ニ相牽制スルヲ欲ス、親藩ヲ以テ權臣ヲ抑ヘ、權臣ヲ以テ親藩ヲ制ス、皆

大名配置ノ仕方、如何ナリシヤ

大名ノ階級ハ幾等ナリヤ

三家ノ待遇イカン

外様譜代ノ別ハ如何

(七十五)

綱吉ノ善事イカン

其偏重ヲ杜ク所以ナリ、諸大名中、國主城主無城ノ別アリ、三十万石以上、十万石以上、万石以上ノ差アリ、親藩三家ハ尾張紀伊水戸、三卿ハ田安一橋清水、皆位正從二三位ニ進ム、諸大名與ニ齊シキヲ得ス、外様トハ關原ノ役以後歸降スル者ナリ、譜代トハ參河以來元從ノ世臣、及ヒ徳川氏ニ祿ヲ受ルヲ關原以前ニアル者ヲ云フ、(安政紀事ニヨル) 元祿ノ治ヲ問フ

元祿ハ東山帝ノ時ニシテ、將軍徳川綱吉治世ノ間ナリ、綱吉ハ天和元年ヨリ元祿ヲ經テ寶永五年マテ凡二十八年間將軍職タリ、其間儒學ヲ崇ヒ、學士數十人ヲ近習番トナシ、政事ノ暇ニハ、經書ヲ講セシメテ、之ヲ聞クヲ樂トシ、大成殿ヲ建テ、學館ヲ興シテ、旗下ノ子弟ヲ教育シタルヲ以テ、學政大ニ興ル、然レ亦佛法ヲ信シ、成滿院護持院等ノ巨刹ヲ立テ、經費ヲ抛テリ、僧隆光曾テ曰、公ノ子ナキハ前生殺生ノ報ナリ、宜之ヲ戒ムヘシ、且公ハ成年ヲ以テ生

綱吉ノ弊政ハイカ

嬖事多キ極度イカナル事アリシヤ

(八十五)

宋學ヲ唱ヘシ始ハ何人ツ

ル、宜ク犬ヲ愛スヘシト、於是狗ヲ愛スヘキ令ヲ下シ、獵師漁人ノ外鳥獸魚鼈ヲ取ルヲ得サラシメ、狂犬アリト雖レ之ヲ打ツトキハ罰アリ、殺生ノ禁ヲ犯シテ死ニ至ルモノアリ、狗ヲ傷ケテ殺サル、モノアリ、犬子ヲ生メハ官ニ告ケ、狗路ニ臥セハ行人避ケテ正シク歩セス後又更ニ令シテ狗舎ヲ近郊ニ作テ之ヲ養シハムルヲ數千頭吠聲地ニ震フ、民庶之ヲ患フ其幕府ノ諸司ニ至リテハ嬖幸多ク、柳澤吉保以下男色ヲ以テ寵セラル、モノ數十人、柳營冗官多シ、而レテ賞賜度ナク府庫空乏セリ、六代將軍家宣職ヲ襲クニ及ヒテ、前代ノ弊政ヲ除キ、新井君美ヲ用井テ顧問トシ、儒學ヲ崇ヒ禮義ヲ修メ、禁令ヲ弛ヘケレハ士庶相慶シテ善政ヲ稱セリ、

同時代文學ノ發達イカン

家康關ヶ原ニ大捷シテ霸業始テ成リ、國內既ニ定マルヲ以テ大ニ文學ヲ天下ニ布クノ志アリ、普ク四方ニ令シテ古書ノ隱レタルヲ現ハシ、謄寫刊行セシメ以テ一世ヲ鼓舞ス、藤原惺窩始メテ宋學ヲ唱ヘ、性理ノ學行ハル、其弟子林道春マダ家康ニ仕ヘ、日夜公ニ侍座シテ四子六經ヲ講シ、幕府ノ法令ヲ定

諸侯中學政ヲ勵ミ  
シ人々ハ

昌平黌ノ初ハ

學士ノ高名ナルモ  
ノハ

著書數百部アリ、家光家綱ノ時家康ノ孫水戸侯光國(義公)天性學ヲ好ミ賞  
時戰國ノ餘習ヲ承ケテ君臣名分ノ明ナラザルヲ憂ヘ、倫理風教ヲ正サント  
欲シ、廣ク文學ノ士ヲ聘シ、大日本史以下ノ書ヲ修撰刊定ス、並不朽ノ大典ト  
云フベシ、會津侯松平正之亦學ヲ好ミ政ヲ修メ、最神道ヲ崇敬セリ備前侯池  
田光政(芳烈公)ハ熊澤了介ヲ用ヒテ學ヲ興シ、田ヲ拓キ領内大ニ治マル、將軍  
綱吉立ニ及テ深ク學ニ志シ、常ニ儒官ヲ召シテ經籍ヲ講ゼシム、初メ林道春  
私ニ書院ヲ江戸ノ忍岡(今ノ上野)ニ建ツ、子春齋嗣ギ、五科ヲ分テ子弟ニ授ク  
其子信篤ノ時聖堂ヲ神田ニ移シテ學問所ヲ設ケ、初テ大學頭トナリ、世々學  
政ヲ掌ル、之ヲ昌平黌トイフ、綱吉親シク臨ミテ釋奠ノ禮ヲ行ヒ、祭田ヲ置キ  
生徒ノ食ヲ供ス、是ニ於テ士大夫彬々トシテ學ニ向ヘリ、此ノ如ク幕府諸藩  
共ニ文學ヲ獎勵セシメ以テ、文學ノ士各地ニ輩出シ、或ハ藩主ノ侍講トナリ  
或ハ塾ヲ開キテ諸生ヲ授ク、其最高名ナル者ハ石川丈山、山崎闇齋、安積澹泊、  
中江藤樹、三宅觀瀾、伊藤仁齋、其子東涯、荻生徂徠、太宰春臺、熊澤了介、山縣周  
南、木下順庵等アリ、此外新井白石、室鳩巢、柴栗山、古賀精里、尾藤二洲、佐藤一

國學者ニハ

(九十五)

洋學ノ紀原ヲ問フ

齋ノ輩ハ幕府ノ儒臣トナリ、皆漢學ヲ以テ聞ユ、京都ノ人、北村季吟及ビ荷田  
東滿、其子在滿、加茂眞淵、本居宣長等ハ、國學ヲ以テ著ハル、同時警者塙保已  
一アリ、檢校トナル博學洽聞一時ニ冠タリ、天明中群書類從六百三十五卷ヲ  
輯ム、著書ノ盛ナル古來比フモノ罕ナリ、

西洋學ノ濫觴ハ、寶永年間徳川家宣始メテ其臣新井君美筑後守白石ト號スニ命シ、羅

馬人和蘭人ニ親接シテ、其本土ノ事情ヲ探問セシメシニ原ヅキ尋テ將軍吉

宗ノ時醫官桂川甫筑儒官青木文藏昆陽ト號ス並ニ長崎人西川如見等蘭人ニ從テ、

其言語或ハ醫術曆算等ヲ學習シ、既ニシテ前野良澤杉田玄白等ノ諸子起リ

之ニ從事セシヨリ、右等ノ諸學術漸次世ニ行ハル、ニ至レリ、後邊境漸ク多

事ナルニ隨ヒ、彼ノ國情ヲ知り、長技ヲ取ルノ急務タルヲ曉リ、文化八年始メ

テ翻譯局ヲ淺草天文臺中ニ置キ、蘭學者數名ヲ舉ケテ和蘭ノ文書ヲ翻譯セ

シム、之ヲ蕃書和解方ト稱ス、安政二年翻譯局ヲ九段坂下ニ移シ筒井政憲

肥前左衛門尉川路聖謨右近將監後大久保忠寬一翁ト稱スヲシテ其事務ヲ總理セシメ尋テ、古賀

洋學校ノ始

謹一郎茶溪ト號スヲ頭取ニ任ス、後蕃書調所トシ、翻譯ノ外蘭書ヲ講授スルノ處ト定メ、乃チ箕作阮甫杉田成郷ヲ舉ケテ教授職ニ任ス、此ヨリ後洋學ヲ究ムルモノ漸多シ、

尊王論及海防說ヲ唱ヘシ重ナル人物ヲ舉ケヨ

(十六)

源光國ハイカナル  
ヲチナシ、ヤ  
光國義公ト諡ス  
水戸藩ノ二世  
高山正之ハ如何

蒲生君平ハイカン

德川ノ初世水戸侯光國、世人ノ幕府アリテ天朝ノ尊ムヘキヲ知ラス、大義名分ノ漸ク明ナラサルヲ憂ヒ、大日本史ヲ修撰シテ以テ尊王ノ意ヲ寓セリ、此時マテハ人ミナ北朝ヲ以テ正トシ、南朝ヲ閏位トセシニ、卓見ヲ以テ南朝ヲ正統ニ掲ケ、楠木新田諸氏ノ偉烈ヲ賞揚セシカ如キ當時ニ於テ絶大ノ事業ナリトス、下テ寛政年間上野ノ處士高山彦九郎ト云フモノアリ、武臣政權ヲ擅ニシ、王室ノ萎靡振ハザルヲ憤リ、海内ヲ跋渉シテ、志士ヲ鼓舞ス、京都ニ入ル毎ニ地ニ跪キテ遙ニ皇居ヲ拜シテ曰ク、艸莽ノ臣正之ト(彦九郎名ヲ正之ト稱ス)道路ノ人見テ嘸フモノアリ、正之意トセズ、嘗テ足利尊氏ノ墓ヲ鞭ツ辭氣激昂人ヲ感動ス、後筑後ニ遊ビテ遂ニ自殺ス、人其故ヲ知ルモノナシ、又下野ノ人蒲生君平ト云フ者アリ、慷慨ニシテ奇節アリ、朝威ノ地ニ墜ツルヲ

林子平ハイカン

嘆シ今書山陵志等ノ書ヲ著ハシテ尊王ノ大義ヲ唱フ、當時聞ク者皆耳ヲ掩フ、其後儒者頼襄青山延于等モ亦國史ヲ著ハシテ尊王ノ大義ヲ倡フ、是ヨリ朝野王室ト武家ノ名分ヲ論スル者多シ、之ト同時ニ仙臺ニ林子平ト云フ者アリ、倜儻ニシテ大志アリ四方ニ周遊シテ長崎ニ至リ、海外諸國ノ事情ヲ聞キ、其來寇ニ備フベキヲ論ジ、三國通覽海國兵談等ヲ著ハシ海防攻守ノ策ヲ倡フ、時ニ世人永ク太平ニ慣レテ、又兵事ノ要ヲ知ラズ、將軍家齊其海外ノ事ヲ論スルヲ以テ書ヲ燬キ子平ヲ禁錮ス、後果シテ魯人ノ邊海ヲ窺フニ及ンテ人皆其先見ノ明ナルニ服スト云フ

德川氏ノ時代田租ノ法如何

(一十六)

田畑ノ等級ハ幾何アリヤ

上方、關東トノ差如何

大抵田畝ノ等級ヲ分テ、上、中、下、下々ノ四等トナス、但土地ノ場所ニ依テ品位同シカラザルヲ以テ、田畠共ニ良悪ニ隨ヒ種々ノ稱ヲ立テ、相差等シテ以テ石盛ヲナス、大抵上方ニハ田多ク畑少ク平均田ハ畑ノ三分ノ二ニ居ル關東ハ水災屢アリテ田少ク畠多クケレトモ、一豆甲奥羽ヲ加ヘテ大抵田畠相均キナリ、



年貢割符トハ何ソ

掛札トハ何ソ

田租畑税ト納期ニ  
差アリヤ否

田租畑税共ニ金納  
ナリヤ否

小物成トハ何ソ

關東ニテ年貢ヲ收納スヘキ目錄ヲ年毎ニ百姓ニ下ス、此ヲ年貢割付ト云ヒ  
或ハ免狀、又下ケ札トイフ、田畝ノ品第收獲ノ良否ヲ檢シ差ヲナシテ收獲ノ  
幾分ヲ徵シ其他ヲ作徳タラシムルヲイフ也、延享二年ニ至テ更ニ掛札ノ制  
アリ、掛札ハ其年ノ高及釐取段取ヲ代官村人ト立會テ定メシ處ヲ札ニ明書  
シテ、其村ノ揭示場若ハ名主莊屋ノ邸前ニ掲ケ、以テ徵租ノ公平ナルヲ表章  
セシムルモノナリ  
徵租ノ法諸國一ナラス、關東ニハ夏成アリテ畝税ヲ夏季ニ收メシム、(但西海  
諸國之ヲ夏石ト云ヒシヲ元祿中止ム)銀納麥納定例ナシ、蓋漢土夏稅秋糧ノ  
法ニ基クトイフ、其他諸國ニ至テハ率秋季ニ田租ト共ニ之ヲ收メシム、其率  
法大抵上方ハ田畝ノ貢租ハ米石ヲ以テ之ヲ立テ、總取米ノ三分一ヲ以テ石  
代トシ銀納セシム、關東ハ之ヲ永納ト云フ、永ハ即錢ナリ、大異同ナシ但關東  
ハ田租ハ米ヲ取り畑税ハ永ニテ取ルナリ、蓋北條氏ノ遺法ニ出ツト云フ、  
田畝ノ租税ノ外、又小物成、浮役等アリ、蓋田畝ノ租、中世稱シテ年貢又乃貢ト  
イフ後又物成トイフ、之ニ對シテ小物成トイフ、即野錢、山錢、林永、漁獵役、池

全國ヲ概シテ税率  
大凡何程ナルヤ

(二十六)

徳川氏ノ刑法ハ何  
時ニ至リテ定マリ  
シヤ

正刑ハイカン

沿河海役等ノ類ナリ、蓋古庸調ノ遺ナリ、之ヲ要スルニ租法諸國ノ同シカラ  
サルモノアリテ、或ハ四公六民、五公五民タリ、或ハ六公四民、七公三民タリ、  
多少厚薄頗相懸絶ストイヘヒ、能其物産ノ多少年貢ノ高低等相比較精覈ス  
ルキハ大抵三公七民ノ率法ニ歸スルトイフ、  
同時代ニ於ケル刑法ハイカン  
應仁以後群雄割據セシカハ、家々政ヲ異ニシ、國々刑ヲ殊ニシ、法制統一セス  
徳川氏撥亂ノ初、專ラ意ヲ治道ニ留メ、元和元年公家法度、武家法度ヲ撰定ス  
トイヘモ、コレハ法令ニシテ刑ニハアラス、寛永中始テ評定所ヲ設ケ、奉行  
ヲ置キ訟獄ノ事ヲ掌ラシム、將軍吉宗(寶永以後)儒臣ヲ延テ古律ヲ詳明シ、  
明律ヲ參酌シテ時宜ニ適セシム、元文ニ至リテ大成ス、刑名ノ大略左ノ如  
シ

敲 (輕ハ五十、重ハ一百スベテ二等アリ)

追放(六等アリ)

○正刑

遠嶋、伊豆七嶋、薩摩五嶋、肥前天草、隱岐、壹岐

(死罪)斬、火、獄門、磔、鋸挽)

○屬 四ツ

晒 入墨 闕所 非人手下

○士族ニハ閏刑アリ

逼塞 閉門 蟄居 改易 切腹

○庶人ノ閏刑ハ

呵責 過料 戸メ 手錠

○僧徒ノ閏刑ハ

晒 追院 搆

○婦女ノ閏刑ハ

剃髮 奴

無籍人ノ犯徒決放ノ後、再犯ノ嫌疑アルモノハ、佐渡、佃嶋ノ兩處ニ配シテ徒

役ニ服セシム、

王政復古トハ何ソ

三十六)

三職トハ何ソ

慶應二年十二月徳川慶喜大政ヲ返上シケレハ、朝廷乃攝政關白及ヒ征夷大將軍所司代等ノ職ヲ廢シ、新ニ總裁議定參與ノ三職ヲ置ク、蓋中世以降千餘年、攝政關白人臣ノ極職ニシテ、清和帝以後ハ藤原氏世々之ヲ襲キ、五攝家世襲ノ職ト爲リ、施政ノ實權、殆ト攝關ノ掌裏ニ在リ、文治二年源賴朝六十六國ノ總追捕使ト爲リ、霸府ヲ鎌倉ニ開キシ以來、政權又武門ニ移リシカハ、攝政關白モ亦虛名ニ齊シカリキ、此ニ至リカ、ル積弊ヲ改革シテ、武門握柄ノ沿習ヲ除クノミナラス、攝關ノ舊制ヲモ一掃シ、主權ノ名ト實ト俱ニ天皇ニ歸シ、清和帝以前親政ノ制ニ復スルニ至レリ、世之ヲ號シテ王政復古ト曰フ、初メ慶喜ノ政權ヲ奉還スルヤ、事不意ニ出テタルヲ以テ、朝廷ノ人モ王政ノ規模未タ定マラス、廷議紛々タリ、或ハ上書シテ建武中興ノ故事ニ據ラント欲スルモノアリ、時ニ岩倉具視ノ客ニ玉松操ト云フモノアリ、具視ニ就テ議ヲ建テ、曰ク、建武ノ中興ハ姑息ノミ、空名ノミ、何ソ摸範トスルニ足ラシヤ、今日ノ事須ラク神武ノ創業ニ本キ、我ヨリ古ヲ爲スヘシト、聽者爲ニ竦然タリ、十二月十四日ノ布告ニ、神武創業ノ始ニ原ツクノ文アルハ是カ爲ナ

玉松操ノ建議ハ如何

神武ノ創業ニ基クトハ何ソ

(四十六)

リトゾ

伏見ノ戦ノ本末ヲ問フ

明治元年戊辰正月、會津桑名等ノ諸藩士大坂城ニ聚リ、慶喜ニ説クニ薩長ノ士天子ヲ擁シテ已チ謀ル、宜ク兵ヲ以テ京師ニ入り、君側ヲ清メラルヘシト、慶喜遂ニ會桑二藩ノ兵ヲ前驅トシ、高松、濱田等、譜第諸藩ノ兵ヲ應援トシテ北上ス、兵三万ト號シ、伏見鳥羽兩道ヨリ進ム、事京師ニ聞コ、京師震恐ス、乃チ薩長二藩ノ兵ヲ遣リ、兩道ヲ戍ラシム、既ニシテ徳川氏ノ兵至ル、戍兵礮ヲ發シテ之ヲ拒ク、遂ニ戦ヲ開ク、此ヲ伏見鳥羽ノ戦トス、朝廷乃議定嘉彰親王ヲ以テ征討大將軍トシ、錦旗節刀ヲ賜テ往テ征セシム、連戦四日幕軍遂ニ崩潰シテ大坂ニ走ル、是時ニ當テ諸藩ノ兵多ク京師ヲ護リ、彦根大垣等徳川ノ譜第數藩亦官軍ニ屬シテ薩長二藩ノ兵ハ其戰主タリ、此ヲ以テ死傷尤多シ、慶喜錦旗ノ出ツルヲ聞キ、自ラ大事ヲ誤ルヲ知り、倉皇奏狀ヲ遣シテ海路江戸ニ歸ル、官軍既ニ大捷ヲ得、隨テ近畿ヲ定メントシ、佐幕諸藩ノ嚮背ヲ問フ、諸藩皆歸服ス、是ヨリ先キ長崎奉行日田代官等ノ幕府ノ吏胥、幕軍ノ敗亡ヲ聞キ、皆守ヲ棄テ、江戸ニ奔ル、大坂以西ニ幕軍ナシ、是ニ於テ慶喜以下二十七人ノ官爵ヲ削リ、遂ニ東征ノ師ヲ起セリ、

(五十六)

奥羽連合ノ始末如何

徳川慶喜ノ大政ヲ奉還スルヤ、幕府譜第ノ諸藩之ニ不平ナリ、慶喜ニ勸メ兵ヲ帥井テ京都ニ入り、薩長ノ專恣ヲ誅メントス、而シテ其兵伏見鳥羽ニ敗レ、官軍遂ニ東上シテ、慶喜恭順敢テ抗セス、是ヲ以テ意愈憤懣ナリ、奥羽ノ諸藩乃連合結託シテ、王師ニ抗センヲ謀ル、而シテ會津藩其首魁タリ、是ヲ以テ白川越後等諸道ノ官軍齊シク敵ヲ蹙メテ、若松城下ニ集ル、九月ニ至リ會津城主松平容保城ヲ致シテ降ヲ乞フ、仙臺南部莊内等ノ諸藩モ亦降り、東北ノ平定スルヲ以テ、十月今上天皇東京ニ臨幸シ、是ヨリ先江戸ヲ以テ東京トシ江戸城ヲ皇居トス、群臣ニ命シテ諸藩ノ處置ヲ議センム、會津仙臺米澤以下二十二藩主皆死一等ヲ減シ、各藩ニ幽ス、仙臺米澤以下ノ封ヲ削リ、同姓ヲ以テ封ヲ襲カシム、

(六十六)

五條ノ誓詔トハ何々ソ

歸降ノ結果如何

南殿ハ紫宸殿ノ一ナリ

王政復古ノ制令一タヒ出テタル後、伏見ノ戰奥羽ノ戰等アリツレトモ、朝廷ハ銳意治ヲ圖リ、維新ノ功積ヲ舉ンコトヲ務メラル、此ニ於テ明治元年二月十日、天皇南殿ニ御シ、公卿諸侯ヲ率井テ、天神地祇ヲ祭り、五事ヲ誓約セリ、其條款ニ曰ク、廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決スヘシ、曰ク上下心ヲ一ニシ、盛ニ經綸ヲ行フヘシ、曰ク官武一途、庶民ニ至ルマテ、各其志ヲ遂ケ、人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス、曰ク舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クヘシ、曰ク知識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スヘシ、因テ詔ス、我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシテ、朕躬ヲ以テ衆ニ先タテ、天地神明ニ誓ヒ、大ニ斯國是ヲ定メ、萬民保全ノ道ヲ立ントス、衆亦此旨趣ニ基ツキ、協心努力セヨト、

(七十六)

公議所ノ初、及其起リシ所以ヲ問フ、

明治二年三月公議所ヲ設ク、我邦議會ノ初ナリ、當時封建ノ勢ヲ承ケ、列藩互ニ主張スル所アリテ、藩論相同シカラス、朝廷之ヲ折衷シ以テ制度律令ヲ定メント欲ス、仍テ先ツ徵士貢士ノ制ヲ設ケ、貢士ハ每藩ヨリ貢出セシメテ、朝廷ノ下問ニ對ヘ、制度律令其他重要ノ處分ヲ討議セシム、後貢士ヲ公議人又

貢士ハイカナル資格ノ者ツ

公議人ハ如何ナルヲ討議セシヤ

議員ト改メ、對策所ニ於テ集議セシム、其策問ハ、耶蘇教徒ノ處分、徳川慶喜謝罪後ノ處置、陸海軍制財政ノ方法、列藩ノ訟訴、奥羽鎮定後降付人ノ處置等ヲ以テシ定期又ハ臨時ニ開ク、然レモ當時各藩ノ議員、盡ク其人ヲ得ルニ難ク、空論亦尠カラサリシトイフ、後議事取調掛ヲ置キ、山内豐信ヲ以テ總裁トシ、議事ノ體裁ヲ正サシム、明年ノ春車駕東京ニ駐蹕ス、是ニ於テ大ニ會議ヲ興サントス、仍テ詔シテ曰ク、朕將ニ公卿群牧ヲ會シ、博ク衆議ヲ諮詢シ、國家治安ノ大基ヲ建テントス、抑制度律令ハ政治ノ本、億兆ノ頼ル所、以テ輕ク定ム可カラズ、今ヤ公議所法則略既ニ定ルト奏ス、宜ク速ニ開局スヘシ、局中禮法ヲ貴ヒ、協和ヲ旨トシ、心ヲ公平ニ存シ、議事明確ヲ期シ、專ラ皇祖ノ遺典ニ基キ、人情時勢ノ宜ニ適シ、前後緩急ノ分ヲ審ニシ、順次ニ細議シ以聞セヨ、朕親シク之ヲ裁決セン、

(八十六)

地租改正ノ大要ヲ舉ケヨ

舊來租法ノ沿革セシコト一ニ止マラス、已ニ前條答案ニイフ所ノ如シ、徳川氏ノ時ニ至リテモ、税目甚多ク、各地或ハ其法ヲ異ニセリ、此ニ於テ、明治六年

改正ハ何等ノ必用ヨリ來ルソ

土地ノ種屬幾種アリシヤ

正租ノ率法幾度ヲ變セシシ

(九十六)

新律綱領布ノ原由如何

我邦ノ法律古昔ノ「ハ、已ニ前條答案ニ述ヘタリ、維新ノ初ニ於テハ刑法官ヲ置キシカト、百度草創ノ時ナレハ姑ク徳川氏ノ制法ト諸藩ノ慣例ニ據リ斟酌シテ假ニ條例ヲ定ム、之ヲ假律ト云フ、明治二年七月刑法官ヲ刑部省ト改メ、諸藩士ノ法律ニ習ヘル者ヲ採用シテ古代ノ律令及ヒ明清律ヲ案シ、折

假律

新律綱領ニ何ニ基キテ立テルヤ

(十七)

大陽曆頒行ノ年月ヲ問フ

明治五年十一月九日、詔シテ大陰曆ヲ輟テ大陽曆ヲ用フ、是年十二月二日ヲ以テ六年一月一日ト爲シ、一晝夜ヲ二十四時ト爲シ、神武天皇奠都ノ年ヲ以テ紀元ト爲シ、其日ヲ紀元節ト爲シ、天長節ト共ニ祝日ト爲ス、實ニ紀元第二千五百三十二年ナリ、

征韓論ノ起リシ原因イカン

維新ノ業緒ニ就テ、カヲ外交ニ致サントスルヤ、數朝使ヲ韓國ニ遣ル、韓國接遇禮ナシ、台灣嶋蕃管テ琉球國人ノ其嶋ニ抵ル者ヲ虐殺シ、又小田縣ノ漂民ヲ剽劫ス、露西亞ノ境界我樺太地方ニ接シ、數違言アリ、俱ニ朝野ノ憂ル所タリ、就中征韓ノ論最切迫ナリ、當時在朝ノ重臣此論ヲ主張スル者、西郷隆盛ヲ尤トス、隆盛豪邁理論ヲ喜ハス、毎ニ慨然トシテ兵ヲ提ケ武ヲ海外ニ輝スノ

征韓論ノ主唱者ハ誰ソ

外征ト内治トイッ  
レテ先ニセシ

(二十七)

志アリ、以謂ラク力能ク東亞細亞ヲ威服シ、而シテ後ニ始メテ歐米ト並立ス  
ヘシ、區々内治ノ改良ヲ口實トシ遠畧ヲ忽ニスルハ國威ヲ張ルノ本意ニ非  
スト、其徒桐野利秋篠原國幹等ト、竊ニ相畫策セリ、

征韓論ノ結局ヲ語レ

西郷隆盛等征韓論ヲ唱ヘテ勢力アリ而シテ事未決セス時ニ右大臣岩倉具視  
等、使ヲ奉シテ歐洲ヲ巡視ス、會朝鮮又我使ヲ禮セス、是ニ於テ隆盛征韓ノ  
議愈熾ナリ、謂ラク韓廷ノ無禮固ニ惡ムヘシトイヘ、師ヲ出シテ之ヲ征ス  
ルニハ及ハス、宜ク先ツ使ヲ遣リ諭スニ理勢ヲ以テシ、彼ヲシテ過ヲ謝セシ  
ムヘシ、彼若頑梗ニシテ從ハスンハ必我使節ヲ辱メン是ニ至ラハ我彼ヲ征  
スルノ名アリト、因テ自ラ使節トナランコトヲ請ヒ、桐野利秋モ亦之ニ副セ  
ント請フ、太政大臣三條實美ニ就テ策ヲ進ム、時ニ隆盛陸軍大將近衛都督兼  
參議タリ、利秋陸軍中將タリ、共ニ重要ノ地ニ在リ、名望太々重シ、實美事極メ  
テ大ナルヲ以テ、苦諭シテ二人ヲ止メントス、二人論スルコト極メテ厲シ、實  
美其意決スルヲ見テ姑ク之ヲ諾シ、將ニ宸裁ヲ仰カントス、タマハ具視等

征韓ノ師何ヲ以テ  
名トナサントセシ  
ヤ

大政大臣ノ處置ハ  
イカ、ナリシソ

木戸大久保ノ意見  
ハイカン

征韓論ヲ排斥セシ  
ハ誰ノカソ

(三十七)

佐賀ノ亂ノ顛末ヲ問フ

征韓ノ論ノ行ハレサリシ後前參議後藤板垣等民選議院ノ建白ヲ爲シ、ガ亦

歸朝シ、此議ヲ聞キ甚々以テ不可トス、蓋シ木戸孝允大久保利通亦嘗テ外征  
ノ政略ヲ執ルモノナリ、然レトモ具視ト海外ヲ歷遊シ、歐米ノ形勢ヲ目撃セ  
シヨリ大ニ悟ル所アリ、以謂ラク今日ニ當リテハ先内治ヲ務メテ休養ヲ專  
ニスヘシト、利通具視等仍テ征韓ノ非ヲ唱フ、孝允ハ劇疾アリテ此議ニ參セ  
ス、是ヨリシテ征韓是非ノ論朝野ニ喧シ、後藤副島板垣江藤四參議モ亦征韓  
ヲ是ト爲ルモノナリ、西郷隆盛桐野利秋等韓事ノ裁決ヲ促シテ大政大臣ニ  
迫ル、大臣會、劇疾ヲ得テ事ヲ視ル能ハス、右大臣具視ニ勅シテ大政大臣ノ事  
ヲ代理セシム、隆盛利秋亦具視ニ詣ル、具視執テ不可ト爲シ卒ニ動かス、是ニ  
於テ隆盛利秋事ノ終ニ成ル可ラサルヲ知リ職ヲ辭ス、鹿兒嶋出身ノ將士、征  
韓ノ論ニ左袒スルモノ數十人、相率テ官ヲ去ル、後藤副嶋板垣江藤四參議  
亦病ヲ告ケテ職ヲ解ク、隆盛官ヲ辭スルノ翌日、其黨數十人ト直ニ東京ヲ發  
シ、鹿兒嶋ニ歸ル、一時人心洶々タリ、

佐賀亂ノ原因イカ

佐賀亂ノ結果イカ

(四十七)

神風連ハイッコニ  
起リシツ

何故ニ神風連トイ  
フヤ

行ハレヌ、兩議ヲ主トスルモノ快々樂マス、初佐賀ノ俗議論ヲ喜ヒ、各黨ヲ樹  
テ憂國征韓等ノ黨アリ、江藤新平ソノ議ノ納レラレサルヲ憤リ、嶋義勇等ト  
佐賀ニ歸リ、一二黨ニ依テ乱ヲ爲ス、朝廷新平等カ官爵ヲ褫ヒ、大久保利通ヲ遣  
シテ之ヲ討ツ、賊兵窘窮シ、鹿兒嶋ニ奔テ西郷隆盛ニ投ス、隆盛納レヌ、土佐ニ  
奔ル亦納レヌ、遂ニ捕縛セラレ、而シテ佐賀ノ殘黨亦降ル、仍テ新平義雄等ノ  
巨魁十一人ヲ斬ニ處シ、其黨百二十六人ヲ西京大坂及ヒ滋賀廣嶋等ノ七縣  
ニ配シテ、懲役ニ服セシム、輕重差アリ、此役ヤ軍費二百餘万圓ヲ費シ、兵卒死  
スルモノ百八十人、而シテ賊ノ死者亦百五十人ニ下ラスト云フ、

神風連ノ亂トハ何ソ

明治八年十月熊本縣ノ神風連亂ヲ作ス、初熊本ノ人太田黑伴雄、加屋霽堅、富  
水萬喜等舊制ヲ喜ヒ新政ヲ喜ハス、其徒百七十餘人ト鎮臺兵營ヲ襲ヒ、縣廳  
ヲ侵シ、司令長官種田政明縣令安岡良亮ヲ殺シ、士官兵卒縣官二百餘人ヲ殺  
傷シ、兵營數棟ヲ火ス、鎮臺ノ兵擊テ之ヲ平ク、亂徒或ハ自殺シ、或ハ捕ニ就  
ク、其平素神道ヲ尊フヲ以テ世之ヲ神風連又敬神黨ノ亂ト云フ、

(五十七)

金額ハイカン

起業公債ノ償還期  
限ハイカン

(六十七)

紙幣ノ下落ハ何程  
ナリヤ

官祿稅トハ何ソ

起業公債トハ如何

明治十一年四月、一千二百萬圓ノ内國債ヲ興シ、以テ築港開墾等公益ノ事業  
ヲ起サントシ、證書ヲ發行シ、抽籤法ヲ用ヒ、二十三年ヲ期シテ償還セシム、仍  
テ公債證書發行條例ヲ頒ツ、之ヲ起業公債ト稱ス、

維新後財政ノ一斑ヲ聞カン

維新以來十三年百事經營、此ヲ以テ財政頗困難ナリ、仍テ頻ニ紙幣ヲ發行セ  
シカ、此年ニ至テ紙幣ノ低落最甚シク、紙幣一圓七拾餘錢ヲ以テ、正貨一圓ニ  
當タルニ至リ、物價昂貴上下之ヲ憂フ、此年一月官祿稅ヲ廢ス(七年以來一時  
急ヲ救フカ爲ニ課セシモノ)一月大藏省明治元年ヨリ八年ニ至ルマテノ國  
計出入決算表ヲ公布シ、尋テ鹿兒嶋征討費ノ決算表ヲ公布シ、以テ朝廷ノ財  
政幾分ノ餘裕アルコトヲ示セリ、然トモ其餘裕ハ以テ從來巨額ノ國債(西南  
役増發ノ紙幣及ヒ公債證書發行)ヲ處分シテ、紙幣ノ價格ヲ挽回スルニ足ラ  
ス、因テ十一月令シテ諸官省ノ歲費定額ヲ折減シ、十四年度ヨリ後之ヲ實施  
セシメ、又曩ニ定メタル地方稅正租五分ノ一以內ナルモノヲ改メテ二分一

地租ヲ減シテ何テ  
増シタルヤ

(七十七)

トシ、地方税費目中ニ、府縣廳舎修繕費、監獄建築費、警察費ノ三項ヲ増加シ、從來國庫ヨリ之ヲ給付セシモノヲ停メテ、纔ニ其一分ヲ支出スルニ至レリ、九月又酒税規則ヲ改正シテ税額ヲ増加セリ、此等ノ設施ヲ以テ歲出入ヲ増減シ、年々剩餘スル所ヲ以テ紙幣ヲ處分シ、斯困難ヲ救フノ策ヲ施セリ、朝鮮暴徒ガ公使館ヲ襲ヒシ顛末ヲ述ヘヨ

朝鮮國王ハイカナル思想ナリシヤ

大院君トハ誰ソ

兵卒ノ亂ハ誰ノ煽動ニ由ルヤ

我公使ハイカニナレシヤ

明治十五年七月 朝鮮ノ兵卒等亂ヲ作シ、我公使館ヲ襲フアリ、初朝鮮王尙幼ナリ生父李是應政ヲ攝シ、大院君ト稱ス王、政ヲ爲スニ及ヒ、我邦ト好ヲ修メテ、國制ヲ更張セントシ、陸軍中尉堀本禮造ヲ聘シ、新式ヲ以テ兵士ヲ操練ス又金玉均徐光範ヲシテ我文物制度ヲ觀察セシム、大院君モト王舅閔氏ト善カラス、且意ニ改新ヲ喜ハス、會兵卒欠糧ノ事ニヨリテ政府ヲ怨望スルアリ、大院君因テ陰ニ煽動ス兵卒乃夜ニ乘シ王宮ニ闖入シ、王及世子ニ逼リ王妃ヲ殺サントス、堀本等數人又暴徒ニ殺サル、暴徒遂ニ我公使館ヲ襲ヒ、火ヲ放テ呼譟ス、駐劄ノ辨理公使花房義質其衆二十八人圍ヲ衝テ王宮ニ赴キシカ入ルヲ能ハス乃仁川府ニ至ル 明日府兵又襲撃ス 巡查之ニ死スルモノ

終局ハイカン

大院君ハイカトナリシゾ

(八十七)

當時華族ノ大數幾何戸ナリシヤ

授爵ノ勅語ヲ記シ得ルヤ

アリ 義質等奮鬪濟物浦ニ抵リ英船ニ投シテ長崎ニ達ス 事政府ニ聞ユ、乃急ニ軍艦數隻ヲ發シテ、我在留人民ヲ保護セシメ、外務卿井上馨ヲ赤馬關ニ遣ハシテ、命ヲ傳ヘ、陸軍少將高嶋柄之助海軍少將仁禮景範ヲシテ兵ヲ率井テ義質ヲ護シ、朝鮮ニ赴カシム 義質國王ニ謁シテ書ヲ呈シ、數事ヲ要求シ、三日ヲ期シテ答ヘシム、朝鮮遷延シテ報セス、義質怒リテ去ラントス、朝鮮恐惶之ヲ留ム、因テ其全權大臣李裕元等ト規約六條修好續約二條ヲ議定セリ、清國朝鮮ノ變ヲキキ、兵ヲ遣ハシテ大院君ヲ劫シテ其國ニ拘致シ安置セシム、十月朝鮮特派全權公使朴永孝、副使金勉植等ヲシテ來ラシメ 國書方物ヲ獻シテ、其暴舉ヲ謝セシメ 事遂ニ平ク

五等爵トハ何ソ

五等爵トハ、公、侯、伯、子、男ナリ、コレ明治十七年七月、叙爵ノ勅語ト華族令トナ下シ、新舊ノ華族凡五百五十餘人ニ授ケ玉ヒシトコロナリ 其勅語ニ曰ク、朕惟フニ華族勳胄ハ國ノ瞻望ナリ、宜シク授クルニ榮爵ヲ以テシ、用テ寵光ヲ示スヘシ、文武諸臣中興ノ偉業ヲ翼賛シ、國ニ大勞アル者、宜シク均シク優



華族ハ何ヨリ成リ  
シヤ

列ニ陞シ用テ殊典ヲ昭ニスヘシ、茲ニ五爵ヲ叙テ、其有禮ヲ秩ス、卿等益々爾ノ忠貞ヲ篤クシ爾ノ子孫ヲシテ世々其美ヲ濟サシメヨ  
蓋華族ニハ、舊來ノ大名アリ公家アリ、神官僧家ノ闊闊ナルモノアリ、又建武功臣ノ裔ト、明治ノ功臣トノ新ニ列セシモノアリテ種々ナリ、シカレモ國家ノ勳胄、王室ノ藩屏タル一ハ一樣ナルカ故ニ、舊來ノ如キ公家大名ナト、分ツヘキニモアラス、サレハトテ公家モ悉ク家格ヲ同クセス、大名モ亦然ナリ  
斯同シ華族ノ内ニテモ差等アルカ故ニ、此爵ヲ設ケテ以テ其家格ヲ叙テシナリ

(九十七)

官制ノ改革ハイカ  
ナル必用ヨリ起リ  
シヤ

明治十八年ノ官制改革ハ如何  
十八年十二月詔シテ官制ヲ改ム、其略ニ曰ク、經國ノ要ハ、官其制ヲ定メ、機關各其所ヲ得ルニ在リ、内閣ハ萬機ヲ親裁シ、專統一ヲ要スヘシ、仍テ今其組織ヲ改メ、諸大臣ヲ各其重責ニ當ラシメ、統フルニ内閣總理大臣ヲ以テシテ、從來各省ノ太政官ニ屬スルノ制ヲ罷メ、官守ヲ明ニシ、濫弊ヲ除キ、選叙ヲ精クシテ材能ヲ擧ケ、繁文ヲ省キ冗費ヲ節シ、規律ヲ嚴ニシテ施政ノ整理ヲ圖

新置ノ省局ヲアケ  
ヨ  
廢止ノ省局ハ何々  
ソ  
改革ノ結果ハイカ  
ソ

(十八)

ラン一是朕ノ諸大臣ニ望ム所中興ノ政ハ一進一退スヘカラス云々ト、因テ太政大臣、左大臣、右大臣、參議、各省卿等ノ職制ヲ廢シ、更ニ内閣總理大臣及各部ノ大臣ヲ置キ、内大臣及ヒ顧問官ヲ宮中ニ置キ、工部省ヲ廢シテ遞信省ヲ置キ、參事院及制度取調局ヲ廢シ、法制局其他ノ數局ヲ内閣ニ新置セリ、乃新任總理大臣伊藤博文、詔旨ヲ奉體シテ、處務ノ綱領ヲ擧ケ、分テテ四款トナシ、諸大臣ニ告ク、蓋維新以後官制ノ更改數次而シテ此時ノ改革尤大ナリ、凡改マル毎ニ着々進歩シテ、明治ノ治體イヨク、休明ニ、文物典章粲然トシテ益彰ルトイフ、

上古ヨリ近時ニ至ルマテ政權ノ移轉セル順序ヲ畧述セヨ  
此問題ヲ解釋センニハ、前數十條ニ於テ事蹟ノ要領ハ略ホ之ヲ述ヘタレハ、今又此ニ再演スルヲ須ヒス、只天皇ノ歷代ヲ掲ケテ何時代ニ於テハ如何ナル所ニ、政權移リ居シカヲ示サン、天皇ノ歷代ヲ一々掲ケシハ、前數十條ヲ讀ムキノ參考ニモナルヘケレハトテ、其煩ヲ避ケス  
神武 綏靖 安寧 懿德 孝昭 孝安 孝靈 孝元 開化 崇神 垂仁

景行 成務 仲哀 應神 仁德 履仲 反正 允恭 安康 雄略 清寧  
顯宗 仁賢 武烈 繼體 安閑 宣化

一變

右二十八代一千九百九十九年許ハ、天皇親政ノ時代ナリ  
欽明 敏達 用明 崇峻 推古 舒明 皇極

二變

右七代百十年許ノ間ハ、政事外戚ナル蘇我氏ヨリ出ツ  
孝德 齊明 天智 弘文 天武 持統 文武 元明 元正 聖武 孝謙  
淳仁 稱德 光仁 桓武 平城 嵯峨 淳和 仁明 文德  
右二十代二百十三年ノ間ハ、政權皇室ニ在リ

三變

清和 陽成 光孝 宇多 醍醐 朱雀 村上 冷泉 圓融 花山 一條  
三條 後一條 後朱雀 後冷泉

四變

右十五代二百十年間ハ、政事外戚タル藤原氏ヨリ出ツ  
後三條 白河  
右二代十八年間ハ親政  
堀河 鳥羽 崇德 近衛 後白河 一條 六條 高倉 安德

五變

右九代九十九年間ハ、政權院中ニ歸セリ

六變

後鳥羽 土御門 順德 仲恭 後堀河 四條 後嵯峨 後深草 龜山  
後宇多 伏見 後伏見 後二條 花園

七變

右十四代百三十三年間ハ、政鎌倉ヨリ出ツ  
後醍醐  
右一代ノ内建武中興三年間ハ、政權王室ニ在リ、南朝偏安ノ後ハ政權足利  
氏ニ歸セリ

八變

後村上 長慶 後龜山(北朝ハ光明崇光後光嚴後圓融)  
後小松 稱光 後光園 後土御門 後栢原 後奈良

九變

右九代二百二十三年間ハ、政事室町幕府ヨリ出ツ  
正親町 後陽成  
右二代五十四年間ハ、政權織田豊臣兩氏ニ在リ

十變

後水尾 明正 後光明 後西院 靈元 東山 中御門 櫻町 桃園  
後櫻町 後桃園 光格 仁孝 孝明

十一變シテ始テ神  
武基業ノ正ニ復セ

右十四代二百五十六年間ハ政事徳川幕府ヨリ出ツ  
今上天皇

明治中興政權再皇室ニ歸セリ  
以上年數ハ其大畧ヲ示スノミナリ

(大尾)

### 府縣賣捌書肆

大阪市心齋橋通	松村 九兵衛
静岡市新通一	阪本屋儀助
東京市日本橋通一丁目	大倉 孫兵衛
同 通三丁目	丸善書店
同 京橋銀座四丁目	博聞社
同 神田神保町	中西屋邦太
同 同同	三省堂
同 同同	開進堂
同 同 一ッ橋通町	三光閣
同 同 飯田町一丁目	内藤多吉

明治二十一年八月十四日印刷出版  
同 年十一月卅日印刷二版  
同 二十二年七月二日印刷増訂  
三版出版

著者并  
發行人

新瀉縣平民  
**和田英藏**

東京麹町區飯田町三丁目  
廿二番池菰野由之方寄留

印刷并  
發賣人

東京府平民  
**吉川半七**

京橋區南傳馬町壹丁目  
十二番地

印刷所

**榮泉社**

京橋區三十間堀二丁目  
壹番地

野清編纂

# 通世算術

数学ノ基本ナリ故ニ理論ヲ精確ニセザル可ラス又  
上ニ必要ノ學ナリ故ニ日本近世ノ應用計算上ニ適切  
ナルヘカラス然レハ此實際ノ經驗ト

一富ノ學識ニ備フルニ非ラサレハ成シ難シ  
本書ハ上野先生方明洋五年ヨリ拾五學校  
ノ數學教育上ニ從事セラレ凡ソ

萬有餘ノ生徒ニ授業セラル  
一録ニ必要ナルモニ歐米算術十種ノ内日本近世教  
育ニ必要ナルモニ編纂セラレシモノ

精密ノ理論及數千ノ例題  
尋常師範學校同中學校並ニ之ニ相當スル諸學校ノ算  
科用ニ最モ適切ナリ凡ソ内外ノ算術書中必要ナル術  
細大漏ラズ

近世第一ノ大算術書ナリ  
實ニ又二層所々ニ注意ヲ加ヘテタリ希ク  
卷出版ハ上巻ト均シク陸續愛顧ノ榮ヲ賜ヘテ殊

## ● 下卷

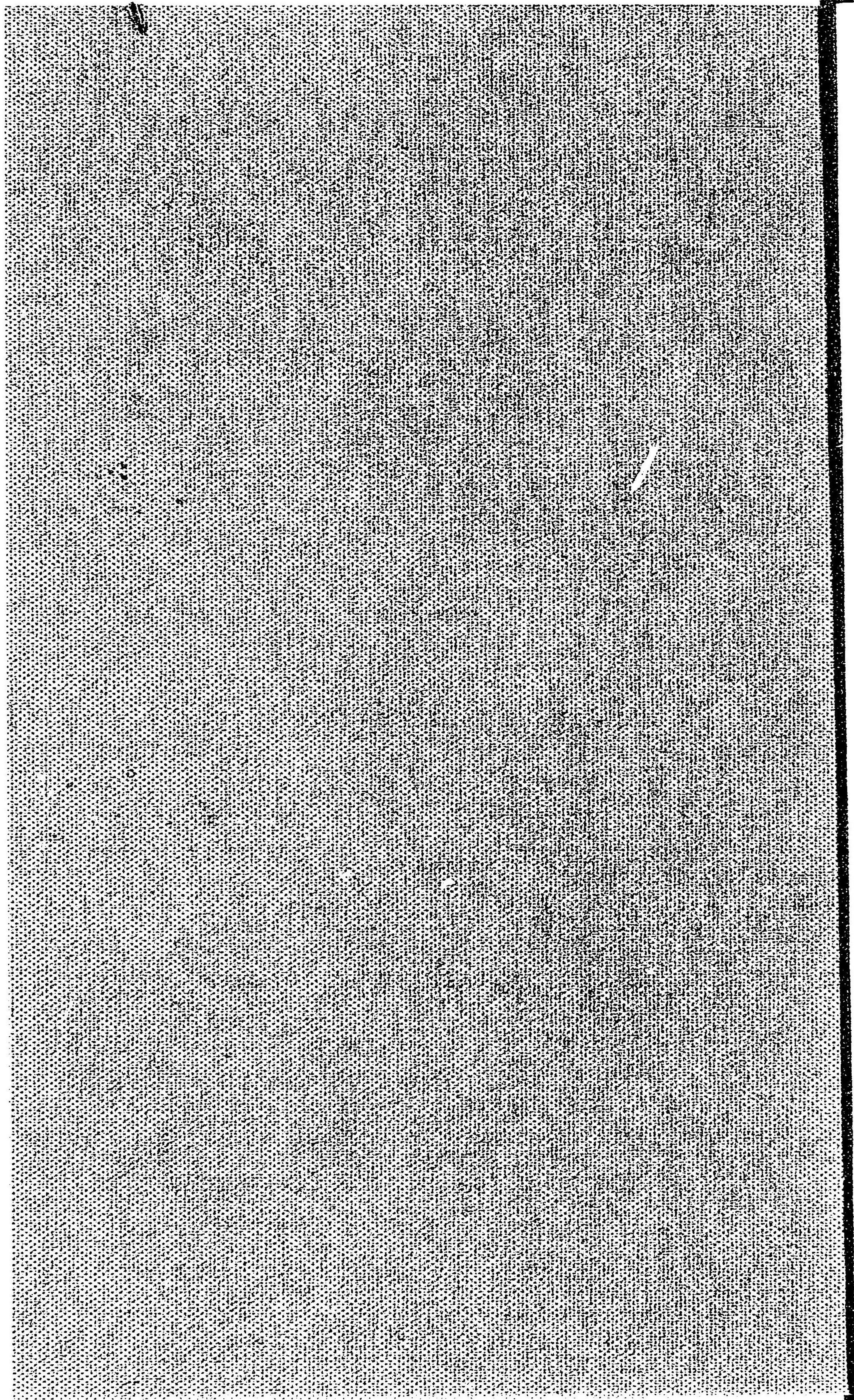
定價金七拾五錢  
郵送料金拾錢

- 東京々橋區南傳馬町吉川半七●全小石川大門町青山
- 清吉●全日本橋通壹丁目大倉孫兵衛●全通三丁目丸善
- 全神田裏神保町開新堂●全中西屋邦太●大阪心齋橋
- 南松村九兵衛●肥後熊本新二丁目長崎次郎●鹿児島吉
- 田幸兵衛●信濃松本高見書店●陸中盛岡便益堂●茨城
- 水戸上市川又銀藏

## 文章會

和裝 半紙本 一冊 定價金拾五錢 郵税金六錢

今の文章ハ漢文直譯のやうあるもあり洋文直譯のやうあ  
るもあり或ハ今古雅俗を雜ヘ或ハ語格句調を濫リ甚しき  
ハ意義の解シ難きもありて亂雜極まれりといふへし日本  
文章會ハ此弊を正シ文義を明カシ文品を高くし國文の精  
華を發揚せしめんことを期するのふして本集ハ同會員の  
佳文を採録せしめりたりと其家り貴賤ハハハハ



1

特20

2

日本歴史試験問題答案

3版

国立国会図書館

049633-000-2

特20-2

日本歴史試験問題答案

和田 英蔵/編

M22

BEM-0336



